

聖徒の道

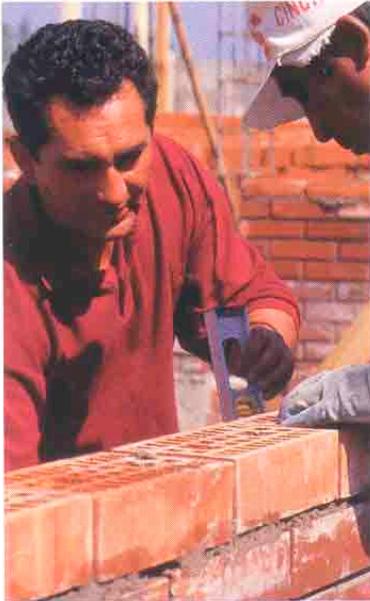
8
1996



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1996年8月号



表紙——チリの新しい教会堂建築の指導にあたるロベルト・フィケロア兄弟。チリでは、教会の建築計画をしのぐ勢いで会員数が急増している。

裏表紙——(左上)チリ・オソルノ伝道部で働く、カラマ出身のチリ人宣教師ユージニア・ベン姉妹。(右上)日曜日の集會に集うビニヤデルマルの教会員たち。(下)1983年に奉獻されたチリ・サンティアゴ神殿(「チリ——豊かに実ったぶどう園」本誌、p.34参照。写真撮影/マイケル・R・モリス)。

こどものページ——「英雄——昔のニーファイのように」(絵/リズ・レモン)両親や教会の指導者、先生など、わたしたちには毎日接する英雄がいます。ほかにもわたしたちは、『モルモン書』に登場するニーファイのような聖文中の英雄と親しくなることができます。勇気と従順、主への信仰に満ちたニーファイの生涯は、すべての人にとって模範です。

一般

大管長会メッセージ——絶えざる啓示 第二副管長ジェームズ・E・ファウスト	2
人気と原則 ニール・A・マックスウェル	14
ホール・イン・ザ・ロック ラリーン・ポーター・ガント	20
チリ——豊かに実ったぶどう園 マイケル・R・モリス	34
ボールいっぱいのピーナツ ロナルド・W・ルック	48

青少年

福音のための時間 ローリー・リブゼー	10
家庭でうまくいかないことがあるときには ジャン・ピンボロー	26
今日と明日のための日記 ジェフリー・S・マクレラン	30
祈り求めると、主はこたえてくださいます エリック・ハンセン	33
教会に戻る サラ・フィッツジェラルド	46

定期特別記事

読者からの便り	1
モルモンメッセージ——大切にされるのはすばらしい、 でも、すばらしい人になるのはもっと大切	9

家庭訪問メッセージ

いつでも、どのような所においても、神の証人になる	25
--------------------------	----

こども

モルモン書物語——キリストのたんじょうのしるし	2
せまくて細い道 ジョセフ・B・ワースリン長老	5
せかいのおともだち	6
むらさき色のわに アルマ・J・イエーツ作	8
おもちゃばこ	13
分かち合いの時間——ほかの人のためにいのる カレン・アシュトン	14
ちいさなみんなのために コーリス・クレイトン	16

聖徒の道 1996年8月号

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——チェコ語、ブルガリア語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会：ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン、ジェームズ・E・ファウスト
十二使徒定員会：ボイド・K・バックナー、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット、ロバート・D・ヘイルズ、ジェフリー・R・ホランド、ヘンリー・B・アイリング
編集長：ジャック・H・ゴーズリンド

顧問：スペンサー・J・コンディー、L・ライオネル・ケンドリック
教科課程管理部責任者
実務部長：ロナルド・L・ナイトン
企画・編集ディレクター：プライアン・K・ケリー
グラフィックスディレクター：アラン・R・ロイボーク

国際機関誌スタッフ
編集主幹：マービン・K・ガードナー
編集主幹補佐：R・バル・ジョンソン
編集副主幹：デビッド・ミッチェル
編集補佐/こどものページ：ディエーン・ウォーカー
工程管理：メアリー・マーティン
出版補佐：ベス・デーリー

デザインスタッフ
機関誌グラフィックスディレクター：M・M・カフサキ

アートディレクター：スコット・バン・カンベン
デザイナー：シェリー・クック
制作主幹：ジェーン・アン・ピーターズ
制作：レジナルド・J・クリステンセン、デニス・カービー、マシュー・H・マックスウェル
予約購読スタッフ

ディレクター：ケイ・W・ブリッグス
配送部長：クリス・クリステンセン
マーケティング部長：ジョイス・ハンセン
聖徒の道1996年8月号第40巻第8号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-3440-2351

印刷所 株式会社 リック
定価 年間予約/海外予約2,400円(送料共)
半年予約1,200円(送料共)
普通号/大会号200円

Copyright©1996 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1994年8月 翻訳承認—1994年8月 原題—International Magazines August, 1996. Japanese. 96988 300

●定期購読は、「『聖徒の道』 予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/00100-6-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「『聖徒の道』のお申し込み先」〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課☎03-3440-2351(代表) ●「『聖徒の道』の配達についてのお問い合わせ」〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター☎044-811-0417

The *Seito No Michi* (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150, U.S.A. and Canadian subscription is \$9.00 per year. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Salt Lake Distribution Center, Church Magazines, P.O. Box 26368, Salt Lake City, Utah 84126-0368, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Salt Lake Distribution Center, Church Magazines, P.O. Box 26368, Salt Lake City, Utah 84126-0368, U.S.A.

読者からの便り

お礼
...

わたしは、多くの教会員の証、特に母の証を聞いて育ちました。どうすれば自分自身の証を得られるか尋ねると、母は聖文と『タンプリ』(英語版)。現在は『リアホナ』に名称変更)を読むように勧められました。

それ以来、聖文と教会の出版物を読むようにできるかぎり努めてきました。そのおかげで、信仰が培われ、疑念を抱くこともなくなりました。そして今、21歳になったら伝道に出たい、という強い望みを抱いています。

フィリピン、カガヤン・デ・オロ伝道部
プレーサー支部
カルビオ・ダーリン

預言者の言葉

預言者からのメッセージを毎月伝えてくれる『リアホナ』(ポルトガル語版)に心から感謝しています。また、『リアホナ』のおかげで世界中の末日聖徒の若者について知ることができました。

ブラジル、ジュンディアアイステーク
バルゼア支部
フェリーペ・コルデロ・ダ・ローシャ

新鮮な話題

正しい生活の指針を与えてくれる『リアホナ』(英語版)を読むのが大好きです。美しい写真やイラストで飾られた記事や物語、メッセージは、読んでいて喜びを感じます。また、ほかの国々の聖徒について書かれた記事を読むと、わたしたちが信仰と主、バプテスマを通じて一つに結ばれていること

を実感でき、様々なチャレンジに立ち向かう勇気がわいてきます。

『リアホナ』が毎月届けてくれる新鮮な話題を通して、信仰をより堅固なものとし、有益な導きや知識を得ることができます。『リアホナ』はまさに喜びの本です。

フィリピン、サン・パブロ伝道部
ルクバン第2支部
V・M・テレコ・ジュニア

人生のともしび

『リアホナ』(ポルトガル語版)は、わたしの生活にとってかけがえのない機関誌です。驚異的な書物と言っても過言ではありません。人生はすばらしいものですが、様々なチャレンジに満ちています。『リアホナ』は、地上でのそのような旅路をいつも明るく照らしてくれるのです。

『リアホナ』に載せられたメッセージはまさに魂を潤す乳香です。それはわたしの証と信仰を強め、心の片隅で時折眠っている希望を呼び覚ましてくれます。

特に好きなメッセージは「強さが墮落を招くとき」(ダリン・H・オークス『聖徒の道』1995年5月号, p.10)と「あなたがたがつまづくことのないためである」(ペリー・M・クリステンソン『聖徒の道』1995年10月号, p.28)です。

わたしの足もとを明るく照らしてくれる、これらのすばらしいメッセージに心から感謝しています。

ブラジル、オランダステーク
リオ・ドセ第1ワード
バレリア・クリスチーナ・デ・ソウサ・フェラス



Lawrence Bennett 1877

絶えざる啓示

第二副管長
ジェームズ・E・ファウスト

福音の特別な一面についてお話ししたいと思います。それは、啓示という神聖な手段を通して、神と絶えず交わることの必要性についてです。この原則はわたしたちの信仰の基盤を成しています。ウィルフォード・ウッドラフ大管長はこう宣言しました。「この地上に主の民として認められた人々がいるときはいつも、主は啓示によって彼らを導かれた。」(The Discourses of Wilford Woodruff『ウィルフォード・ウッドラフ説教集』G・ホーマー・ダラム編, p.138) 最初に申し上げておきますが、神からの靈感は、^{きよ}聖い霊の導きを求めるすべてのふさわしい人に与えられます。とりわけ、^{たまもの}聖霊の賜物を授かった人々にそれが言えます。

しかし、わたしがここで採り上げたいのは、神が預言者を通してそのすべての子供たちと交わられるということであり、個々の教会員やそのほかの人々が受ける個人的な啓示とは異なるものです。預言者、聖見者、啓示者には、神の言葉を授かり、世の人々に宣言する責任と特権が過去にも現在にもあります。会員としても、また親や指導者としてもわたしたちは自分の責任について啓示を受ける権利がありますが、その責任の範囲を超えて神の言葉を宣言する義務も権利もありません。

わたしの話は、信仰箇条の第9節に基づいています。「わたしたちは、神がこれまでに啓示されたすべてのこと、神が今啓示されるすべてのことを信じる。



啓示は、この教会を設立するために必要でした。啓示は、教会を初めのささやかな状態から現在の状態まで引き上げました。絶えざる啓示は教会を最後の状態に至るまで導いてくれるでしょう。

またわたしたちは、神がこの後も、神の王国に関する多くの偉大で重要なことを啓示されると信じる。」

過去の啓示

信仰箇条9節の最初の部分は、「わたしたちは、神がこれまでに啓示されたすべてのこと……を信じる」です。どの時代にあっても、神からその子供たちへのメッセージは、通常、預言者を通して明らかにされてきました。アモスはこう告げています。「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない。」(アモス3:7) 神の代弁者は、何世紀にもわたり、「天の放送局」に波長を合わせ、主の言葉を人々に伝える責任を担ってきました。いつの時代でも、預言者としての重要な条件は、富や地位、役職、外見、学歴、学識などではありません。必要な条件を二つ挙げれば、神により召され、正統な霊的権能を持つ者として知られる人により聖任されることと(教義と聖約42:11参照)、神から啓示を受けてそれを宣言することです。神の道が預言者に啓示されなかったら、これを知る人は一人もいません(『モルモン書』ヤコブ4:8参照)。

何世紀にもわたり、預言者により啓示が少しずつ明らかにされてきました。主はこう言われました。「神は忠実な者に対して、教訓に教訓、規則に規則を加えるからである。そして、わたしはこれによってあなたがたを試み、あなたがたを試そう。」(教義と聖約98:12)

啓示は様々な方法でもたらされてきました。その中には、聖霊の導き(恐らく最も一般的なもの)、神の託宣、神の使いの訪れなどがあります。

現代の啓示

信仰箇条第9節はこう続きます。「わたしたちは……神が今啓示されるすべてのことを信じる。」というわけ

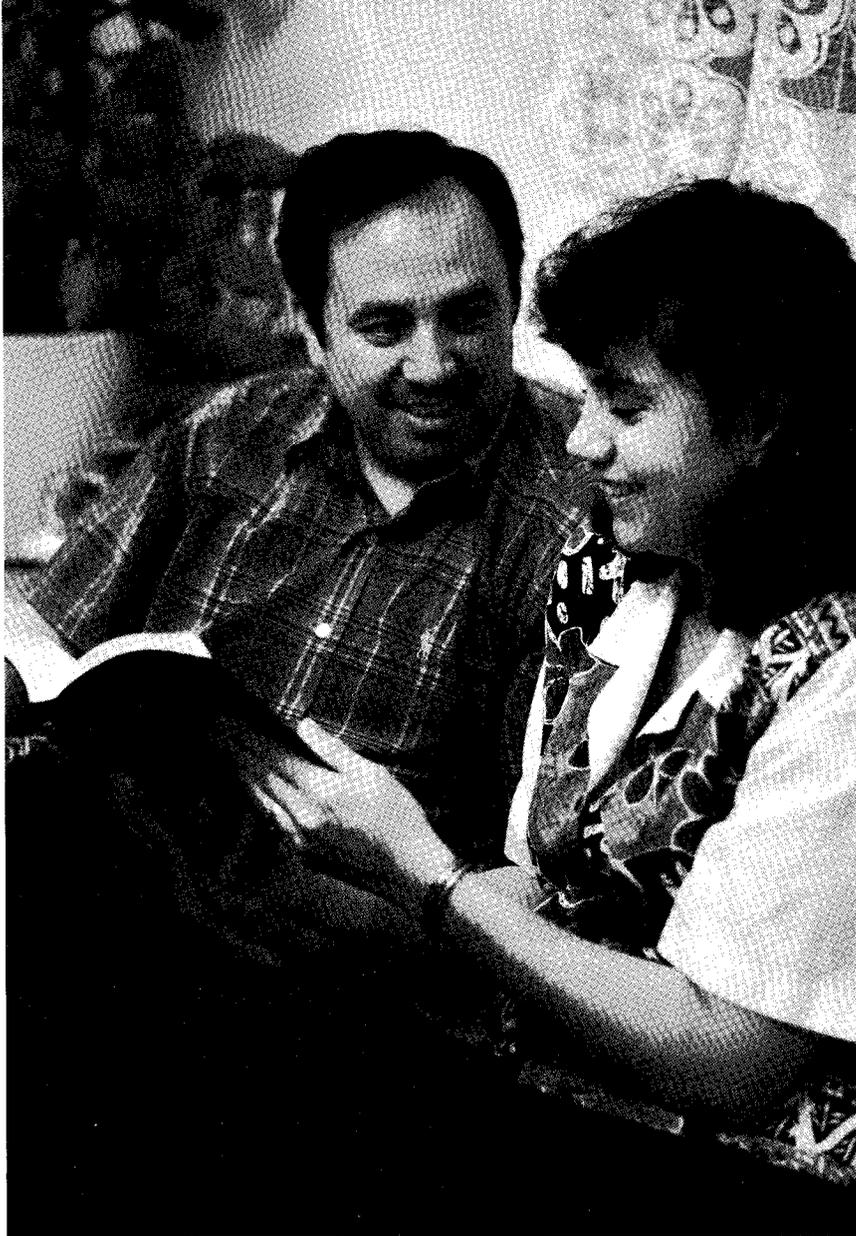
か、多くの人々は、生ける預言者の言葉より、すでに亡くなった預言者の言葉の方を信じやすいようです。わたしたちの時代における最も偉大な啓示者はジョセフ・スミスです。1823年から1843年の苦難の時期に、わずか20年間で134の啓示を受けて印刷に付し、公にしたのです。

それから今日までに92人の使徒が、預言者、聖見者、啓示者として支持されました。しかし、大管長としてジョセフの跡を継いだ預言者、聖見者、啓示者だけが、地上におけるキリストの王国のすべての鍵^{かぎ}を行使できる使徒でした。

わたしたちは今、預言者ゴードン・B・ヒンクレー大管長に導かれ、勇気と確信をもって、雄々しくまた大胆に進んでいます。ヒンクレー大管長はあらゆる面で、わたしたちが支持するにふさわしい人です。35年間、主イエス・キリストの使徒として支持されてきました。現在、地上における先任使徒であり、全世界のための預言者、聖見者、啓示者として聖任され、任命されています。教会の大管長として支持されています。地上のすべての神権をつかさどる管理大祭司です。ヒンクレー大管長だけが、王国のすべての鍵^{かぎ}を持ち、この教会の頭であり隅石であられる主イエス・キリストの下でそれらを維持し、行使する人です。大管長会の中であって、二人の副管長に助けられ、十二使徒定員会に支持されて、ヒンクレー大管長はこの業を推し進めています。

この教会の会員は、地上における生ける預言者である大管長を支持しなければ、救い主と完全に一致することはできません。生ける預言者を支持しない人は、その預言者がだれであれ、霊的に死んでしまいます。皮肉なことに、すでに亡くなった預言者にだけ従ったために、霊的に死んでしまった人々がいるのです。また中には、生ける預言者をはっきりと支持せず、陰で巧妙に批判をして自分の立場をよくしようとする人々もいます。

今日においても、現代の預言者たちに天が開かれ、わたしたちは天からの絶えざる啓示に恵まれてきました。



神からの靈感は、聖い靈の導きを求めるすべてのふさわしい人に与えられます。会員としても、また親や指導者としてもわたしたちは自分の責任について啓示を受ける権利がありますが、その責任の範囲を超えて神の言葉を宣言する義務も権利もありません。

おもなものに、1918年に与えられた教義と聖約第138章として知られる啓示があります。また最も偉大な啓示の一つが1978年に与えられ、神権と神殿の祝福がすべてのふさわしい男性会員に与えられるようになりました。このように、「教訓に教訓、規則に規則を加え」て、新しい知識と指示が教会に与えられてきたのです。

さらに現代の啓示によって、七十人に地域会長会の一員として働く責任が加えられ、教会中央の管理運営において、大管長会と十二使徒を助け、「教会を築き上げ、すべての国々において教会の諸事をすべて整える」こと

になりました（教義と聖約 107：33）。このほかにも神からたくさんの指示が与えられました。古代と同様に現代でも、与えられた啓示の多くは、福音の教義に関するものでした。中には、教会の管理運営や具体的な指示事項に関するものもあります。その多くは奇想天外なものではありません。ジョン・テラー大管長はこう語りました。「アダムの受けた啓示は、ノアに箱舟を造るよう指示するものではなかった。ノアの受けた啓示は、ロトにソドムを捨てるようには告げなかった。またどちらの啓示も、イスラエルの子孫にエジプトから逃れるように命じてはいない。啓示はすべて、それを受けた人たちのためにある。」（*Millennial Star* 『ミレニアルスター』1847年11月1日付け、p.323）

現代において、神は900万人以上の会員を擁する教会の管理運営について啓示を与えてくださっています。

それは会員数が6人のときとは異なるものです。例えば、映画やビデオ、コンピューター、衛星放送などの近代技術の利用、様々な国で伝道活動を行うための新しい方法や教え方、神殿の場所や建築に関すること、そのほかたくさんの相違をわたしたちは見いだすことができます。

こうした絶えざる啓示は、教会に頻繁に与えられます。ウィルフォード・ウッドラフ大管長はこう述べています。「この力は、全能なる神の懐にあり、僕である預言者が日々シオンを確立するために必要とするとき、神から授けられる。」（『ウィルフォード・ウッドラフ説教集』

p.56) これは教会が使命を果たすうえで欠くことのできないものです。啓示がなければ、わたしたちは行き詰まってしまうでしょう。

将来の啓示

信仰箇条第9節で特に勇気づけられるのは、最後の部分です。「わたしたちは、神がこの後も、神の王国に関する多くの偉大で重要なことを啓示されると信じる。」十二使徒定員会会長代理のボイド・K・パッカー長老はこう述べています。「啓示は教会における不変の原則である。ある意味で、いまだ教会は組織されつつある。光と知識が加えられ、預言が成就してさらに知恵が与えられるとき、教会はまた一步前進するのである。」(The Holy Temple 『^{きよ}聖い宮』[英文] p.137)

この教会は、頭であられる主なる救い主イエス・キリストからの導きを絶えず必要としています。故ジョージ・Q・キャノン副管長は次のように教えました。「わたしたちには『^{かしら}聖書』と『モルモン書』と『教義と聖約』がある。しかし、神の生ける代弁者と主からの絶えざる啓示が与えられていなければ、これらの聖典は、いかなる人をも日の栄えの王国へ導くことはできない。このような宣言はいぶかしく思えるかもしれないが、たとえそう聞こえたとしても確かに真実である。

もちろん、これらの記録には、無限の価値がある。どんなにたたえてもたたえすぎることはないし、研究して研究しすぎることもない。しかし、聖典そのものだけでは、また聖典のもたらすすべての光をもってしても、人の子らを導いて神のもとへ至らせるのに十分ではない。そのような導きを与えるには、神権を持つ生ける預言者と、民の置かれている状況に応じて神から与えられる絶えざる啓示が必要なのである。」(Gospel Truth : Discourses and Writings of President George Q. Cannon 『福音の真理——ジョージ・Q・キャノン副管

長説教・著作集』ジェレルド・L・ニュークイスト編, 1: 323)

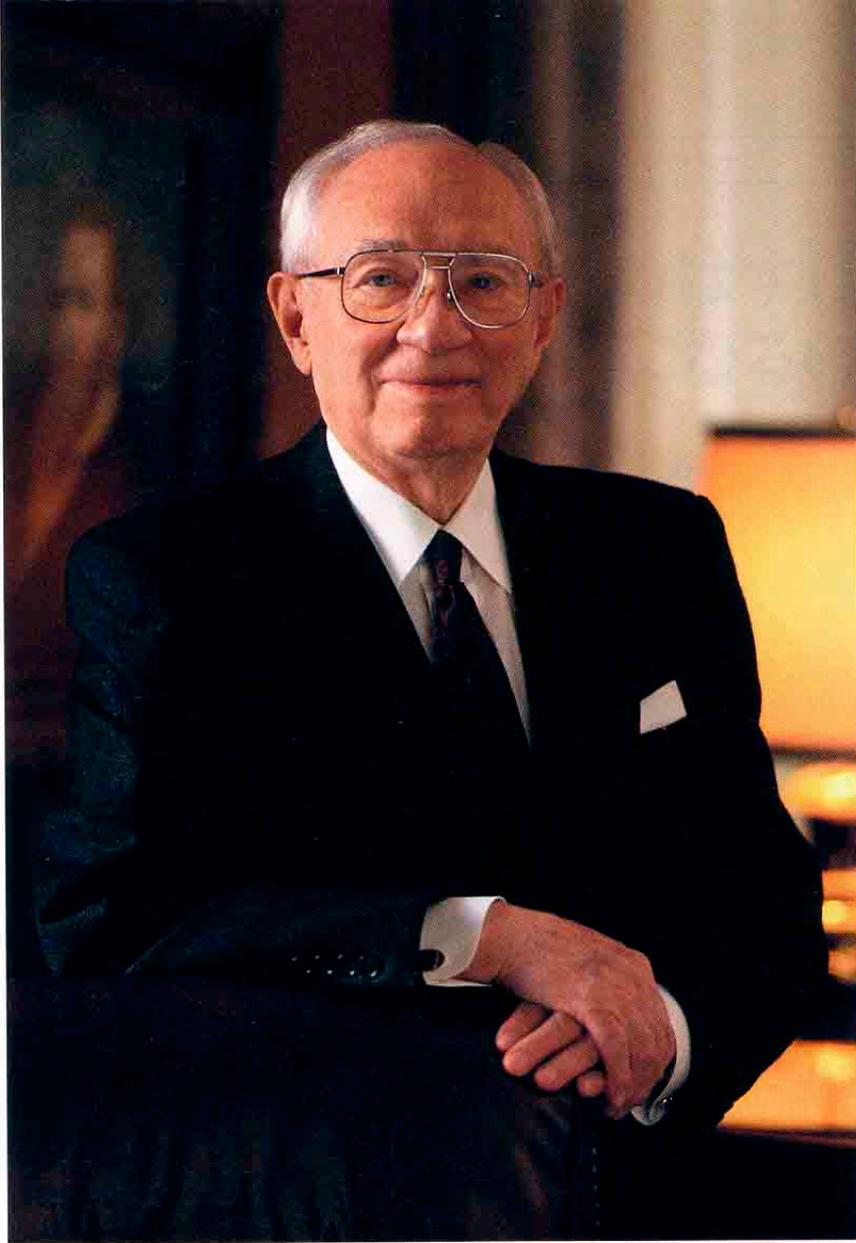
約束された啓示は、いつ与えられるのでしょうか。それは、神だけが御存じです。必要なときに与えられるのです。だれに与えられるのでしょうか。この質問に答えるには、アモスの言葉に戻らなければなりません。「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない。」(アモス3:7) この絶えざる啓示は、世の人々や出来事からの圧力に負けてもたらされるものではありません。いわゆる「社会の進歩に関する啓示」ではないのです。それは神からもたらされるものです。教会は、神の導きと指示の下に、預言者によって治められています。パーリー・P・ブラットはこう明言しています。「律法を定め、裁き、決定を下す力は主のもとにある。主は律法を明らかにし、役員を選んで任命される。また、御心のままに彼らを叱責し、正し、解任される。だから、神と教会とが、直接の啓示によって絶えず結ばれることが必要なのである。」(『ミレニアルスター』1845年3月, p.150)

「大管長は教会の啓示者としてすべての会員のために導きを受ける」という約束を、わたしたちは受けています。わたしたちの安全は、預言者の言葉を心に留め、その勧告に従うかどうかにかかっているのです。

この教会の教義について、十二使徒定員会の故ステイブン・L・リチャーズ長老はこう述べています。「大管長会は、神の律法の解釈においては地上の最高裁判所である。

その機能を果たし委任された権限を行使するとき、大管長会は憲法により制約される。この憲法の一部は明文化されているが、一部はされていない。明文化された部分とは、古代と現代の真正な聖典であり、末日の預言者の記録された言葉である。明文化されていない部分とは、彼らの召しに必要な啓示の霊と神からの靈感である。

大管長会が解釈や決定を下すときには、常に十二使徒



わたしたちは今、預言者ゴードン・B・ヒンクレー大管長に導かれ、勇気と確信をもって、雄々しくまた大胆に前進しています。ヒンクレー大管長だけが、王国のすべての鍵を持ち、この教会の頭であり隅石であられる主イエス・キリストの下でそれらを維持し、行使する人です。

評議会と協議する。十二使徒は啓示により、教会政体の中で大管長会を補佐し、ともに行動するよう任命されている。したがって、これらの役員によって判定が下され、宣言されると、個々の会員が反対の意見を持っていたとしても、すべての教会員を拘束するものとなる。神の王国は、律法と秩序の王国である。」(Conference Report『大会報告』1938年10月, pp.115-116)

では、約束されているように、預言者、聖見者、啓示者が決して人々を誤った道へ導かないと、確信できるのはなぜでしょうか。(ジョセフ・フィールディング・ス

ミス「永遠の鍵と管理する権能」『大会報告1970-72』1972年4月, p.321参照)一つの答えが、教義と聖約第107章の中に重要な原則として記されています。

「いずれの定員会が下す決議も皆、その定員会の全会一致の声によってなされなければならない。……

これらの定員会、またはそれらのいずれかの決議は、完全な義により、聖さとへりくだった心、柔和と寛容により、また信仰、徳、知識、節制、忍耐、信心、兄弟愛、および慈愛により下されなければならない。

なぜならば、これらのものが彼らの内にますます豊かになるならば、彼らは主を知る知識について実を結ばない者となることはない、という約束があるからである。」(教義と聖約107:27, 30-31)

この全員一致の原則により、偏見や個人的な好みは排除されます。この原則から確かなように、世の人が多数決や論議を通して治めるのとは異

なり、神は御霊によって治められます。また、人の持つ最高の知恵や経験を用いるのは、心に深く確かな指示を神から受けるまでのことです。全員一致は、人間の弱さを防ぐものなのです。

神の代弁者の語る言葉が真実かどうか判断する責任は、本人だけに課せられるものではありません。故J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長はこう言いました。「わたしたちは、自ら『聖霊の導きを受けて』いなければ、話し手が『聖霊の導きを受けている』と言うことはできない。」(J. Reuben Clark: Selected Papers on

Religion, Education, and Youth 『J・ルーベン・クラーク選集——宗教・教育・若人』デビッド・H・ヤーン・ジュニア編, pp.95-96) これは、ブリガム・ヤングの勸告と一致しています。「わたしは、この民が指導者をあまりにも信頼しすぎて、自分たちが神によって導かれているかどうか自分自身で尋ねようとしなくなることを、ことのほか憂慮している。わたしが恐れているのは、この民が盲目的な信頼に陥り、よく考えもせず信じて、自らの永遠の行く末を指導者の手にゆだねることである。こうした信頼は、彼らの救いに関する神の目的を妨げ、指導者に対する彼らの影響力を弱めてしまう。この民は、自分が正しい道に導かれていることをイエスの啓示によって自ら知ることができたのである。男女を問わずすべての人は、神の御霊のささやきによって、指導者が主の導かれる道を歩んでいるかどうか、自分自身で知るよう努めなければならない。」(Discourses of Brigham Young 『ブリガム・ヤング説教集』ジョン・A・ウィットナー編, p.135)

啓示は、この教会を設立するために必要でした。啓示は、教会を初めのささやかな状態から現在の状態まで引き上げました。啓示はわき出る泉のようにもたらされました。絶えざる啓示は教会を最後の状態に至るまで導いてくれるでしょう。しかし、クラーク副管長が述べたように、わたしたちに必要なのは多くの預言者や別の預言者ではなく、多くの「聞く耳を持つ」民なのです(『大会報告』1948年10月, p.82)。

預言者、聖見者、啓示者が、完全無欠な人々であるとは言えません。しかし、これらの人々と席を共にした者として、わたしはへりくだり申し上げます。彼らの最大の願いは天父の御心を知って行くことにあります。この教会の最高評議会に座を占め、靈感により決断が下される場にいたことのある人々は、この光と真理が人間の知恵や理性を超えたものであると知っています。天から下る露のように神からの靈感が心に深くもたらされ、わた

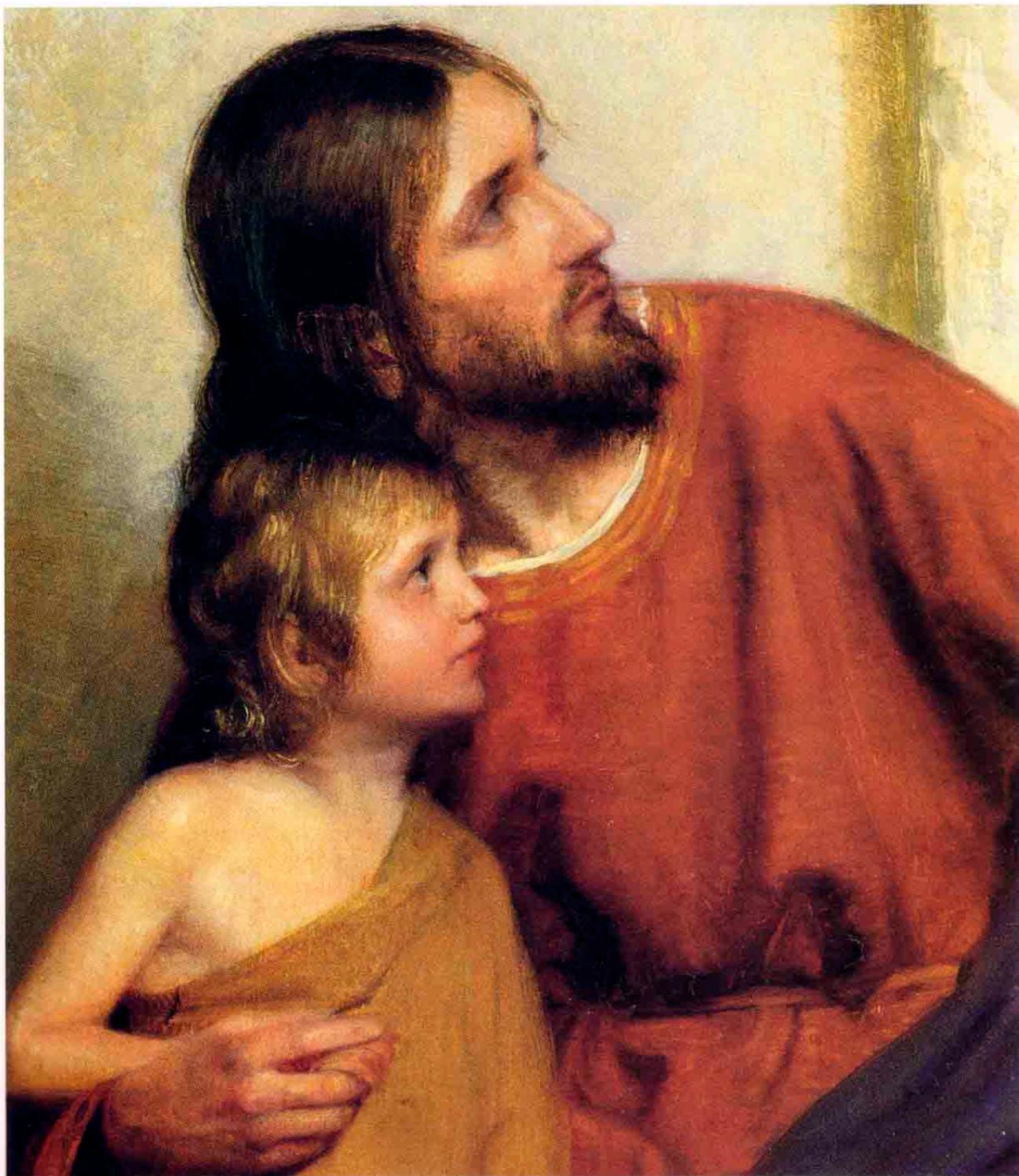
したち個人に、また全体に与えられるのです。そのような靈感により、わたしたちは完全な一致と調和の中で前進できるのです。

わたしはへりくだり証します。主はその僕を通して教会を導いておられます。彼らは高潔で正しく、献身的な主の僕です。わたしたちが主の御霊に従い、主から任命された代弁者の声に耳を傾けられますようお祈りします。啓示という手段なしに、わたしたち人間は、神の目的を知ることができないからです。□

ホームティーチャーへの提案

1. 主の預言者、聖見者、啓示者には、神の言葉を授かり、世の人々に宣言する責任が過去にも現在にもある。
2. 教会の会員は、地上における生ける預言者である大管長を支持しなければ、救い主と完全に一致することはできない。
3. わたしたちの安全は、預言者の言葉を心に留め、その勸告に従うかどうかにかかっている。
4. 啓示は、この教会を設立するために必要であった。啓示は、教会を初めのささやかな状態から現在の状態まで引き上げた。絶えざる啓示は教会を最後の状態に至るまで導いてくれるであろう。

大切にされるのはすばらしい、
でも、すばらしい人になるのはもっと大切



DETAIL FROM SUFFER THE LITTLE CHILDREN TO COME UNTO ME, BY CARL HEINRICH BLOCH. ORIGINAL AT THE CHAPEL OF FREDERIKSBORG CASTLE, DENMARK. USED BY PERMISSION OF THE FREDERIKSBORG MUSEUM.

福音時間

福音のための
時間

文・写真／
ローリー・リブゼー

彼女にとっては慣れ親しんだ日課でした。朝6時ちょっと前に起きて、6時半のバスで登校。学校は9時間。でも、彼女にとって終業ベルが一日のほんとうの始まりのように思えたものです。学校を出ると、図書館に直行して3時間の復習。午後8時にまたバスに飛び乗り、40分かかって家に帰ると、シャワーを浴びて食事をしてから新聞で世の中の動きについて読み、聖文を読んで床に就きます。エンジェルという英語名を持つ劉冠倫^{リョウクワンリン}は、翌日にはまた同じ日課を繰り返すのでした。

当時のエンジェルにとって自由時間は許されたいざいなくでしたし、それは今も同じです。

厳しいスケジュールだったことはエンジェル自身も認めています。でも、そのかいがあったとも感じています。エンジェルは去年、台北第一女子高校を卒業し、現在は中国本土に近いこの島国で最高の大学、国立台湾大学の一年生です。

エンジェルは厳しい高校生活を耐え抜き、卒業した今も、恐らく前以上に忙しい日々を送っています。大学のスケジュールは高校時代と比べてあまり変わっていません。実際、ほぼ同じと言っていいほどです。違うのは、彼女の取っている大学の学科の方が少し難しいことだけです。しかし、エンジェルは忙しいスケジュールをどうこなしていけばよいか十分に心得ています。

「聖文を読んで祈ることにより、霊性を高めることができます」と彼女は言います。「それを怠って日曜日の集会に行かなくなれば、簡単に学校や人生に失望したり、ふさぎ込んでしまったりします。でも、聖餐会^{せいさんかい}に行ってお話^{わたりごと}に耳を傾けると、自分の人生がもっ

と肯定的で楽しいものに思えてくるのです。人生で最も大切なものは、自分自身の霊性だと思えます。」

大学進学^{べいせい}の準備をしながら、台北東ステークの北投^{ペイトウ}ワードで聖餐会のピアニストの召しを果たし、活発な会員でいるように努力した2年間は、エンジェルにとって大変な日々でした。

一日の大半は、英語、数学、国語、物理、化学、生物、体育、音楽、それに家庭科（料理と裁縫）の勉強に費やしました。

エンジェルにとって、聖文の学習は勉強からのうれしい気分転換でしたが、友人たちには、彼女がなぜ学校の勉強時間を犠牲にしてまで宗教に時間を使うのか、理解できないようでした。「友人の多くは、わたしが教会のことに時間を費やすのを不思議がっています。クラスメートのほとんどが宗教を持っていないんです」とエンジェルは言います。生徒数4,000人以上の台北第一女子高校で、教会員は彼女一人だけでした。「中にはわたしと宗教について話し合う生徒もいましたが、ほとんどの場合、学校の勉強のじゃまになるのになぜわたしが末日聖徒でいるのだろう、と不思議がっていました。」

ある日、エンジェルはそんなクラスメートの一人を教会に誘いました。その友達の教会での経験はおおむねよいものだった、とエンジェルは語ります。彼女は後でエンジェルにこう話してくれたそうです。「宗教はよいものだと感じるし、わたしもいつか、宗教心を持つことについて考えてみるかもしれないわ。ただし、大学を卒業した後ね。」エンジェルは言葉を続けます。「彼女は教会のために使う時間がないと思ったのでしょうか。」



台湾のエンジェル劉。^{リョウ}

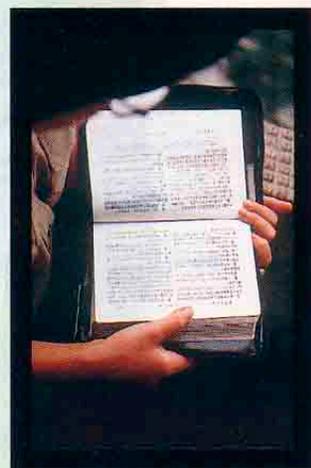
「わたしの人生で
最も大切なのは、
自分自身の霊性だと
思います。」



エンジェルは、
高校をトップクラス
の成績で卒業した。
生活の中に福音の
影響力が
なかったなら、
それは不可能だった
でしょう、
と彼女は言う。



学業で忙しい中でも、
エンジェルは
ワードのピアニスト
を務めている。



「聖文を読んで
祈ることにより、
自分の霊性を
高めることが
できます」と
エンジェルは
語っている。

エンジェルリウチュンシンの父劉春新も、娘が福音を学ぶのに費やしている時間が有益なものだと、完全に納得しているわけではありません。そんな時間があつたら、勉強したり、図書館に行ったりする方がよいのではないかと、何度も疑問に思ってきました。1984年にエンジェルの母キャスリーンが教会に入ったとき、エンジェルはほんの7歳でした。劉春新は奥さんのバプテスマに反対はしなかったものの、自分が一緒に教会に入ることはまったく関心を示しませんでした。しかし、エンジェルが8歳になったときには、娘であるエンジェルのバプテスマを許可してくれました。

「父はとてもおもしろい人です」とエンジェルは付け加えます。「時々、『試験の前だから、教会には行かない方がいいんじゃないか』と言うことがあります。それなのに、別のときには、教会に遅れてほしくないから急ぎなさいと言うのです。」

エンジェルはさらにこう話してくれました。「両親はわたしに大きな期待を寄せています。父はわたしが教育を受け続けて良い成績を取ることで、家族にすばらしい影響を及ぼすことができると考えているのです。でも、わたしが教会に活発に集うことによっても家族に大きな影響を与えられる、と思うんです。」

「台湾では、教会員の両親が子供たちの良い模範となっています」と元地区代表でステーキ会長でもあったケント梁リヤンは言います。「教会へ行って召しを果たす両親の姿を、子供たちが目にする事ができるからです。しかし、両親が教会員でない子供たちの中には、日曜日に教会に行かないで休んでしまいたいという誘惑に駆られる人た

ちが少なくありません。それに、学校での競争があまりに激しいので、時には学校のことしか目に入らなくなってしまふこともあります。彼らは、教会に行くべきか、図書館に行くべきか決めかねてしまうのです。また、将来のことをあまり深く考えていないために、教会のことをあまり気にかけなくなってしまふ人もいます。今の台湾の子供たちの多くは、学校のことしか頭にないのです。」

だからこそ、エンジェルのような人がますます驚嘆に値するのです。彼女は高校をトップクラスの成績で卒業しました。しかし、生活の中に福音の影響力がなかったならそれは不可能だったでしょうと言います。「特に高校3年のとき、教会が助けになりました。クラスメートの多くが学校のことで落ち込みやすくなっているのに気づきました」と彼女は言います。「でも、わたしは、精いっぱい努力をすれば、天のお父様が助けてくださる、と確信していました。そしてたいていの場合、思っていた以上の成績を取ることができました。」

現在、医師を目指して勉強を続けるエンジェルの大学生活は多忙を極めています。忙しい一日を終えて家に帰っても、エンジェルは聖文を読む時間を取るのを忘れません。聖文を閉じると午後10時半です。エンジェルの一日がやっと終わるのです。目を閉じる彼女には、自分が大学で良い成績を取っていて、そしてそれ以上に大切なこと、つまり忙しい生活の中でも福音のために時間を取っているという自覚があります。これから8時間もたたないうちに、彼女の日課がまた繰り返されます。今夜もきっと、エンジェルは深く安らかな眠りに就けることでしょう。□



「特に

高校3年のとき、

教会が助けに

なりました。

精いっぱい努力を

すれば、

天のお父様が

助けてくださる、と

確信していました。」



DETAIL FROM LEHI'S DREAM, BY GREG K. OLSEN

人気と原則

様々な観点から見て、この世は福音の目指すところと反対の方向に進んでいます。契約の民であるわたしたちは、行いを主に対して忠実なものにしなければなりません。

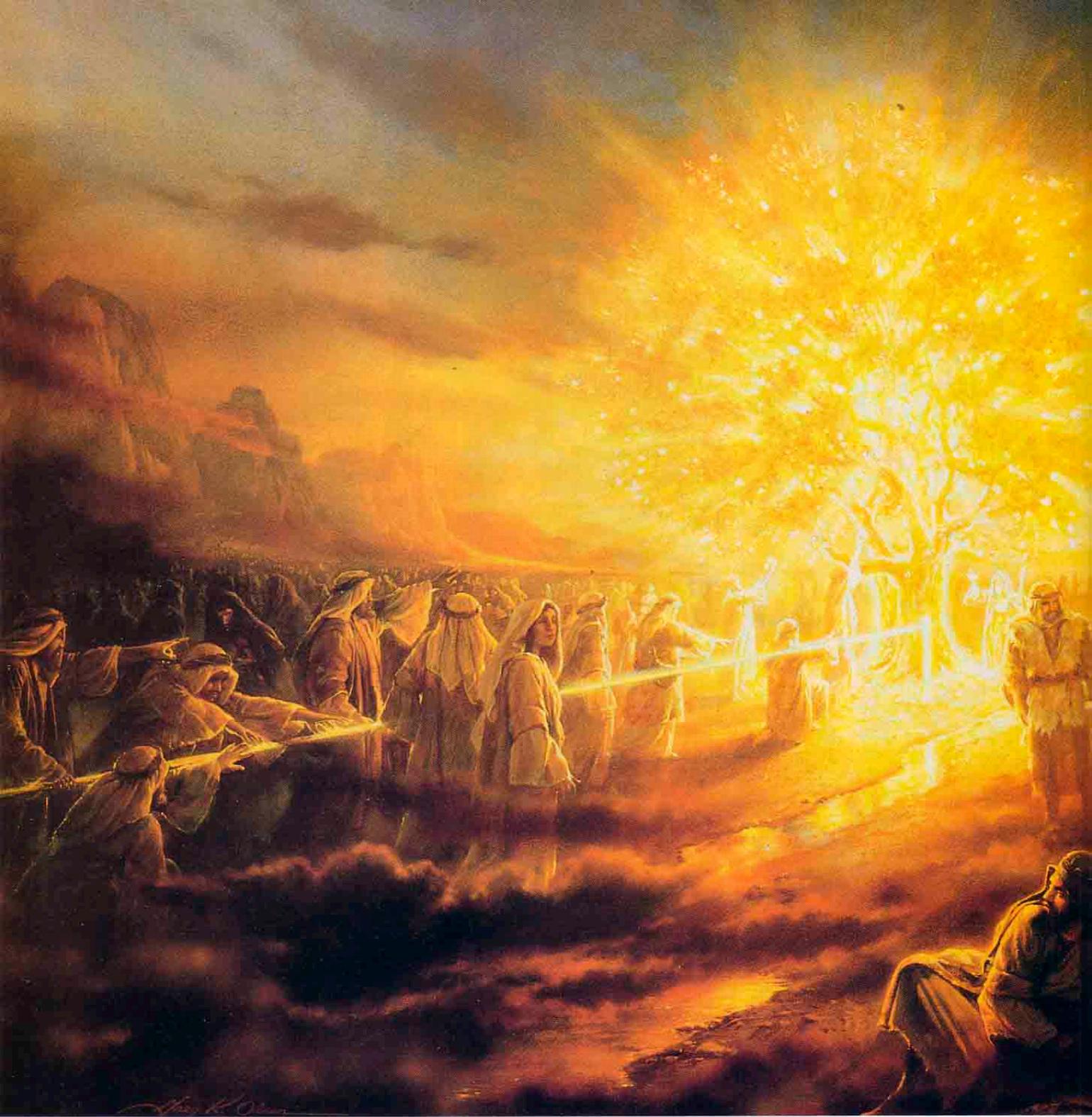


十二使徒定員会会員
ニール・A・マックスウェル

表 面化しているいないを問わず、
教会員が世の習いに足並みをそろえるようになると、そこには現実の危険が伴います。様々な観点から見て、この世は福音が目指すところとは反対

の方向に進んでいます。さらに言えば、契約の民であるわたしたちは、行いをこの世のカイザルではなく、主に対して忠実なものとしなければなりません。しかし、わたしたちを引きずり込もうとする世の力は現に存在し、しかもとどまるところを知りません。確かに、世の流行に従うのはむなし結果

あざけりの指をもってわたしたちを指す人々の中には、かつて鉄の棒をつかんだことのある人々が多少含まれています。リーハイが示現で見たように、この離脱者たちは恥じ入って道を踏み外し、あの広くて大きな建物の中にあざける人々の群れに歩調を合わせてしまいました。



を追い求めることにすぎません。「なぜなら、この世の有様は過ぎ去るからである」とあります(1コリント7:31)。

ブリカム・ヤング大管長はしばしば、「人気」について、そしてそれが人を破壊へと陥れる可能性があることを、次のような痛烈な言葉で表現しています。

「わたしは『モルモニズム』に人気が集まることを好まない。……キリストの教えが世の人からもてはやされるよりも、聖徒たちが苦しみや悲しみを味わい、苦難や試練を経験する方がよい。」(Journal of Discourses『説教集』10:297)

N・エルドン・タナー副管長はこう

警告しています。「誉れや名声に対するこの願望は、少なからず人の行動を左右する。そしてその誘惑に屈服するとき、自分ではほんのおつきあいだと思っても、実際には自分の性格までもねじ曲げてしまうのである。」(『聖徒の道』1976年2月号, p.109)

さらに言えば、わたしたちは身を滅

人が善を悪、悪を善と言っても、教会の標準はいつも変わりません。もしわたしたちが柔和で聖霊の賜物を得ていれば、わたしたちの欲望は流行によって振り回されはしないでしょう。

ほしかねない人気を避けるだけではなく、「その日、悪魔は人の子らの心の中で荒れ狂い、人の子らをそそのかして善いことに対して怒らせ」（2ニーファイ28：20）でも、驚かないようにしなければなりません。

人が善を悪、悪を善と言っても（イザヤ5：20参照）、教会の標準はいつも変わりません。末日聖徒が「あざけりの指が差し示す場所にとどまらなければならない」のは当然のことです（ブリガム・ヤング『説教集』12：272）。あざけりの指がわきにそれる可能性はあまりありませんから、わたしたちはそれを「気に留めな」ようにしなければなりません（1ニーファイ8：33）。皮肉にも、あざけりの指をもってわたしたちを指す人々の中には、かつて鉄の棒をつかんだことのある人々が多少含まれています。リーハイが示現で見たように、この離脱者たちは恥じ入って道を踏み外し、あの広くて大きな建物の中のあざける人々の群れに歩調を合わせてしまいました（1ニーファイ8：27、33参照）。

人気というものは、都合の悪い招かれざる警報を鳴らして、わたしたちの霊を守る良心という内なる歩哨をも、打ち負かすことがあります。

わたしたちは好んで非難を求めているわけではありません。それは認めましょう。非難は何もしなくても来るものだからです。また、やがては義の状態がみなぎり、地上を支配するようになることも認めましょう。エノクの町には幸福とまれに見る義がありました。そこではその特殊な文化の中で、神の原則が正当な人気を集めていました。しかしながら今日の世界は、様々な人種や国民の中には善良で尊敬すべき個人が大勢いるものの、決してエノクの町のような姿を反映しているとは言えません。

もしわたしたちが柔和で聖霊の賜物を得ていれば、わたしたちの欲望は流行によって振り回されはしないでしょう。ニコチンであれ、アルコールであれ、ポルノグラフィであれ、人の心や行動への故意の操作は現実に行われています。「終わりの時に陰謀を企てる人々の心の中に今あり、また将来も……悪ともくろみ」があるからです（教義と聖約89：4）。

わたしたちが住んでいる現代社会の様相を考慮してみると、トマス・S・モンソン副管長が教会員に対して「原則よりも人気を重視」しないように警告したのはうなずけます。わたしたちはアルコールを拒むのと同じように、ふさわしくない映画を見るのを拒めるでしょうか。たばこを拒むのと同じように、卑わいな冗談を言って笑うのをやめられるでしょうか。

ほとんどの場合、教会員は数的にきわめて少数の状態です。しかしほんとうに大切な事柄については、独り善がりではなしに際立った存在となっているのでしょうか。

人気を得るために世の愚行や流行に迎合しなければならないとすれば、それはつかの間の賛同を得る代価としては、きわめて高価なものです。ポンテオ・ピラトのことを考えてみてください。彼は群衆の暴動を避けるために、意に反して「人気のあること」を行い、群衆の歓心を買いました。わずか数年後にこのピラトが、サマリヤの暴動によってその地位を追われたのは、皮肉なことです。

人類の歴史を概観するとき、人はそこから得る教訓をすぐに忘れてしまうことが分かります。例えばウィンストン・チャーチルは第二次世界大戦を扱った著作の最終巻のタイトルに、次のような洞察に豊んだ言葉を選んでいました。「偉大な民主主義がいかにして勝利を取めたか、またそれによって、かつて民主主義の命を風前のともしびにまで追い込んだ愚行をいかにして再開できたか。」（“Triumph and Tragedy” *The Second World War* 「勝利と悲劇」『第二次世界大戦』6：ix）

人気のバロメーターとして一つ挙げられるのが、個人に対して何の要求もせず、誤った自由を与えるというものです。しかし、そうした承認には真の自由はありませんし、個人の義務を回避したのでは真の解放は得られません。この世の知的圧力がとどまることを知らず押し寄せて来ます。十二使徒定員会のアルバート・E・ボーエン長



老はこう述べています。「人の同意を得、人から褒めそやされることにより、攻撃を避ける人は……人の論理を取り入れ、それを神の子の教えと融合させようという人です。しかし、この二つが混じり合うことはありません。」(Conference Report 『大会報告』1952年4月, p.66)

たとえ正しい原則に雄々しく従った

としても、わたしたちがしなければならぬのは、自分自身ではなくその正しい原則の方の人気を高めるように努力することです。中央幹部は愛と支持を通して教会員から多大な祝福を受けており、これからもその愛と支持を必要としています。その中央幹部の兄弟たちに十二使徒定員会のマーク・E・ピーターセン長老はこう警告しまし

救いに至る狭くて細い道は、残念ながら旅する人が少ないのです。このようにわたしたちは、群れと一緒にの道を歩みながらイエスの方に向かって進むことはできません。福音が教えるのは変化の中の不変性であり、移り変わる流行や傾向に自分を合わせていくことはありません。

た。「称賛がわたしたちの身を滅ぼすことがあります。」イエスが栄光を常に御父に帰されたことは示唆に富んでいます(モーセ4:2;教義と聖約19:19参照)。

人気はわたしたちの感覚をまひさせることがあります。そうすると、わたしたちは人気を切望するようになり、世の人々からの称賛や優しい承認が与える「注射」をしきりに求めるようになります。鼻を高くした人が頭を垂れるのは容易ではありません。

人気危険なのは、特にそれが自分自身に思いを集中させ、人の必要に注意を向けられなくなるものだからです。自分にも他人にも認められることに気を取られてしまい、ほんとうに必要なことが「見過ごしに」され、「注意を払わ」れなくなってしまうのです(モルモン8:39)。こうして、人気は二つの偉大な戒めを守ろうとする人にとって障害になってしまいます(マタイ22:36-40参照)。

もちろんわたしたちは皆、愛される

ことから得られる安心感を、そして愛そのものを必要としています。そうです。人に認められることは健全なことです。同様に、聖徒たちの共同体の中で同じ考えを持つ人と生活する喜びを味わうのもよいことです。しかし、人に好かれることを好む姿勢は不健全です。また、人にどう見られるかを懸念しすぎることは優先順位の狂いにつながり、イエスの面影をわたしたちの顔に刻む（アルマ5：14、19参照）ことがおろそかになる可能性があります。

確かに、教会が広く知れわたり、教会の教えが人々から敬意をもって誠実に受け入れられることには価値があります。また、教会員が現代社会の具体的な問題に対して正しく賢明な影響を及ぼすことにも価値があります。それはとりもなおさず、わたしたちが教会員としてまた市民として、「自由意志によって」「善いことに熱心に携わ[る]」ように指示されているからです（教義と聖約58：27）。しかし問題は、人気取りではなく正しい原則に基づいて「熱心に携わ」れるかどうかです。

人は気高い人格が高まると、霊的な求心力が増していきます。そして、思慮深く賢明な人々からの特別な敬意を受けるのみならず、地上の多くの同胞である霊たちを導けるようになります。彼らの多くは、教会員ではないにもかかわらず、穏当で、尊敬に値する、立派な人生を送ります。彼らが完全な真理を手にはできないのはただ一つ、「見いだす場所を知らない」からです（教義と聖約123：12）。

教会員は、その占める場所は小さいものの、全地の面に広がることでし

う。そして、「義と神の力とをもって、大いなる栄光のうちに武装」します（1ニーファイ14：14）。この後半に述べられた祝福は、この世的な人気によって得られるいかなる利益をも陵駕するものです。

イエスは終わりの時代の様子を、わたしたちに次のように教えてくださっています。滅びに至る門は大きく、その道は人気があり広々としている（マタイ7：13参照）。救いに至る狭くて細い道は、残念ながら旅する人が少ないのです。このようにわたしたちは、群れと一緒に道を歩みながらイエスの方に向かって進むことはできません。しかしながら、中には悪魔を怒らせることなく主に仕えようとする人もいます（ジェームズ・E・ファウスト『聖徒の道』1995年11月号、p.2参照）。またある人々は、マリオン・G・ロムニー副管長が警告したように、「主に対して単にアドバイザーという資格でのみ仕えよう」とします。

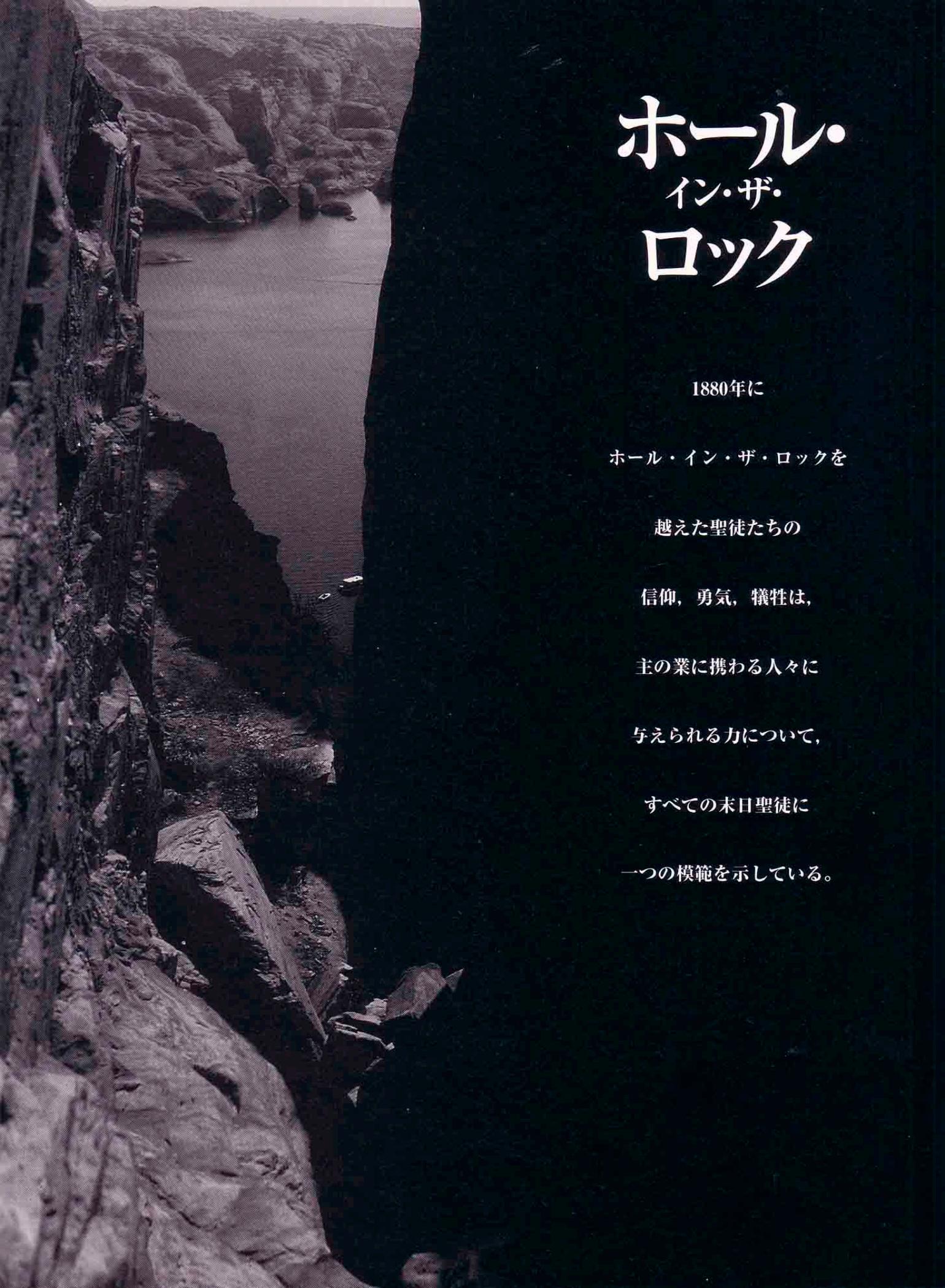
わたしたちがこの世に妥協したのでは、この世を良くはできません（ローマ12：2参照）。福音が教えるのは変化の中の不変性であり、移り変わる流行や傾向に自分を合わせていくことではありません。イエスに固く従う人々はカメレオンのようにはなりません。常に変化し続ける状況に身をゆだねてそれに合うように体の色を変えるようなことはしないのです。

わたしたちの時代は「すべての人が自分の道を……歩む」時代です（教義と聖約1：16）。だからこそ、自己陶醉の危険性には特別な注意を払わなければなりません。それはもしかすると、

「おめかし」の中の最も危険な形かもしれない。ある解説者がいみじくも次のように表現した、致命的な幻想へとわたしたちを誘い込む可能性があるからです。

「もしも神が人と人とのつながりに心を留める政治的な存在者であり、その見方が教義の要点すべてにおける人の偏見に例外なく呼応するのであれば、神が我々に要求するものは政治が要求するものと何ら変わりがない。それに加えて、神が有限で進歩する純粋な愛の存在であるならば、我々が次の日曜日に教会を休み、映画を見に行くのも無理からぬことである。なぜなら、このすべてを愛し、すべてに耐え、すべてを赦す神に対して何の恐れも感じないのであれば、我々の礼拝は我々自身の倫理規準への自己礼賛以外の何ものでもないからだ。わたしは無神論者の一人としてこの神が好きである。毎朝ひげをそるときにその神と会えるのはよいことである。」（ユージーン・D・ジェノベース "Pilgrim's Progress" *The New Republic* 「巡礼の道」『ザ・ニュー・リパブリック』1992年5月11日号、p.38、下線付加）

原則から離れた人気というものは、常にこの世にこびを売ることを求めます。しかしいつの日か、今人気のある場所は、そこに住んでいた人があの栄光に満ちた恐るべき日を迎えるためにその場を離れたため、だれも見向きもしない寂しい所となります。そしてその日、すべてのひびがかがみ、すべての舌がイエスがキリストであると告白するのです。（ピリピ2：10-11参照）□



ホール・ イン・ザ・ ロック

1880年に

ホール・イン・ザ・ロックを

越えた聖徒たちの

信仰，勇気，犠牲は，

主の業に携わる人々に

与えられる力について，

すべての末日聖徒に

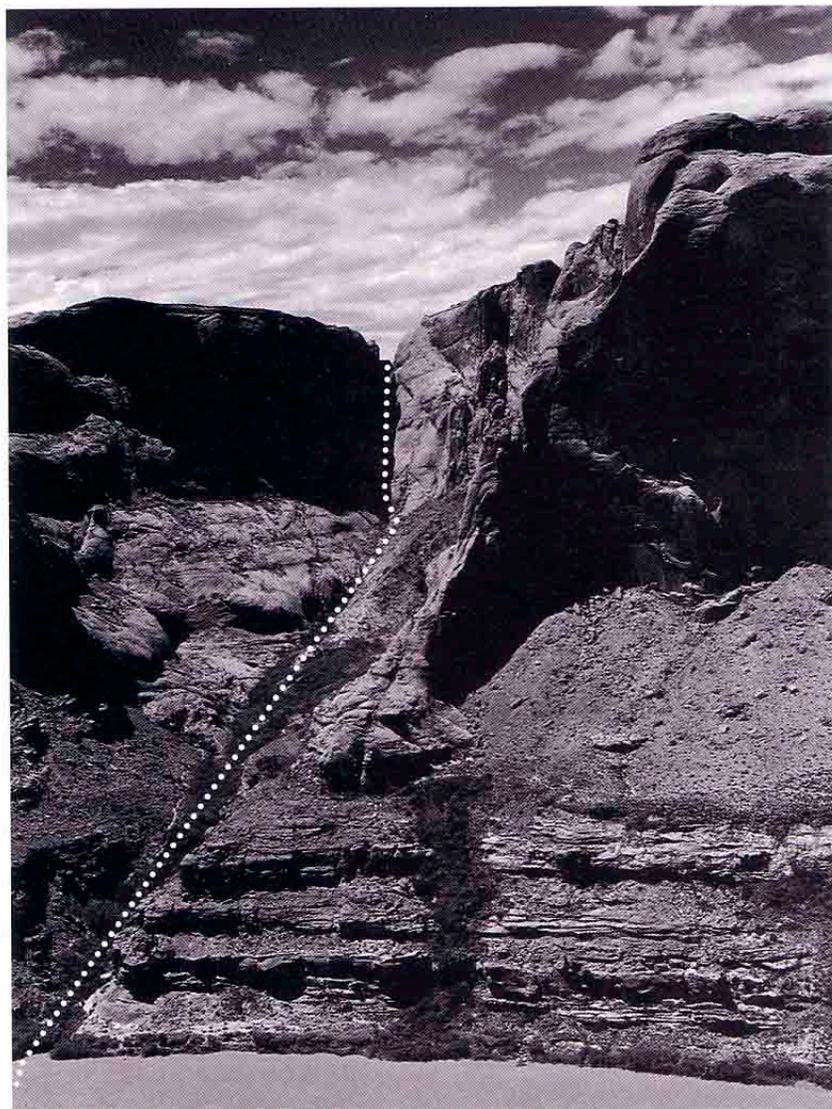
一つの模範を示している。

ラリー・ポーター・ガント

「戻すべきか、進むべきか」、1879年12月3日の夜、開拓者たちの頭にあるのはそのことだけでした。ジョン・テラー大管長はこの開拓者の一団を、現在のユタ州南東部に当たる、サンファンミッションに入植するように招きました。しかし当時は、そこに移住をするにしても、どのように進むかさえはっきりしていないような状況でした。

開拓者たちは高地に位置するフォーティマイル・スプリングに野営しました。この一隊を率いていたサイラス・S・スミスは、状況の深刻さに気づいていました。約80台の荷車隊は、小さな子供も含め、男女合わせて250人ほどの編成でした。そして何百という家畜もいました。時はすでに冬、春まで野営を続けるには物資の備えもあまりに貧弱でした。

スミス隊長は自分のテントの中に座して、考えに考え抜きました。戻することは不可能に思えました。西の方角を振り返ってみても、エスカランテ山地を進んできた道はすでに雪で深く覆われ、家畜のえさになる草はまったくありません。そのうえ彼らはテラー大管長から与えられた、サンファンミッション入植の招しを非常に重いものとして受け止めていました。それはもともと、西部の多くの地域に入植地を築き上げるといふ、ブリガム・ヤング大管長が打ち出した計画の一環を成すものでした。彼らにとって、そのような招しを拒否するなど、とても考えられ

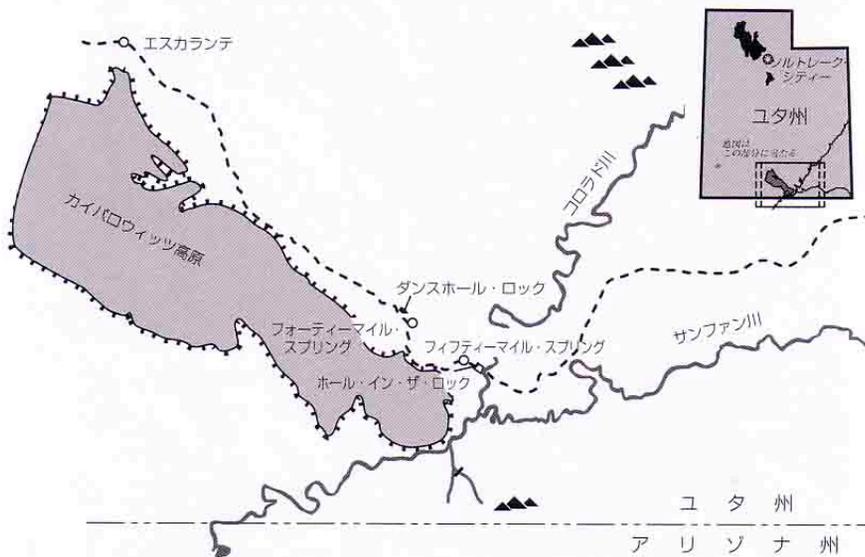
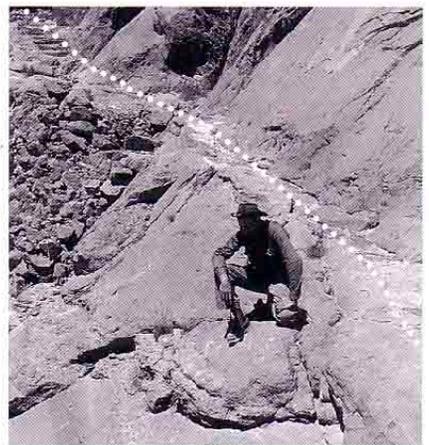
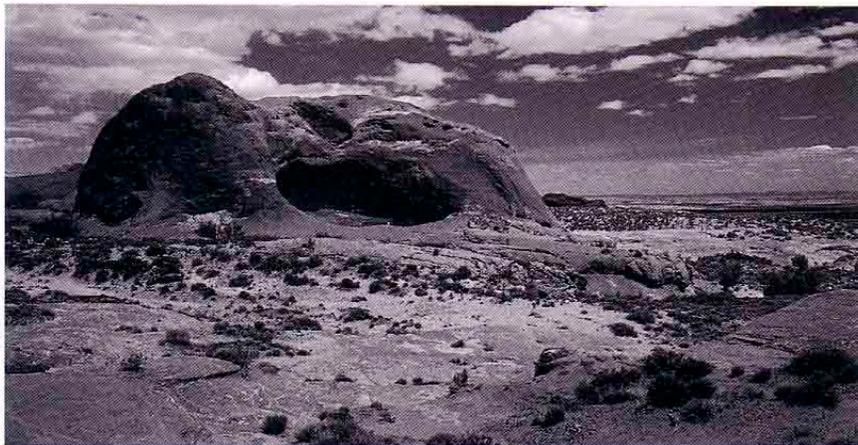


左——現在のホール・イン・ザ・ロック^{がけ}。崖の下に見えるのは、1964年にコロラド川に建設されたダムによってできたパウエル湖。上——パウエル湖から見上げたホール・イン・ザ・ロック。点線部分が、荷車が通った坂。全行程の3分の1に当たる。

ないことでした。

彼らが進む東の方角には、道もなく水も乏しい、起伏の激しい地域が300キロ以上も続いていました。前進するという決定を下せば、ホール・イン・ザ・ロックを越える覚悟をしなければなりません。ホール・イン・ザ・ロックは、コロラド川沿いに続くグレンキ

ャニオンの絶壁の西側に当たる地点で、その崖には狭くて深い裂け目^{がけ}がありました。そこは近道でしたが、非常に危険な場所でした。しかし、ほかに、進めるコースといっても、600キロ以上も離れた所にたった一つあるだけでした。調査隊の報告は悲観的なものでした。ホール・イン・ザ・ロック



を越えるということは、高さにして610メートル、その3分の1は45度の急こうばいの所を、荷車や家畜を進ませるということです。

多くの人がそれは不可能だと思いました。討議に討議を重ねた末にある人が、決定はスミス隊長と主にゆだねようと提議しました。1 全員一致でその提議が支持されました。それは、「主が自分たちの指導者に靈感を与えてくださるに違いない」という、彼らの信仰の表れでした。

翌朝、スミス隊長は集会を開いて、前進するという決定を発表しました。この隊の一員だったクメン・ジョン

ズは、「その決定的な発表に、隊員たちは身を震わせた。そして、皆の顔が輝き、気持ちが奮い立った」と記録しています。その集会で多くの人が、前進の決定を支持して、証を述べました。そしてだれかが歌を歌い始めると、ほかの人たちもそれに合わせて歌い始め、12月の寒空の下で「主のみたまは火のごと燃え」（『賛美歌』3番）の歌声が響きわたったのです。

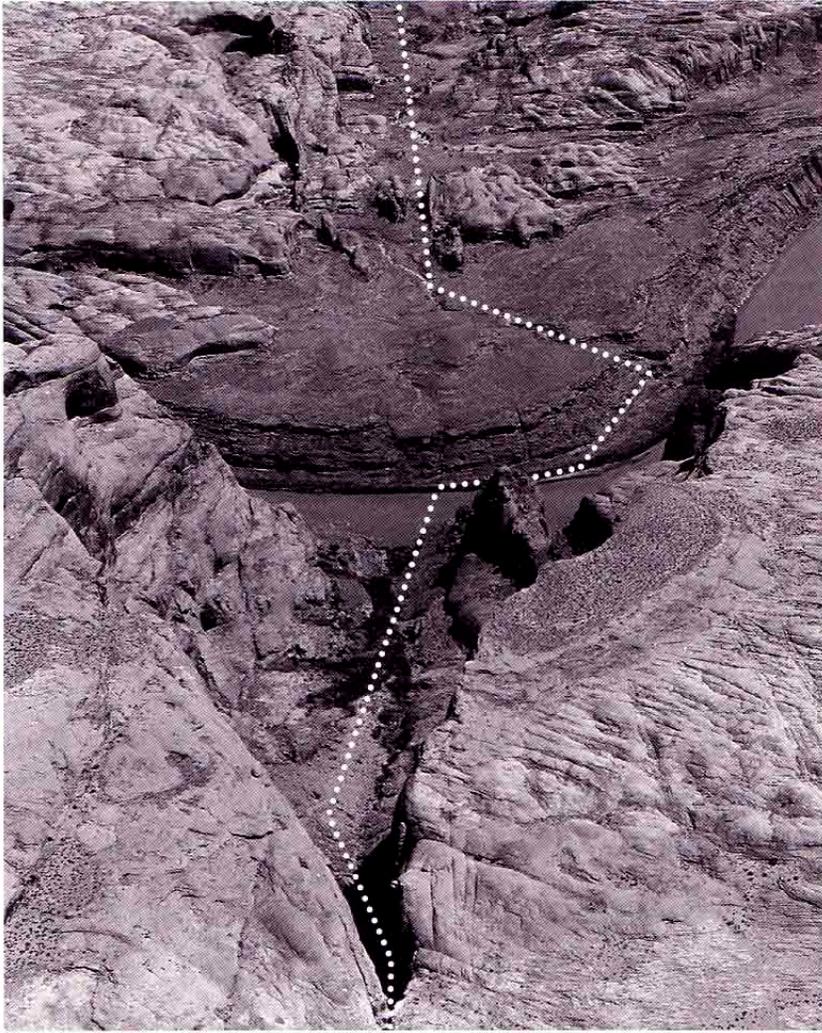
「わたしたちは岩を砕き、
土ほこりの中で働いた」

預言者からの召しに従う決意で一つ

になった彼らは、荒れ地の中をフィフティーマイル・スプリングまで前進しました。道はなく、開拓者たちは、「荷車の進んだ道としては、わたしが知っているかぎり、最も険しい」とある人が表現した所に道を切り開きました。岩ばかりで草木がほとんどないその場所は、峡谷と、垂直に伸びた100メートル以上もの深い岩の割れ目が続く所でした。

フィフティーマイル・スプリングでスミス隊長は隊を3つの作業班に分けました。一つは岩壁の裂け目に当たる場所で作業をする班。もう一つは、その裂け目から川までの1.2キロの間に道を切り開く班。そして最後は、渡し船を作る班でした。それから6週間、3つの班はそれぞれの仕事を並行して進めました。狭い岩壁の裂け目を広げる仕事をしたコーネリアス・I・デッカーはこう書いています。「彼ら以上に強い意志をもって努め励んだ人々をわたしは〔目にすることがない。〕わたしたちは皆若かった。……わたしたちは岩を砕き、土ほこりの中で働いた。」岩を砕く道具類の手入れのために、ホール・イン・ザ・ロックでは二つの鍛鉄炉たんでんろが作られました。ロープを命綱に、崖の上から14メートルも下り、宙ぶりの状態で、崖に穴を開け、そこに火薬を詰めた人々もいました。晴れの日も吹雪の日も作業は進められました。

第2班はとても通り抜けなどできそうもない所に道を開きました。特に上の3分の1はこうばいが急で大変な難工



左ページ左——開拓者たちは、ホール・イン・ザ・ロックに向かう途中、自然が形成したこの洞くつ、ダンスホール・ロックでバイオリンの音色に合わせて踊った。左ページ右——急こうばいの崖に道を切り開くため、開拓者たちは岩壁の表面に道筋を付けていった。彼らが作った岩棚は、荷車がちょうど1台通れる幅であった。上——パウエル湖造成前に撮影された航空写真。ホール・イン・ザ・ロックの裂け目（中央前部）と、コロラド川を越えて開拓者が東方にたどった道がうかがえる。ある開拓者はこの地を、「わたしが知っているかぎり、最も険しい」と表現した。

事でした。解決を迫られた数々の問題の一つに、15メートルの岩壁の表面に、道筋を付ける仕事がありました。まず彼らはその岩壁沿いに発破をかけ、それから岩棚を外側に広げました。この作業には、岩棚に平行して、ハンマーで穿孔するという方法が取られまし

た。そして、荷車が通れる幅の岩棚を作るため、必要な場所に、丸太、岩塊、砂利が積まれました。

第3班は1度に2台の荷車を載せて、コロラド川を渡れる大きさの渡し船を1隻造りました。この班の一部は、さらに東へ進むための道を開く仕事にも

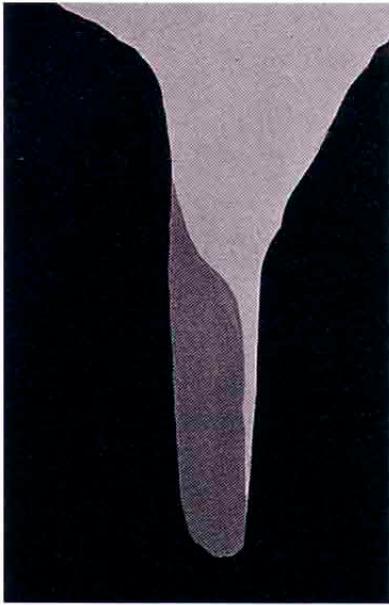
着手しました。

「わたしは決してあの日を忘れない」

1880年1月26日、準備はすべて整いました。

エリザベス・M・デッカーはホール・イン・ザ・ロックを下りた荷車について次のように書いています。「ホール・イン・ザ・ロックを下るその道筋は……狭く、両側は150メートル余りの崖に囲まれている。荷車1台が下れるだけの幅である。わたしには、ほんとうに死ぬほど怖く思えた。わたしが見たその最初の荷車は、ブレーキをかけながら下った。……〔転倒を避け、静かに進むため、後輪に鎖をかけた状態で〕太いロープを荷車に結わえ付け、約10人でそれを引くようにしあちこちぶつかりながら下って行った。わたしは決してあの日のことを忘れないだろう。」

ジョセフ・スタンフォード・スミスの荷車は、その日にホール・イン・ザ・ロックを下りた26台の最後の荷車でした。皆からスタンフォードと呼ばれていたスミス兄弟は、一日中ほかの人たちがホール・イン・ザ・ロックを下りるのを手伝っていたのです。その間、妻と3人の子供は雪の中でキルトの上に座って待っていました。やがて、ほかの人たちが助けに来ようとしているのを知らなかったスタンフォードと妻のベルは、自分たちは取り残されてしまったと思いました。それで二人は



昔と今のホール・イン・ザ・ロック。濃い灰色の部分、開拓者の削り取った岩の部分。

自分たちで荷車を下ろそうと決めました。ベルは3歳の息子をキルトの上に座らせてから、赤ん坊を抱かせ、父親が戻って来るまでそこから動かないように言いました。いちばん年長の娘アダは弟たちを前にして座り、お祈りをしました。

ベルと1頭の馬が荷車の後部に結わえられたロープを引っ張る一方で、スタンフォードは前で馬車の跳ねよけに足を踏ん張りながら、ゆっくりと馬の歩みを進めました。進み始めて間もなく、後ろの馬が倒れました。ベルも岩に足を取られたり、自分も倒れて馬と一緒にその険しいスロープを引きずられないように身を引いて逃げ出したりということを繰り返しました。荷車が止まるまでに、ベルは腰からかかとまでの至る所を、ごつごつした岩にぶつけました。スタンフォードは、妻が無事かどうかを駆け寄って確かめました。ベルは開拓者らしい気丈さで、ず

っと「からすのように飛び回りながら」下りて来たと答えました。スタンフォードは彼女を荷車の中に入れて、傷口をきれいにしてから、子供たちのところへ坂を上って行きました。馬はさすがに疲れ果てていましたが、命に別状はありませんでした。スタンフォードは帽子を振って合図し、妻に子供たちの無事を知らせました。

「皆、精力的に働き、
心一つにしていた」

渡し船でコロラド川を越えてからも、この開拓者たちは起伏の激しい地をさらに240キロ以上も進まなければなりません。エリザベス・M・デッカーは、両親にあてた手紙の中でこの地を次のように説明しています。「こんなに険しい地形の所はどこにもないと思います。ここにあるのは、岩と穴、山と谷だけです。山は一つ一つが、滑らかなりんごのようで、それ自体が一つの岩の塊のようです。」思っていたよりも厳しい土地で、そのためこの旅も、予想よりはるかに長くかかりました。6週間の見込みが6か月になってしまったのです。近道とはいっても、それはそれは大変な難所です。途中で子供が二人も生まれました。必要な物資を、らばを連ねて隊のところまで運ばなければならない状況でした。1880年4月6日、疲れ切ったこの開拓者たちは、小さな川を近くに控えた、農地にふさわしい土地に到着し、その地

をブラフシティーと名付けました。

旅は困難を極めました。こうして開拓者たちは、預言者に従い前進するという決意をしっかりと守り続け、明るい心を忘れずに、数々の困難を耐えたのでした。この隊の一員だった人はこのように回想しています。「荒れた地を……進む……テント生活の中で、普通ならだれでも困難な問題や不測の事態を憂慮することだろう。しかし、この隊は違っていた。皆、精力的に働き、心一つにしていたのだ。」

開拓者たちが開いたこの道は約1年間、地域の主要な道路として用いられました。ホール・イン・ザ・ロックを通過し、険しい地勢の回廊地帯を西進する交通路として、6頭立ての馬車が通れる道が必要だったのです。

1882年以降、この道は使われなくなりましたが、開拓者たちは、デゼレト準州の中でも辺境の地に入植地を築くという自分たちの目標を成し遂げたのです。ホール・イン・ザ・ロック周辺はどちらかといえば辺りな土地ですが、預言者からの召しに従い、岩を切り開いた、忠実で粘り強い開拓者たちが残した遺産として、今もその名を伝えています。□

注

1. デビッド・E・ミラー、*Hole in the Rock*『ホール・イン・ザ・ロック』p.65。この記事の内容の多くはこの著書を参考にしている。

いつでも、どのような所においても、 神の証人になる

「わたしは福音を恥としない。それは、
……救^{すくい}を得させる神の力である。」(ローマ1:16)

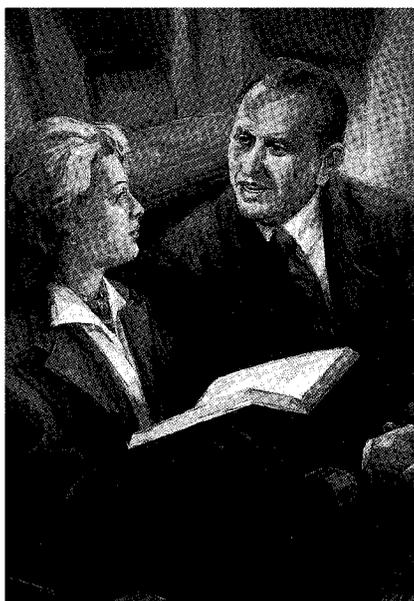
バプテスマを受けるとき、わたしたちは「いつでも、どのようなことについても、どのような所においても……神の証人になる」(モーサヤ18:9)と聖約します。そのような証^{あかし}を述べることは、従順と信仰の行為です。わたしたちが証を述べる時、聞く者も、そしてわたしたち自身も祝福されます。

救い主について証する使命

ゴードン・B・ヒンクレー大管長はこのように宣言しています。「神の御子が実に生きておられることを、模範と教えをもって世の人々に証することこそ、わたしたちの大いなる使命です。」(『わたしたちの大いなる使命』『聖徒の道』1992年7月号, p.95)

主は、わたしたちが自分の本分を果たすなら助ける、と約束されました。「あなたがたの口を開きなさい。そうすれば、あなたがたの口は満たされるであろう。……見よ、わたしはあなたがたとともにいるからである。」(教義と聖約33:8-9)「あなたがたは何を言おうかと、前もって思い煩ってはならない。ただ絶えず命の言葉をあなたがたの心の中に大切に蓄えるようにしなさい。そうすれば、それぞれの者に必要な部分が、必要なそのときに授けられるであろう。」(教義と聖約84:85。教義と聖約100:5-6も参照)

時折、わたしたちは自分の証を述べるのに少し気が引けることがあります。それはたぶん、ほかの人に嫌な思



ILLUSTRATED BY JUDITH MEHR

いをさせたくないとか、人から批判されたくないと思うからでしょう。トーマス・S・モンソン副管長は、証を述べるか、沈黙するか、どちらかを選択しなければならなかったときのことを、以前に語りました。飛行機の中で、ある非番の搭乗員が彼の隣に座り、『奇しきみわざ』を読んでいました。やがてモンソン副管長は、彼女が教会員でないことを知りました。こう述懐しています。

「わたしは心の中で思いました。『教会についてもっと話すべきだろうか。』使徒ペテロの言葉が心に浮かびました。『あなたがたのうちにある望みについて説明を求める人には、いつでも弁明のできる用意をしていなさい。』(1ペテロ3:15) わたしは今こそわたしの証を述べる時だと決心しました。」

この婦人は後に教会に入り、モンソン大管長に証を聞かせてくれたことを感謝しました(「あらゆる人が聞くために」『聖徒の道』1995年7月号, p.57参照)。

喜びは、福音を見いだした人だけでなく、福音を伝えた人にも訪れます。モンソン副管長のように、多くの末日聖徒たちは、勇気を出して自分の証を述べることで友人や愛する人を真理へと導き、感謝されてきました。

証の持つ力

証を述べるには雄弁な言葉や高遠な論証が必要だと思っている人もいます。そんなことはありません。信仰と謙遜な気持ちから出た単純な言葉は、強い霊的な力を持っています。アン・オズボーン・ポールマン姉妹は自分の改宗についてこのように述べています。彼女は何人かの宣教師に会いましたが、宣教師になってからまだ1週間しかたっていない若い長老が、最も力強い証を述べたのでした。彼はあがっていました。福音が真実であると「知っている」と言った長老の言葉について彼女が質問したとき、「長老は言葉に詰まってしまいました。そして、やっとわたしの目をまっすぐに見詰めて言いました。『オズボーン姉妹、わたしはそれをとても固く信じているので、「それが真実だと知っている」と言えるのです。』 どうしてそのように熱意のこもった強い証を述べることができるのでしょうか。わたしにはどうしてできないことでした。」(The Simeon Solution 『シメオンの解決策』 p.59)

●証を述べることにより、どのような祝福が得られるでしょうか。

●救い主について証を述べる用意をするには、どうしたらよいでしょうか。□

家庭でうまく いかないことがある あるときには

ジャン・ピンボロー

PHOTOGRAPHY BY JOHN LUKE

いつもどおりのすばらしい父の日でした。夫はもらったばかりの新しいネクタイに大喜びでした。幼い二人の娘たちは、かん高い声を上げ、夫に抱きついています。聖餐会でも、義になかった生活を送る、愛にあふれた父親をたたえる話が続きました。そして、今年の発表の「うれしいな、パパのお帰り」の最後には、初等協会の子供たちが、自分たちの大好きな父親に向かって音を立てて投げキッスをしました。わたしたちは、笑みを浮かべながら次の集会へと礼拝堂を後にしました。

そのとき、ジェニーの姿を目にしました。顔を赤くし、頬は涙でぬれています。あの才能豊かで、いつも元気で信仰深いジェニーがどうしたのでしょうか。ジェニーこそ、どんな母親であっても、自分の娘があんな子を模範に成長してほしいと願うようなローレルの少女でした。そのジェニーがなぜ泣いているのでしょうか。それは、ジェニーの両親が、彼女がまだ幼いころに離婚していたからでした。心から理想を望んでいながらも手に入らないときだからこそ、理想的な家族についての話を聞き、胸を痛めたのです。

ジェニーの涙を見て、様々な思い出がよみがえってきました。「家庭の愛」(『賛美歌』181番)の1番の歌詞を最後まで歌おうとしたときのことも思い出しました。「過ぎゆく月日、穏やかに」の部分まで来ると、わたしはいつも言葉に詰まって、涙を流したものでした。わたしの家では、穏やかに過ぎゆく月日など皆無に等しかったのです。毎日が口論の連続でした。子供たちは親の神経を逆立てないように、言葉遣いにも気を遣っていました。自分たちさえ注意していれば次の争いを避けられる、と子供なりに考えたのではないかと思います。ほんとう

に薄氷を踏むような毎日でした。そして、つかの間目の光が差し込んだかと思うと、すぐに家族全員を巻き込んでしまうような恐ろしい嵐が訪れました。

時として、想像するだけで恐ろしい思いが顔をのぞかせることもありました。わたしたちは永遠の家族には決してなれないのでは、という思いです。何年か過ぎるうちに、その思いは恐ろしいまでに現実味を帯びてきました。子供のころのわたしの最も鮮明で大事な思い出は、教会に加入し、やがて、両親と結び固められたことなのに、それが最後にはまったく意味のないものとなってしまふのです。

両親が離婚したとき、わたしは20代でした。それでも、わたしの中には、おびえた子供のような気持ちが依然として付きまとっていました。自分の家族との昔の幸福な思い出が、一瞬のうちに消えてなくなりそうな、また家族がばらばらになってしまったような、そんな気持ちで過ごしていたのです。今の生活は、わたしやわたしの愛する人々に、どんな喜びをもたらしてくれるのでしょうか。わたしは永遠に独りぼっちになったような気持ちでした。

年齢を重ねるにつれ、物事への理解が深まり平安が得られたことで、そうした心の傷は少しずつ癒されていきました。ですから、今、わたしの最大の望みの一つは、わたしの見いだした平安を、不安定で不幸な家庭で生活している人々に少しでも伝えることだと考えています。

「それはわたしの責任なのではないでしょうか。」

「もし皆さんが今幸福でないとしたら、それは何か問



違ったことをしているということです。」日曜学校の教師の兄弟がそう言ったとき、彼はわたしがその言葉を誤解することなど想像もしていなかったでしょう。わたしはその言葉を書き取り、鏡にはっておきました。自分があまり幸福でなかったことを知っていたからです。自分の部屋で涙に暮れた夜も度々ありました。恐れと失望のためでもあり、また自己憐憫に陥っていたせいでもあります。そして、自分は何かひどく悪いことをしているに違いないと思うようになりました。その間違いが何なのかははっきりとは分からないまま、自分の性格には何か致命的な欠点があるに違いないと感じていたのです。

もちろん、わたしは10代の少女として、何も間違いをしなかったというわけではありません。しかし、今になってみれば、自分がふさわしくないと感じていたことには、根拠がなかったことがわかります。わたしの悲しみの大部分は、自分以外の人々の選択の結果としてもたらされたものでした。しかもその選択は、ほとんど自分の力ではどうしようもないことだったのです。わたしは、自分の家族の中ではほんの子供でした。ですから、子供としては、自分の家族全体の成功とか失敗といったことには、責任はなかったのです。もちろん、両親が選択した結果に対しても、当然わたしは責任を感じる必要はありませんでした。

同じことが皆さんにも言えます。皆さんの両親の中には、アルコール依存症の人がいれば、いつもけんかばかりしている人や戒めを守っていない人がいるかもしれません。皆さん自身がそういう問題にかかわらないよう最善を尽くさなければならないのはもちろんですが、間違っただけの意識を持って問題を複雑にしないようにすることも大切なことなのです。

頑張り続ける

離婚や、そのほかの家族の問題を切り抜けるためには、ひたすらじっと頑張っただけというだけでは、時々あります。天父が皆さんや皆さんの家族を、深くしかも永遠に愛してくださるといふ真理を、ひたすら信じ続けてください。

家族のために祈っているのに、全然答えがないと思われれることもよくありました。祈れば祈るほど、事態が悪化していくように思えることもありました。当時のわたしは、主はわたしたちの悲しみを分かってくださっていても、決して事態を強制的に変えようとはされないものだということに、気づいていなかったのです。しかし、時がたつにつれ、主の愛があればこそ、自分たちが祈り求めたものよりもはるかに大きな祝福への道が開けることが分かってきました。かつて心を込めて祈り求めたこ

との多くがこれまでにこたえられているのです。主はわたしの愛する家族に常に祝福を与えようとされてきたことを、今、わたしは実感しています。

聖文の言葉を信じ続けていれば、心が信仰で満たされます。例えば、次のように書かれています。「心に慰めを得なさい。まっすぐに歩む者たちに益となるように…万事がともに働くからである。」(教義と聖約100:15)

心を豊かにしてくれるような音楽を見つけてください。わたし自身、勇気や忍耐に関する賛美歌や歌を独りで歌いながら、平安を感じて過ごした夜が幾度もありました。

皆さんの家族の問題が、例えば、肉体的、性的、情緒的な面での虐待に関係するものだとしたら、助けを求める必要があるかもしれません。大人に相談してください。だれかの父親や母親、教会の指導者、ソーシャルワーカー、学校のカウンセラー、精神科医といった、信頼でき、真剣にあなたのことを心配してくれる人に相談してください。これは気も重く、非常に大変なこともかもしれません。しかし、皆さん自身を守るためにも、家族を守るためにも、家族以外の人に助けを求めることが必要になることが時にはあるのです。

皆さんを励まし、皆さんの信仰や標準を守る助けとなってくれる指導者や友人を大切にしてください。

祝福師の祝福とそこに書かれている将来の約束を固く信じ続けてください。そこに書かれている約束は、たとえ現実の生活とどんなにかけ離れて見えたとしても、必ず実現する永遠の約束です。主は皆さんにそのような約束を授けられたとき、すでに皆さんの現在の問題をよく知っておられました。ですからその約束は必ず実現します。

そのような問題を抱えているのは皆さんだけではないという事実を忘れないでください。10代のころ、わたしたちのような家族やわたしたちのような問題を抱えている人はほかにいないだろうと思っていました。親友が我が家に泊まりに来たとき、わたしは、自分が触れてほしくないと思っていることに彼女が気づいてしまうのではないかと心配でした。しかし、二人が成人して間もなく、わたしは、彼女も当時同じような家族の問題を抱えていたことを知らされたのでした。

外観だけで早計な判断はしないでください。皆さんの中でもいちばん自信に満ちあふれていて、ユーモアのセンスもあり、しかも人気のある人が、実は皆さんの問題よりも大きな問題を抱えていることだってあるかもしれないのです。いちばん信仰深いと思われる家族でも、大変な問題を抱えているかもしれないのです。このことを知っていると、自分だけが難しい問題を抱えているという気持ちから逃れることができます。たとえ自分の抱え

ている問題が大変に思えても、皆さんの友人に愛の手を差し伸べるだけの余裕を持ってください。

「あなたがたを見捨てていない」

問題を抱えているときに、どうやったら前向きな気持ちを維持することができるのでしょうか。1831年8月、預言者ジョセフ・スミスと10人の長老たちが、ミズーリ州ジャクソン郡での伝道を終えて、オハイオ州カートランドへ向かって旅をしていました。その旅の3日目に、一行は随分と危険な目に遭いながらカヌーでミズーリ川

自分が苦しいからといって、人から離れて生活してはなりません。あなたのような問題を抱えているのは、あなた一人ではないからです。友人や指導者に助けを求めてください。彼らは、皆さんを慰め、理解してくれる大切な存在となるでしょう。

を下ったのでした。恐らく、疲れていたか、心配していたか、あるいはまたホームシックにかかっていたかもしれません。そのとき、主は次のような優しい言葉をかけて、一行を元気づけてくださいました。「幼い子供たちよ、元気を出しなさい。わたしはあなたがたの中におり、あなたがたを見捨てていないからである。」(教義と聖約 61:36)

わたしたちも、主は決してわたしたちを独りにされたりはしない、ということを確認できます。10代のころ、わたしはいつも主の存在を身近に感じていたわけではありませんでした。今では、自分が最も危険な道を歩んでいたときに、主がいつもわたしと一緒にいてくださったことが分かります。

さらにわたしたちは、天父の救いの計画というものが、永遠の観点から見れば、恐らくわたしたちの理解をはるかに超えるほど公正で慈悲にあふれたものであるということを知る必要があります。天父がその子供たちに祝福を下さらないまま、見過ごしにされるようなことはありません。実際、天父の愛にあふれた計画の中で、永遠に独りぼっちであるなどということは決してないのです。

わたしたちは現在という時の流れの中で生きる必要がありますが、同時に将来のために生きていくこともできます。わたしたちは、いつか神殿に参入する日のために生きていくことができます。そこで、今頂いている以上の理解と祝福にあずかるのです。また、自分自身の家庭を作る日のために生きていくこともできます。愛と平安と御霊をもたらすために、一生懸命に努力できるような家庭です。さらにまた、自分自身は十分に養いを与えられなかったかもしれませんが、今度は自分が人を養うことのできる日のために生きていくこともできるのです。

わたしには、ようやくそんな日がやって来ました。ですから、皆さんにもそんな日が必ず来ると確信しています。□





きょう 今日と明日のための日記

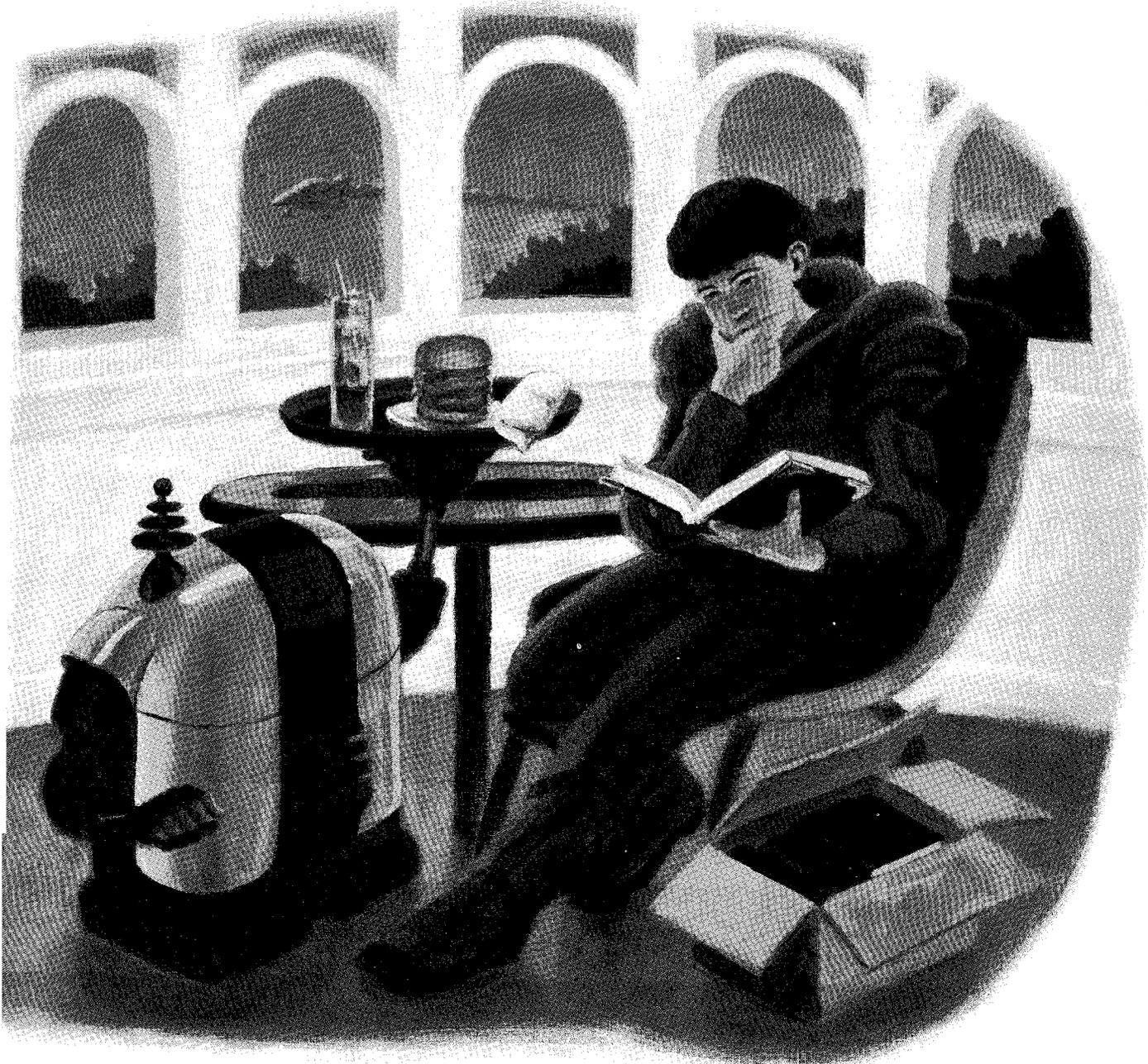
ジェフリー・S・マクレラン

ILLUSTRATED BY MATTHEW H. MAXWELL

もし『モルモン書』の執筆者が自分たちの経験を、あなたと同じような方法で記録していたとしたら、今日こんにちどのような『モルモン書』が出来上がっていたでしょうか。アルマ書の第46章から第62章のように、策謀や興奮に満ちた物語が記録されていたでしょうか。ニーファイ第二書第4章のように、深い靈性に満ちた論文

になっていたでしょうか。オムナイ書第1章9節の中にあるケミシの記録のように、数行の簡潔な文章になっていたでしょうか。それとも存在すらなかったでしょうか。

確かに、あなたは『モルモン書』を書いているわけではありません。しかし、ひょっとしたらだれかがあな



たの経験を書き記した記録，すなわち日記を読むようなことがあるかもしれません。もしかしたら，あなたの死後，あなたの娘が読むかもしれません。何代も後のあなたの子孫が系図を調べているときに読むかもしれません。福音の学者が福千年の前の教会員の生活がどんなものかを調べているときに読むかもしれません。あるいは考古学者が20世紀のあなたの町の生活を把握しようとしているときに読むかもしれません。だれが読むにしても，その日記の中に何を発見するのでしょうか。何か意義のあることを発見するのでしょうか。

しかし，日記は将来の人のために役立つだけでなく，今のあなた自身にとっても大きな価値があります。日記はあなたの最高の友達です。ほかに話す相手がだれもい

ないときでも，日記に語りかけることができます。自分の喜びや希望，そして成功をすべてこの日記につづることができます。同時に，あなたのいらだちや問題，そして失敗も記すことができます。

自分の問題について書き記すことで，それらについて考えることになり，解決の糸口を見いだせます。また，日記に自分の考えを文章で表現するうちに，難しい決定を下したり，怒りを捨てたり，混乱しているときに落ち着いて考えたり，自分のことをよく理解したりできるようになります。

日記を読めば忘れがちな祝福を思い起こすことができます。過去何年にもわたって書き留めた神聖で個人的な経験を何度も読み返すことで，わたしたちの信仰

と証は強められます。

では今日のあなただけでなく将来の人々にとって価値のある日記を書くには、どのような方法を用いればよいでしょうか。次のようなアイデアを参考にしてください。

日記を書く時間を設定する。いつも決まった時間に書くようにしましょう。そうすれば忘れにくくなります。毎晩あるいは毎週の日曜日でもよいでしょう。でなければ毎朝あるいは昼食時でもいいのです。自分にいちばん合う決まった時間を選んで、実行することです。

聞いてくれる人を選ぶ。日記は、だれか相手がいるという気持ちで書くと、書きやすくなるものです。聞いてくれる人を選び、その人に語りかけたり、手紙を出したりするつもりで書くことです。聞いてくれる人は想像上の友達でもいいし、現実の友達でもかまいません。また自分の子供や孫、あるいは将来の歴史家でもよいでしょう。語りかけるような気持ち、くつろいだ気持ちで書くことです。だれかを感動させようなどと考えないことです。背伸びをして書かないようにしましょう。

自分のことについて書く。何か物を書くときにいちばん難しいのは何について書くか決めることです。一つの方法を紹介しましょう。自分の高祖母（祖母の祖母）の日記を読んでいると仮定してみてください。何について読みたいと思いますか。恐らく彼女自身について読みたいと思うでしょう。ですから自分自身について書くのです。手始めに次のような方法を試してみてください。

1. 人と場所について描写する。あなたの日記を読む人はあなたの人生について詳しく知りたいと思うでしょう。自分の母親、教師、そのほかつきあっている人々について、読んでいる人が興味を持つようなことを選んで書いてください。姿形だけでなく、人柄についても書いてください。もちろん自分自身についても書いてください。自分の住んでいる所や通っている学校、集っている教会、休暇で行った所などについて書いてください。自分の人生に意味を持つ事柄について書いてください。

2. 自分の気持ちについて語る。自分がどのように感じ、なぜそのように感じたか、またそのときにどう行動したか記録してください。主をどう思っているか、また教会の会員としてどのような経験をしたかについては、忘れずに記録してください。

3. 距離をおいて自分自身を見る。この方法を取ることで、日記はほかの人のためにもなりますが、特に自分の生活を吟味するのに役立ちます。あなたの人生で最も

大きかった問題やチャレンジは何でしたか。そのような苦難をどのようにして乗り切り、解決するつもりですか。自分にとって最も大きな祝福は何でしょうか。自分の証はどのようにしてぐくまれ、変化してきたでしょうか。スペンサー・W・キンボール大管長はこう言っています。「日記には、ありのままの自分を記してください。」(New Era 『ニューエラ』1975年10月号, p.5) 自分について偽った表現をしないでください。ほかの人に見られたい人物ではなく、あるがままの人物として、つまり人生のチャレンジや思うようにいかないことに必死で取り組み、成長し、学び、発展し、向上していく神の子供として自分を見詰めるよう心がけることです。ただしほかの人が読むべきではない機密事項を記録してはなりません。

4. 表を作る。自分の受けた祝福、友人、勉強している科目、好きな食べ物、歌、映画、書物、聖句などを挙げます。そして列挙したそれぞれの項目について詳しく書き記します。

5. 日記の中で手紙を書く。将来の自分の息子や伴侶のようにあなたの人生とかかわりを持つ将来の人物、あるいは先祖のように過去に生きていただれかにあてて手紙を書きます。また家族の一員や友人のように、ほかの人にあてて出した手紙の複写を日記の中に入れておくのもよいでしょう。

6. 歴史家になる。あなたの日記を読む人はひょっとしたら異なる国、異なる時代に生活し、あなたの住んでいる国の歴史についてあまり知らないかもしれません。ですから世界で、また自分の住んでいる地域でどんなことが起こっているのかを書いてください。あなたを取り巻く環境や状況をよりよく理解することで、日記を読んでいる人はあなたのことをよりよく理解できるでしょう。またすべての記載事項には日付を入れるようにし、言及されている人の住んでいる場所や姓名も書き込むようにしてください。

7. 特別な記念品を取っておく。日記の中に自分が描いた絵、自分で作った詩や物語を入れる。鑑賞した劇のプログラムや自分自身、自分の家族そして友達の写真を入れることもできます。ただ日記をスクラップブックやアルバムにしてしまわないようにしましょう。これらは日記とは別に保管すべきものだからです。□

(この記事の中で紹介されているアイデアの幾つかはタマラ・リーサム・ベイリーとジャネット・ゴーツ・スミスの寄稿による。)

祈り求めると、 主はこたえて くださいました

エリック・ハンセン

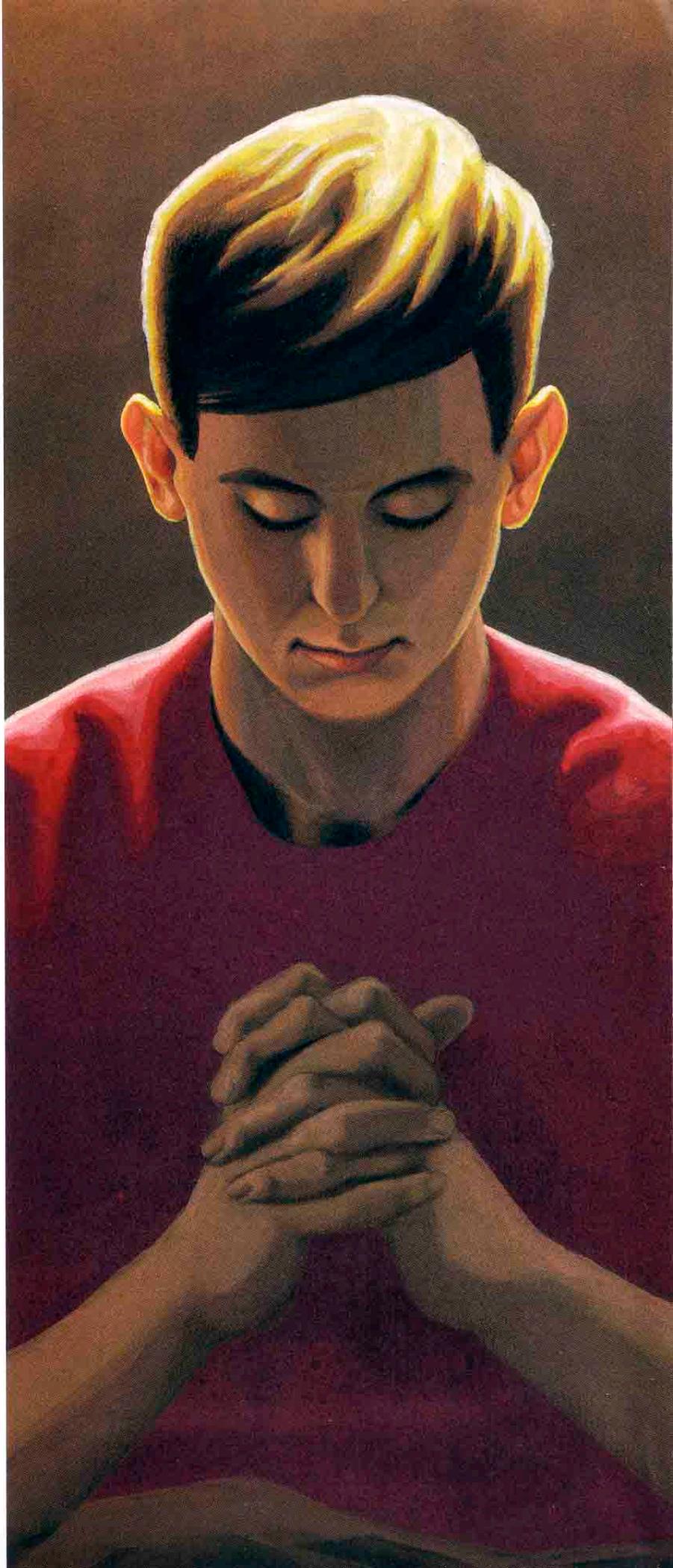
高校2年のとき、わたしたちはセミナーで『モルモン書』を学んでいました。モロナイ書第10章3節から5節を読み終わると、セミナーの教師から、自分たちが学んだ事柄について祈ってみようというチャレンジを受けました。わたしは『モルモン書』について学ぶのが大好きだったので、教師のチャレンジにこたえようと決心しました。

その夜、わたしはもう一度モロナイの約束を読み、ひざまずいて、この書物が真実かどうか天父に尋ね求めました。物語としては大好きでしたが、『モルモン書』が真実だという確信がわたしにはなかったのです。

わたしは、まず御霊と波長を合わせてから、祈り始めました。祈りの中で、『モルモン書』がほんとうに真実かどうか天父に尋ね求めました。そのときです。寝室にいたわたしは、突然、大きな感動と愛に包まれるのを感じ、体全体が温かくなりました。そして次に起こったことに、わたしは驚いてしまいました。まるでだれかが腕をわたしに回して、しっかりと抱いてくれているような気持ちになったのです。

後にわたしはニューメキシコ州のアルバカーキ伝道部にあるナバホインディアン保留区で伝道することになりました。もし、あのときの祈りの答えがなかったら、わたしは伝道に出なかったでしょう。わたしは、自分が祈りを通して尋ねた事柄がすべて真実であると確信しています。そしてこの知識をほかの人に伝えたいと願っています。□

ILLUSTRATED BY DANIEL JOHNSON



チリ

豊かに実ったぶどう園

38人に一人の割合で教会員が住むチリにおいて、伝道活動は豊かな実りをもたらしている。

文・写真／マイケル・R・モリス



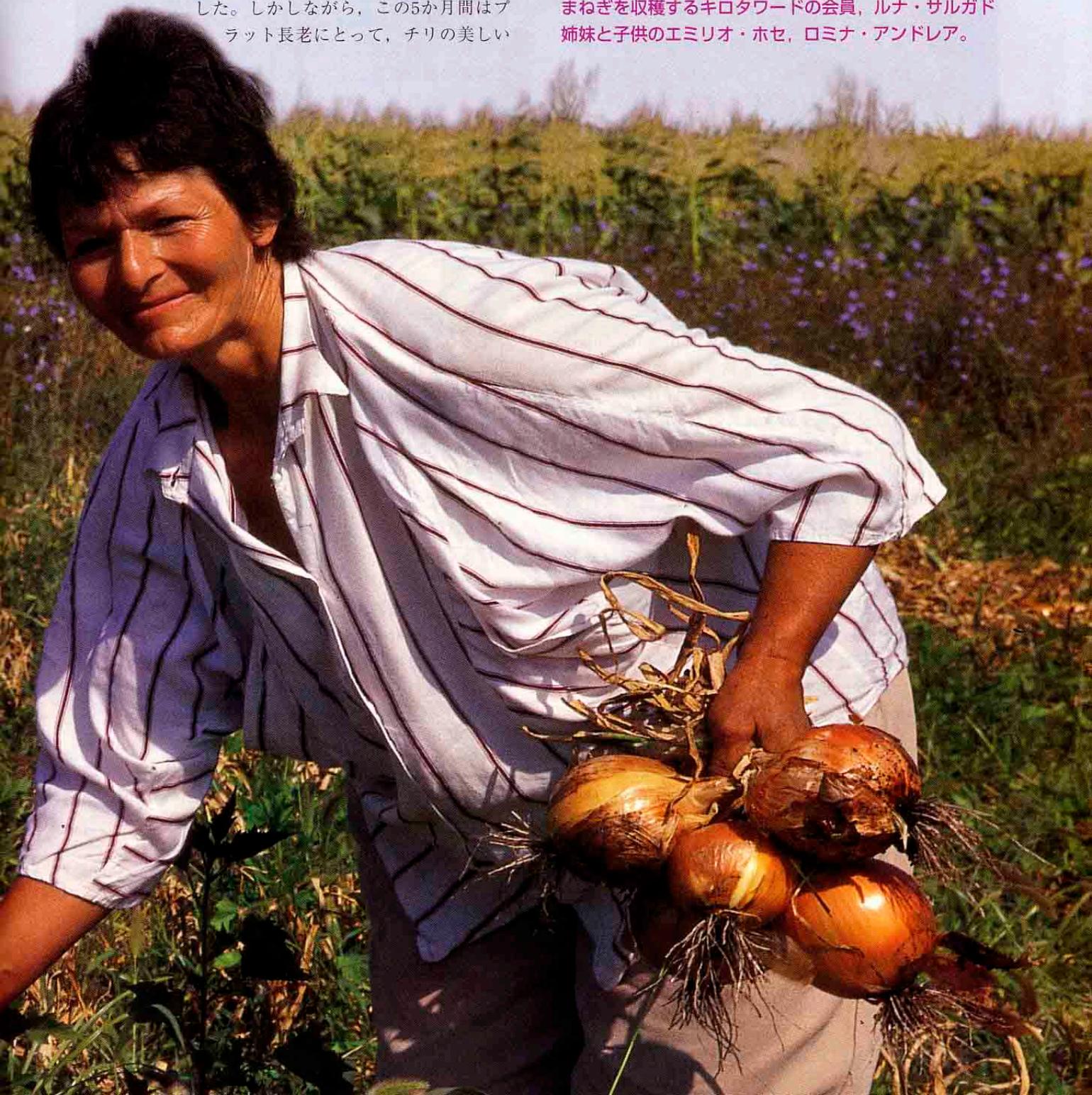
チリに初めて派遣された末日聖徒の宣教師が感じたのは、自分たちが単に「見知らぬ地に迷い込んだよそ者」¹でしかないということでした。彼らを待ち受けていたのは苦難の連続だったからです。

内乱が続き、十二使徒定員会のパーリー・P・ブラット長老の言葉を借りれば「空の財布と通じない言葉」²という環境の中で、ブラット長老とフィービ夫人、それにルーファス・C・アレン長老は、「これらの国々に福音をもたらす鍵」³を回すことができませんでした。1851年11月8日バルパライソに到着してから5か月を経ても、3人は一人のパプテスマも見ることができませんでした。しかしながら、この5か月間はブラット長老にとって、チリの美しい

景色や場所を見て回るには十分な期間でした。美しいアコンカグア川流域の果樹園、畑、ぶどう園はまるで「エデンの園のように肥よくな土地」⁴だったとブラット長老は日記に書いています。

それから150年近くがたった現在、この「エデンの園のような肥よくな土地」という言葉は、そこで展開されている実り豊かな伝道活動にも当てはまります。アラウカニアン・インディオの言葉で「地の果て」⁵という意

チリの肥よくなアコンカグア川流域にある家庭農園でたまねぎを収穫するキロタワードの会員、ルナ・サルガド姉妹と子供のエミリオ・ホセ、ロミナ・アンドレア。



味のチリは、数十万に及ぶチリの会員にとって信仰の始まりの地となったのです。チリに近代の宣教師が入ったのはわずか40年前のことですが、この40年間に教会は大きく発展しました。100近くのステークに42万人の会員がいます。1,400万人に満たない人口から考えると非常に大きな成長を遂げていることが分かります。

飛躍的な成長

チリの国土は幅が平均して160キロ強、北はペルーとの国境から南アメリカ大陸の南端まで4,265キロに伸びています。天を突くようなアンデス山脈を東の国境とし、太平洋の青い海を西の国境としています。チリの北部は灼熱の太陽の照りつける数千キロもの距離に及ぶ砂漠地帯ですが、ここには世界の銅産出量の5分の1を占める銅鉱山があります。一方、南部は湖、フィヨルド、強風に吹きさらされる島々、頂に雪をかぶった火山群が広がっています。しかしこれら両極端な風土に挟まれた中部は、河川が縦横無尽に走る実り豊かな果樹園、ぶどう園、牧草地、耕作地が広がっており、全人口の4分の3がここに住んでいます。

『ロス モルモネス エン チリ (Los Mormones en Chile)』(チリのモルモン)を執筆した歴史家ロドルフォ・アセベドは故国を「陸の孤島」と呼んでいます。「このため、わたしたちチリ人は外の世界に対してことさら関心を持ち、よそ者の話を好んで聞こうとするのです。」

チリ人が回復のメッセージに耳を傾け、受け入れ始めたのは、十二使徒定員会のヘンリー・D・モイル長老が1956年7月5日に福音を宣べ伝える地として国を奉獻してからのことです。モイル長老は奉獻の祈りの中で「数多の人々が扉を開いて宣教師を招き入れる」国となるように祝福しています。⁶

16年後の1972年にゴードン・B・ヒンクレー長老が首都サンティアゴに最初のステークを組織したとき、教会員は全国で2万人でした。それから11年後の1983年にチリ・サンティアゴ神殿が奉獻されたとき、教会員は14万6,000人に膨れ上がっています。このときから現在に至るまで、会員数は2倍を超え、年間の平均増加率は10パーセントを示しています。世界的にもバプテスマの数が最も多い伝道部に数えられるチリの7つの伝道部は、毎年2万人以上の人々を教会に迎え入れています。

元七十人第二定員会会員で、現在サンティアゴ神殿の神殿長を務める、チリ人のエドワルド・アヤラ長老

はこう述べています。「教会がこれほどまでに成長した理由は、チリ人の持つ気質によるところが大きいのです。チリ人には謙遜さと他人の話を受け入れる姿勢があります。事実、福音を聞きたくて宣教師を探している人が大勢います。そして一度探し当てると、彼らは福音に従って生活しようとし、そして福音を愛してやまないのです。」

チリ人のうち、約20パーセントがヨーロッパからの移民の子孫であり、3パーセントが純粋なインディオです。残る人口のほとんどはスペイン入植者と植民地時代にスペイン人の征服に屈することのなかったアラウカノ族との混血です。⁷ 人種の混合と血統、歴史的に見た国家の孤立状態、おうせいな民主主義信奉の風土が相まって、独立心が強く、達成意欲おうせいで楽天的な、また人懐っこい民族が形成されたのです。彼らはラテンアメリカでも最高の生活水準を維持しています。こうした物質的な成功を収めているにもかかわらず、チリ人は霊的なものを渴望する民族でもあります。

正義の道

キエルモ・ソトと奥さんのピラー、そして二人の間に生まれた子供たちは、多くのペルー人と同様、この40年の間に教会に加わりました。

「宣教師たちは街で会うといつもあいさつしてくれました」とピラーは当時のことを話してくれました。「ある日のこと、宣教師からお宅におじゃましたいと言われました。そこでわたしは、家には8人の子供がいるのでとても騒々しくてお話なんかできないと言いました。すると長老の一人がこう言ったのです。『それはすばらしい。わたしには兄弟と姉妹がそれぞれ5人ずついますよ。』」

こうして宣教師が訪問することになりました。そして彼らのメッセージは正しいと感じました。それまでもソト家では度々家族全員が夕べのひとときに集まって、歌を歌ったり、ゲームに興じたりする習慣があったため、すぐに家庭の夕べのプログラムを取り入れました。知恵の言葉のたばこに対する警告も、家の中でたばこを吸ってはならないとする家庭の決まりに、偶然にも一致していました。しかし、テレビ番組の音楽ディレクターを職業とするキエルモにとって知恵の言葉は大きなチャレンジでした。

「わたしは10代のころ、『聖書』に親しんでいました。『聖書』を勉強すると、心に安らぎと『聖書』を愛する気持ちがわいたものです。けれども大人になると『聖書』に対する気持ちが薄れてしまい、この世的な生活



ビニャデルマルのユース聖歌隊。チリの至る所で末日聖徒の若人はワードや支部を強め、回復のメッセージを分かち合うために奉仕している。

にのめり込んでいきました」とキエルモが話してくれます。

バプテスマを受けることのできる年齢に達していたソト家の子供たちは1994年にバプテスマを受けましたが、ピラーは伴侶の準備ができるまで待ちました。キエルモは知恵の言葉に対する確信が持てずにいましたが、とうとう福音はすべて真実であることを、祈りの答えとして知ることができました。

「わたしは何度も何度も答えを受けました」とキエルモは語ります。「あるとき、わたしはバプテスマの水から上がって清く純粋になった自分の姿を想像して涙が止まらなくなりました。何か非常に特別なものを感じて、自分はバプテスマを受ける必要があるという結論に達したのです。」

ソト兄弟は知恵の言葉の問題を克服しましたが、心配していたように音楽界の友人を失うことはありませんでした。「依然として音楽仲間はわたしを大切に扱ってくれます。新しい生活を切り開いていくわたしの生きざまを通じて、福音を宣べ伝えているつもりです。そうすれば、友人たちは少しずつ教会への興味を募らせていくと思います。」

最近のソト家からは感謝の祈りの声やキエルモとピラーと子供たちが歌う賛美歌の調べが漏れてきます。バプテスマを受ける前から一致していたこの家族は、福音の理解が増すにしたがっていっそう親密になりました。サンティアゴ北部のテエラ・デル・フーエゴワードでソト兄弟は長老定員会会長、ソト姉妹は扶助協会会長の責任を果たしています。

「わたしがいつも神様にお願いしていたことは、家族とともに成長できるように、そして、ピラーとわたしが子供たちを正しく教えられるように、また、子供たちがたくましく成長して幸せになれるように導いてくださいということでした」とソト兄弟は語ってくれました。「それはとても長い道のりでしたが、わたしたちはとうとうその方法を見つけました。」



「エスフーエルソ・マンコムーナド方式」

チリにおける教会が急速な成長を遂げた過程で、困難がまったく伴わなかったかというところではありませんでした。新しい会員を福音を中心とする生活になじませるといったチャレンジ、会員数の急増するワード、支部に礼拝堂を提供するという大きな試練が待ち受けていました。1982年から1989年までチリの教会建築の指導に当たり、現在は南アメリカ南地域で地域幹部の責任にあるホルケ・セバジョス長老は、チリでは3年間を単位として300以上の割合で礼拝堂が建設されたと言っています。

「それは正しい判断でした」とセバジョス長老は語ります。「1980年代の初頭から始まった建築計画は、ゆっくりと進められていました。資材と労働力は安く手に入りました。そのため、当時教会所有の建物に集っていたワードはほんのわずかしかなかったのです。しかしおかげで、将来を見通した計画が立てられたのです。その結果、現在どうなっているかは御覧のとおりです。」

1995年だけをとって見てもチリで組織されたワード、支部は100を超え、ステークは25近くに上るという状態からすれば、「現在、建築が追いついていないことは容易に想像できるでしょう」とチリの教会地域監督ダニエル・アルメダは述べています。「礼拝堂が完成する時点で、すでに3つのワードが入らなければならない状態

左ページ——ビニャデルマルのマルシア・コンサレス・アキレ姉妹。下——娘のイサベルとともに福音に関する目標について話し合うコンセプションのオスカル・マリン兄弟。右——チリの北部海岸にある岩の洞くつ「ラ・ホルタダ」。右端——アントファガスタの扶助協会の姉妹たち。



になっています。6つのワードで使っている礼拝堂も幾つかあります。」

地元の教会指導者は、不便さや犠牲を強いられてはいますが、急速な成長に付随する様々なチャレンジや苦勞をむしろ歓迎しています。そうした指導者の一人で、彼の所属していたステークが1990年に4つのステークに分割されるのを経験したパトリシオ・ラ・トルレ兄弟は次のように言っています。「わたしの住んでいた地域では10のワードで二つの礼拝堂を使う状態が2年間続きましたよ。」

現在、サンティアゴ南部のホセ・ミケル・カレラスステークの会長を務めるラ・トルレ兄弟は、バプテスマ数の増加と定着率、活発率の上昇を「エスフーエルソ・マンコムーナド方式」（バランスの取れた努力をする）のおかげだと考えています。これは神権指導者が専任宣教師と一緒に、目標を決め、活発でない会員を再活発化し、さらには新会員に教会で奉仕する機会を与え、神殿に入る準備をさせること、から成っています。同じ努力をするにしてもうまくバランスを考えて力を注げば、会員たちを成長させることも、教会の使命に対するビジョンを持たせることもできると、ラ・トルレ兄弟は言います。

「チリの教会では画期的な出来事が起きています」と語るのは昨年7月にチリ・サンティアゴ南伝道部の部長を解任になったばかりのロジャー・ヘンドリックス兄弟です。「エスフーエルソ・マンコムーナド方式によ





って、わたしたちは教会員の定着、活発化、ステークとワードの新設という点で過去に見られなかった成功を収める新しい時代に入っています。」

チリ・サンティアゴ北伝道部のフォン・パッカード部長の報告によると、バランスを重視した努力の結果、サンティアゴ北部では最近1か月の日曜日の集会出席者数が約1,000人増加したということです。活発でない会員を心から愛する人々にとって、「彼らを再び教会に戻すのは難しいことはありません。」

「わたしたちはこの地で祝福を受けました」

ロベルト・バルガスが1989年にチリ北部の港町であるアントファガスタに家族とともに引っ越したとき、彼はすでに教会から足が遠のいていました。しかしロベルトと奥さんのエレカ、そして3人の息子たちがそこで末日聖徒から受けた熱烈な歓迎は、世界で最も乾燥したチリのアタカマ砂漠の猛烈な暑さに劣らないほどのものでした。

アントファガスタは砂漠と海に挟まれた、年間を通して雨のほとんど降らない地域です。しかしそのように過酷な気象条件であっても、バルガス家族にとって

サンティアゴのロス・ブラドス礼拝堂建築を監督する教会員のロベルト・フィケロア兄弟。教会の集会所を新築する光景は至る所で見られる。

はずばらしい地となったのです。バルガス姉妹が語るように「わたしたちが家族としていちばん成長した所はアントファガスタ」だったからです。

バルガス兄弟は近くの銅山で市の技師として働いていました。そのバルガス兄弟を活発にするためにワード挙げての努力と温かい歓迎が始まったのです。そしてついにバルガス兄弟が腰を上げました。「のびのびになっていた監督との面接」に臨んだのです。この面接から間もなくしてバルガス兄弟は長老定員会の会長会に召されました。グランビアワードの監督に召されて3年を経た現在、バルガス監督は人々の霊的成長を助ける機会を心から喜んでいます。

「もし地震が起きたら、礼拝堂は教会に戻って来る人でいっぱいになるでしょう。津波警報が出たら、全

員が戻って来るでしょう。しかし、わたしは人々に災難が降りかかってくるまで待たないように呼びかけています。わたしの家族はこの地で祝福を受けました。それは戒めに忠実だったためであるとよく知っています。」バルガス監督の言葉です。

「7の70倍」

1977年にサンティアゴで地域大会が開催された当時、チリの教会員は5万人に満たない人数でした。この大会で十二使徒定員会のブルース・R・マッコンキー長老は次のように述べています。

「わたしは現在この地に組織されている7つのステークが7の70倍になる日を予見しています。……わたしは末日聖徒イエス・キリスト教会がこの国の至る所で最も強力な『パン種』になる日を予見しています。」⁸

キエルモ・ミランダに代表されるようにチリの聖徒たちはマッコンキー長老の預言が成就することを知っていました。そして彼らは預言が成就するように努力したのです。「主はわたしが良い影響を及ぼすことができるように仕事を祝福してくださったと思います」と語るのはデパートをチェーン展開する会社のオーナーであり経営者であるミランダ兄弟です。

ミランダ兄弟はサンティアゴから車で1時間ほど南東に下った農業地帯にあるサン・フェルナンド市で大祭司グループリーダーの責任にあります。「人々の光となる」と自ら信じる彼の事業は、正直な経営と従業員に厳格な接客ルールを実施していることで有名であり、また人々の尊敬を集めています。

「教会員の従業員は、教会員でない従業員の良い模範であってほしいと思います。これは教会がまだ小さい地域では特に大切なことです」とミランダ兄弟は語っています。

ミランダ兄弟は1982年に教会員となって以来、迫害や不況を経験しそれらを乗り越えてはきましたが、自分を成功者というよりも、むしろ祝福された者と考えています。「ゴシップ記事の標的にされたりもしましたし、事業を攻撃的にされたりもしました」と語る彼は、チェーン展開するデパートが経営不振に陥っていると中傷するビラをまかれた当時のことを思い出しています。しかしミランダ兄弟は、ビラをまいた人々を告訴する手段は取りませんでした。そうする代わりに、事業が守られるように祈り、^{しゅうふん} 什分の一を正しく納めるよう努めました。その結果、以前にも増して業績が上がりました。最近では経営哲学について講演をよく頼まれます。講演を聞いてミランダ兄弟の会社に就

職を希望する人が殺到しますが、とても応じ切れない状態が続いています。

末日聖徒を従業員にしたいと考えているチリの経営者はミランダ兄弟だけではありません。チリの有名な劇作家であるルイス・リバノは1991年に新聞のコラムで、教会員の誠実さ、高い生産性、健康的な生活を絶賛しました。そのコラムは次のように主張しています。「問題を起こさない……質の高い仕事をする従業員を求める企業が次第に増えている。もしわたしがモルモンか〔ほかの宗教の信者〕かのいずれを採用するかと問われたなら、ためらわずモルモンを選ぶ。この選択が国家の経済成長を加速させると確信しているからだ。」⁹

漁業と工業の中心地であるコンセプションで最初に教会員となった一人であるミケル・レファルケは、経済的に恵まれているかどうか、またどのような仕事をしているかにかかわりなく、正しい生活をしている末日聖徒は、周囲の人々に常に良い影響を与えている、と言います。「教会は大きな祝福となっています。何十万という人々が教会のおかげで、自己を改善し、善い市民となり、善い父親、母親、子供となることができたのです。」

チリの大統領は、家族や奉仕、受け継がれてきた伝統の大切さ¹⁰を力説することで有名です。政府や宗教界には教会の教えやその増大する影響力について言及する指導者が少なくありません。

「コンセプションに近いハルキの市長は教会員が信頼に足る人々であることを認めています」とチリ・コンセプション伝道部の副部長のレファルケ兄弟は言います。「市長は監督を何度も招いて、奉仕活動について助言を求めたり、奉仕活動に参加している教会の若人の支援を要請したりしているからです。市長は教会の若人の責任感の強さと、行儀の良さをよく知っています。」

南部の町に住むある宗教の指導者が専任宣教師を中傷したことがありました。ところが、この中傷がきっかけとなってその宗教の信徒の好奇心がそそられたのです。レファルケ兄弟はこう言っています。「その小さな町でこれ以上の効果的な宣伝はありませんでした。人々はその宗教を離れ、わたしたちの教会と、いつもワイシャツとネクタイを締めて礼儀正しい宣教師について知りたいと言って、わたしたちの教会にやってきました。その指導者が中傷する以前には、これほど多くのバプテスマを経験したことはありませんでした。」

しかし、教会への反対行動は言葉だけではありませんでした。1980年代にはあるテロリストグループが教会を外国勢力と見なし、全国の礼拝堂に対して200件を

超える放火、爆破行動を起こし、何人かの教会員が巻き込まれてけがをしました。¹¹しかしサンティアゴのある礼拝堂が爆破された際、近所に住む子供数人が巻き込まれるという事態に至って、攻撃は激減したのです。

「子供にけがを負わせたことでこのグループに反対する世論が高まったのです」とチリの教会広報部部长であり作家のロドルフォ・アセベドは説明しています。地元の教会指導者の懸命な努力によって、テロリストによる教会への攻撃は、外国勢力ではなく同国人に対する攻撃であることを大衆に理解させたのでした。

「良い保護者の下で」

チリの中部沿岸地方から集められた24人のユース聖歌隊「ゲツセマネ」を指揮するカレン・モンタルバの耳に響くのは音楽だけではなく。彼女の耳には、信仰と証^{あかし}、そして霊的な力が聞こえてきます。「教会は若人にとって良い保護者的な存在になりつつあります」とビニャデルマル市の若い女性会長が言います。

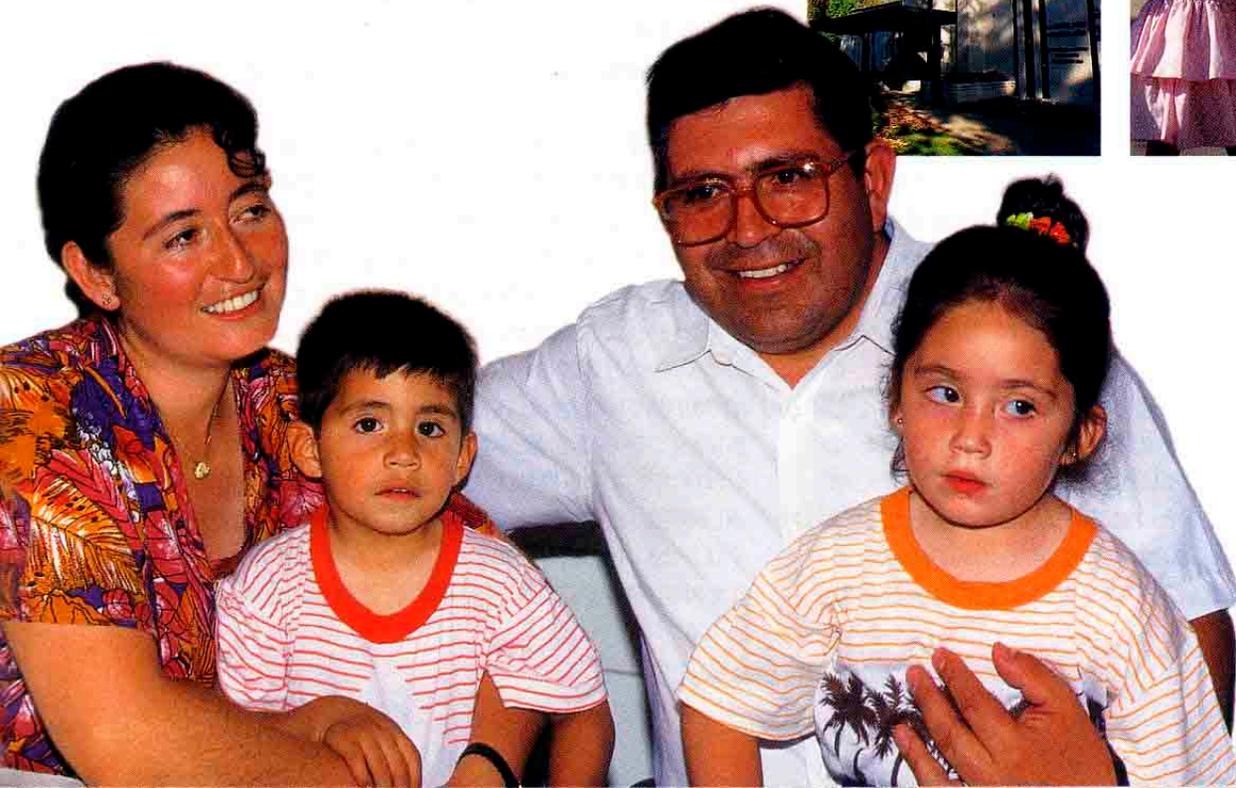
聖歌隊の結成を手伝ったカレンは、末日聖徒の若人は

積極的に自分たちの責任を果たそうとしていると語っています。例えば、聖歌隊のメンバーは全員が教会で様々な召しを受けていますが、そのほかに聖歌隊の練習、旅行、宣教師主催のファイヤサイドで福音を分かち合うために月に数十時間を犠牲にしているのです。

「わたしたちの演奏を聴きに来る多くの人は御霊を感じます。聖歌隊の優れたところは聴く人々の気持ちを動かし、歌う人の霊性を高めてくれることです。わたしはこの聖歌隊のように教会のために自分の才能を喜んで差し出す若い人たちが出てくることを夢見ていました」とカレンは語ってくれます。

全国至る所で、チリの若人は所属するワードや支部を強め、回復のメッセージを分かち合うために時間と才能をささげています。「わたしは福音に従って生活しているので、福音がどれほど大切なものかを理解しています」と話すのは、ビニャデルマル市に住む18歳のルイス・ペレイラです。彼は伝道に出る準備をしています。「教会の将来はわたしたち青少年の肩にかかっていることを自覚しています」と語るルイスの言葉は、末日聖徒の多くの若人の気持ちを代弁していると言えるでしょう。

下——アポキンドワード監督会のダニエル・メサ兄弟とスーレマ夫人、二人の子供。右——1983年に奉献されたチリ・サンティアゴ神殿。右端——教会に向かうチリの子供たち。右ページ——タルカウアノの宣教師、マーク・ショウ長老とコンサロ・アレジャーノ長老。





「この御業に働いているのは
わたしたちだけではありません」

チリの末日聖徒は若いも若きも、かつてパーリー・P・プラット長老が果たした使命に対する感謝の気持ちを抱いて、福音を広める責任を真剣に果たしています。

「この地で人々が福音を受け入れているのは決して偶然ではありません」と語るのは、教会教育部指導主事であり南アメリカ南地域の地域幹部、エドワード・ラマルティネです。「主はなぜプリガム・ヤング大管長に靈感を与えてプラット長老をチリに派遣されたのでしょうか。なぜ今日これほど多くのステーキが組織され、これほど多くのバプテスマが施されているのでしょうか。この御業に働いているのはわたしたちだけではないからです。神からの助けを受けており、人々の信仰に支えられているからです。」

カリフォルニアから64日間の船旅の末に到着したプラット長老を迎えた港バルパライソは、水深の深い三日月型をした姿を今もまったく変えていません。しかし、港まで家々が建ち並ぶ急こうばいの丘の景観は、当時とは少し趣を異にしており、4つのステーキに所属する末日聖徒の通う礼拝堂が、家々の間に点在しています。

チリでは豊かな収穫が刈り取られています。プラット長老が描写したように、実り豊かな農地は、「旧世界と新世界を見渡しても……これほど美しい景観はない」¹² たたずまいを見せています。□

注

1. *Autobiography of Parley P. Pratt* 『パーリー・P・プラット自叙伝』パーリー・P・プラット編, p.361
2. 同上p.368
3. 同上p.365—366
4. 同上p.364
5. *The World Book Encyclopedia* 『世界百科事典』3:458「チリ」の項参照
6. バーレ・M・オールレッド, 個人の日記
7. アレン・A・ボライコ"Chile:Acts of Faith" *National Geographic* 「チリ——信仰に基づく行為」『地誌』1988年7月号, p.67参照
8. *Conference Report* 『大会報告』チリ・サンティアゴ地域大会1977年, p.9
9. "Los Mormones:Una Religión Positiva" *El País* 「モルモン——前進する宗教」『エル・パイース』1991年9月17日付け, p.14—15
10. マリア・ホセ・エラツリツ"Frei Llamó a Jóvenes a Iniciar 'Nueva Marcha'" *El Mercurio* 「フレイ・ラモ氏, 若人に『新たな旅立ち』を説く」『エル・マリコーリオ』1995年1月19日付け, p.C3
11. ジョン・バルザー"Soulmen" *Los Angeles Times Magazine* 「高尚な心の持ち主」『ロサンゼルス・タイムズ・マガジン』1993年6月20日付け, p.18
12. *Pratt* 『プラット』p.364

初期の担い手たち

ペルラ・カルシアはそれを「テソロス」(宝物)と呼びます。チリの教会初期の時代の様子を伝える変色した新聞の切り抜き, 訪問した中央幹部の古い写真, 初期の改宗者の署名が入った年代物の『聖書』, そのほかにもご主人のリカルドとともに50年近くにわたって集めた思い出の品々です。ペルラはこれらを見る度に愛と思い出で心が満たされるのです。

カルシア姉妹は訪ねてきた人たちに

「テソロス」を見せる度に、聖霊の賜物たまものを受けたことへの感謝の言葉や福音を教えてくれた宣教師たちをたたえる言葉, そして1950年代後半にチリでほんの一握りだった末日聖徒の中に加えられたことへの喜びの言葉が口をついて出てくるのを禁じ得ないのです。会員はわずかしかいませんでしたが、祝福はたくさん頂きました, とカルシア姉妹は言います。

1956年6月23日, アルゼンチン伝道

部のバーレ・M・オールレッド長老とジョセフ・C・ベントレー長老は空路アンデス山脈を越えてサンティアゴに到着し, チリにおける近代の伝道活動を開始したのでした。現在はユタ州ブリガムシテーステークの祝福師として働くオールレッド兄弟は当時を思い出して次のように語っています。「すべてを自分たちで決めなければなりません。そのため, 主に非常に近く生活することによって, 主に頼るし

か方法がありませんでした。」オールレッド兄弟の話を引き継いで、ソルトレーク・パーリーズステーク、パーリーズ第5ワードで日曜学校の教師の責任を果たしているベントレー兄弟は「わたしたちはまるで開拓者でした。わたしたちは一生懸命働きました。それはすばらしい経験でした」と語っています。

カルシア姉妹が長老たちに会ったのは、庭に水をまいているときでした。そのときはご主人が町に働きに出ているため、帰宅するころにもう一度訪ねてほしい、と言いました。やがて長老たちがカルシア兄弟に会ったとき、「彼は以前会ったことのある人のようにわたしたちを心から歓迎してくれました。教会について話し始めると、彼は熱中してわたしたちが帰りたくても帰してくれようとしませんでした」とオールレッド兄弟は当時を振り返って話します。

家庭集会は3時間に及びました。その間中、カルシア兄弟は宣教師の言葉

に感動して涙を流しながら聞き入ったのです。1956年11月24日、カルシア兄弟はサンティアゴ・カントリークラブのプールでバプテスマを受け、チリで改宗した最初の末日聖徒となりました。その日バプテスマを受けた人はほかに8人いましたが、そのうち5人は子供でした。カルシア姉妹がバプテスマを受けたのは翌年の1月です。

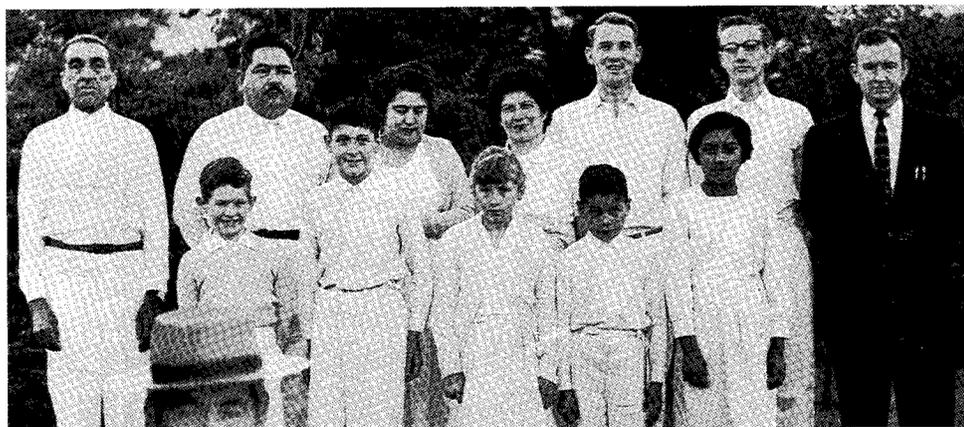
カルシア兄弟は農業関係の仕事に従事していたため、家族を連れて転々と住まいを移さなければなりませんでした。支部がない町へ行くと、新しい支部を作っていました。こうして、カルシア兄弟姉妹はこれまで教会で多くの責任を果たしてきました。

二人の間に生まれた娘のペルラは、家族が主に仕える喜びを回顧してこう言っています。「福音はチリの人々に偉大な祝福をもたらしてきました。父は口癖のように、主のぶどう園で働くことは実に美しいことだと言っていました。」

リカルドは1994年9月26日に亡くな

りました。病身にもかかわらず、リカルドは晩年をチリ・サンティアゴ・ヌニオアステークの祝福師として、またチリ・サンティアゴ神殿の儀式執行者として奉仕し、人生を全うしました。同じ時期、カルシア姉妹は神殿のオルガニストとして働きました。二人がお互いをいちばん近く感じたのは神殿の中で一緒に働いているときでした。

「主人はほんとうに特別な人でした。主人は次の世できっとわたしを待っていてくれます」とカルシア姉妹は語ります。「主人に先立たれるのはとてもつらいことでした。でも主人は幸せに死んでいきました。主人から最後にこう言われたのです。『泣いてはいけませんよ。わたしは与えられた仕事を終えて、行く準備ができた。おまえや子供たちとずっとまた会える。兄弟姉妹たちに伝えてほしい。忠実であってほしいと。わたしは兄弟姉妹を愛している。わたしは幸せな気持ちで次の世へ行くので悲しまないでほしいと。』」□



左——バーレ・M・オールレッド長老とジョセフ・C・ベントレー長老から福音を聞いたチリの最初の末日聖徒リカルド・カルシア兄弟，1956年の写真。左上——カルシア兄弟（左から2番目）とともに、ウィリアム・フォサリング支部長（紺の背広姿）とチリで最初にバプテスマを受けた改宗者たち。宣教師はフォサリング支部長の左隣。右上——チリにおける教会初期の時代の記念の品々を前に、懐かしく思い出を語るカルシア兄弟の奥さん、ペルラ夫人。



教会

サラ・フィッツジェラルド

ILLUSTRATED BY STEVE KROPP

2、3年前、素晴らしい機会になると思って、地元の動物園の求人に応募しました。採用の通知をもらったとき、日曜出勤もあるとのことでしたが、承知してしまいました。それからの数か月間は教会に行けませんでした。そして、ワードの会員とも連絡が途切れてしまいました。だからといって、正しい道から完全にそれてしまった、というわけではありませんでした。職場の仲間のようにお酒を飲んだり、有害な薬に手を染めてみたりしたわけでもありませんし、道徳的な標準は固く守っていました。でもすっかり落ち込んでしまい、あまり幸福を味わえず、天父を身近に感じることもありませんでした。

それに加えて、学校の成績も落ち、仕事を続けていくことが困難になってきました。動物園での仲間は、わたしに好感を持ってくれているようでしたが、わたしがやってはいけないと思っていることにわたしを加わせたいと思っていました。

いちばん悩んでいたころ、母から以前聖歌隊の教師だった姉妹が、若い女性の会長に召されたことを知らされました。翌週から、彼女は電話をしてくるようになりました。この新任の若い女性会長は、軍隊の徴兵係のようでした。クラスの活動や奉仕プログラムがあるときには、きまって電話をかけてきました。数週間、口実を設けては逃げてきたわたしでしたが、ついにクラスのみならず夕食に出かけることを承知してしまいました。レストランまで車で行く途中、クラスの女の子たちは男の子のことや、来学期の話をしていました。会長の姉妹も彼女たちの会話にしばしば加わりました。しかしわ

に戻る

わたしは黙って乗っていました。

みんなの幸せそうな顔を見ると、わたしは心の痛みを覚えました。それは何かすばらしいものを逃したときに感じる痛みです。その活動も終わり、家まで戻って来るころには、涙がこぼれ落ちそうになっていました。若い女性の姉妹たちが、生活の中に、わたしの望んでいた何かを持っていたからです。彼女たちは、自分が何者であり、どこへ行くのかを知っています。彼女たちは天父のそばにいます。天父が彼女たちの祈りを聞いておられるのも分かりました。会長はわたしが何を感じているか、気づいたようでした。教会のみんながわたしに戻って来てほしいと願っていること、そして彼女がいつもわたしのそばにいてくれることを思い起こさせてくれました。

その晩、わたしはベッドのそばにひざまずき、天父に心のすべてを注ぎ出しました。それは長い間していなかったことでした。天父と離れてどれほど寂しかったか、そして自分の選択によって、少しずつ天父との距離が大きくなってしまっていたことを悟りました。何にも増して、もう一度チャンスが欲しいと思いました。心の透き間を埋めたかったし、永遠に続く友情が欲しかったし、何より教会へ戻りたかったのです。

この経験をしてから、わたしをいつも心配してくれていた人々がいたことにも気づきました。やがて、教会に戻る道が見えてきました。それは容易ではありませんでしたが、わたしは教会の活動に戻ることができました。以来、福音はわたしの人生を豊かにし、希望を与えてくれています。わたしがこれまでに行きたいことはすばらしいこと、それは、教会に戻ったことです。□



ボールいっぱい の ピーナツ

ロナルド・W・ルック

ILLUSTRATED BY JERRY HARSTON;
PHOTOGRAPH BY JED CLARK



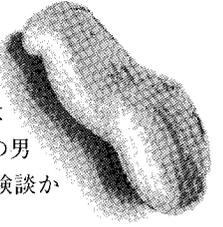
10代のころのわたしは、若者の多くにありがちな、将来への当惑と不安で悩んでいました。そして、これも10代にはありがちのことですが、親に悩みを打ち明けたいとは思いませんでした。親は年を取りすぎていると感じたからです。両親にわたしの悩みなど分かるはずがない、そう思っていました。彼らが自分のことを心配しているのは分かるのですが、両親がわたしと話し合おうとする度に、わたしはそれを避けていました。

ある晩、父が食料品の紙袋を持って仕事から帰って来ました。角の店に寄って数点買い物をしてきたのですが、その中に炒りピーナツの大袋が一つ入っていました。陶製の赤いボールを見つけると、父はそれに袋のピーナツを全部空けました。それから、懸念を隠し切れない声で、「少しつままないか」とわたしに話しかけてきました。気がかかっていることがたくさんあるのでだれかと話したい、とのことでした。わたしはしぶしぶその誘いを受け入れました。

ボールのピーナツが半分なくなるころには、二人は互いに心を通わせ、何年かぶりに腹を割った語らいを始めていました。父は、そんな穏やかで思いやりのある、間接的な方法で、幼いころからの父の教えを少しずつわたしの心の中に思い出させてくれました。

父は、父親としてだけでなく、ずっと年上の賢明な友人としてわたしと話してくれました。驚いたことに、父にはわたしの思いも寄らなかった豊富な知識や経験がありました。当時の政治や道徳的な問題についてはほとんど話しませんでした。その代わりに、わたしは自分より35歳も年上の男性の失敗や成功の経験談から多くを学びました。

それが、その後何度も繰り返された「ピーナツの集い」の記念すべき第1回でした。それから数年後、伝道に出発するわたしは、父を抱き締めました。抱き締め返してくれた父の腕に、わたしは父の強さと愛を感じました。わたしの人生の困難な時期に助けの手を差し伸べ、不変の真理を分かち合ってくれた父に尽きることのない感謝を感じています。父から学んだ真理は、それ以来わたしを導く力となってきました。父の誠実な友情と、警戒心を抱かせない接し方のおかげで、わたしは不安定な時期にしっかりとした土台を築くことができました。そして今では、わたし自身が子育てをする際、父の接し方を手本としています。□





「ニーファイ人に記録を見せるよう望まれるイエス」 ロバート・T・バレット画

救い主はニーファイ人の弟子たちに語り、彼らに与えられている聖文をすべて読み明かした後、「見よ、あなたがたが書いていない別の聖文を書き記すことを、あなたがたに望む」と言われた。そして主は、ニーファイに言われた。「あなたがたが書き継いできた記録を持って来なさい。」そこでニーファイは記録を持って来てイエスの前に置いた（3ニーファイ23：6-8）。



40年前、チリが福音の音を宣べ伝える地として奉獻されたとき、福音のメッセージを分かち合うという責任を、地元の教会員たちは受け入れた。現在彼らは年間約2万人もの改宗者という収穫に恵まれている（「チリ——豊かに実ったぶどう園」本誌，p.34参照）。



ヒンクレー大管長、 アジアの聖徒たちと会い、 香港神殿を奉獻

ゴードン・B・ヒンクレー大管長はわずか18日間にアジアの7つの国と一つの属領地を歴訪した。大管長は13の市を旅し、多くの政府高官に会い、報道関係者からのやむことのない質問に答え、延べ7万5,000人の前で21回の説教を行い、そして、香港神殿を奉獻した。今回の旅行にはマージョリー夫人ならびに十二使徒定員会会員のジョセフ・B・ワースリン長老とエリサ夫人も全行程を同行している。また、他の中央幹部もこの18日間、各地で大管長と行動を共にした。

懐かしい地、日本 この国にこれだけの力が

5月17日、ヒンクレー大管長は今回のアジア旅行の最初の訪問地である東京に到着した。現職の大管長がアジアを訪問するのは、1980年にキンボール大管長が東京神殿奉獻に際しての来日以来のことである。

日本滞在中、ヒンクレー大管長は幾つかの集会を管理し、説教を行った。

東京ではファイヤサイドと宣教師大会を管理するとともに、記者会見も行った。さらに大阪では地区大会、福岡ではファイヤサイドと宣教師大会、そして沖縄県那覇市では教会員と宣教師のためのファイヤサイドを管理した。

「わたしが日本を訪れたのは、これで45回目か46回目になると思います。」ある集会でヒンクレー大管長はそう述べた。「初めてこの地を訪れてから、たくさんの奇跡を目にしてきました。」

東京での5月18日のファイヤサイドでヒンクレー大管長は、1901年に十二使徒定員会の一員として日本を訪れたヒーバー・J・グラント第7代大管長について触れた。「彼と他の3人の宣教師は……雑踏を離れて静かな場所へ行き、福音を宣べ伝える地として日本を奉獻しました。」ヒンクレー大管長は、成果を得られなかったグラント大管長が、失意のうちに帰国したこと、またそれから23年後、グラント大管長自身が伝道部を閉鎖したことを話した。

今日、日本には神殿があり、25のステークと8つの伝道部の下に10万人を超える教会員がいる。「グラント大管長がこの場にいたら、感謝の涙を流すことでしょう。皆さんの顔を拝見しているとそう感じます。」ヒンクレー大管長は、立見が出るほど詰めかけた超満員の聴衆にそう語った。「この国にこれだけの力がつくとは夢想だにしませんでした。」

東京ではヒンクレー大管長にとって特別な会が催された。「旧友」のためのレセプションである。大管長が中央幹部として日本を担当した11年間、ともに働いた約90人の教会員が大管長と再会した。抱擁と握手、そして涙の会であった。「忠実に主の業に従ってこられたあのような信仰深い兄弟姉妹たちを見ると、涙が止まりませんでし



6,800人が集った東京ベイN.K.ホールでのファイヤサイドで説教するゴードン・B・ヒンクレー大管長。

た。」ヒンクレー大管長はそのときのことを振り返ってそう語っている。

東京滞在中、ヒンクレー大管長は、日本駐在の合衆国大使ウォルター・モンデル氏を表敬訪問した。また、日本を代表する新聞、雑誌7社の記者と2時間近く会見を行った。それに加えて、訪問した各地の教会指導者とも大勢会っている。

平和の地、韓国 貧困から繁栄へ

日本の次の訪問国は、韓国であった。5月21日、釜山に到着した大管長は、宣教師大会で専任宣教師との集会を行い、その晩、教会員とのファイヤサイドで話をした。そして、国連記念墓地も訪れた。

翌5月22日、大管長はソウルに到着、宣教師や教会員との集会を開き、ソウル神殿にも立ち寄った。また、有力全国紙の13人の記者との会見も行っている。

ファイヤサイドに集った教会員に、

ヒンクレー大管長は次のように述べた。「初めて韓国を訪れたのは、今から36年前です。1960年、韓国はまるで別の国でした。人々は深刻な貧困を抱えていました。大きな苦しみを受けていたのです。

今、ここには繁栄があります。平和もあります。しかし、昔に勝る信仰が今あるかどうかは分かりません。わたしはこの地で数々の驚くべき、信仰を深める、神聖な経験をさせていただきました。」

ヒンクレー大管長は続ける。「皆さんは選ばれた世代です。そのことに感謝すべきではないでしょうか。……このホールに今晚来ておられる男性の方々は、神権を持っておられます。それは王国の神権です。神の御名により語る力であり、権能であり、権利なのです。」

韓国訪問を終えたヒンクレー大管長は、空路台湾の台北に移動、そこでも専任宣教師ならびに教会員と集会を行った。その後香港に移り、香港神殿を

奉獻し、宣教師との集会を開いている。

大きな夢の実現、香港神殿 教会は今や成熟の域に

ヒンクレー大管長が初めて香港を訪問したのは、今から36年前の1960年、アジア地域の担当となったときのことである。「この神殿はわたしの半生の大きな夢の実現です。」5月26日の神殿奉獻前日、大管長は宣教師たちにそう語った。

奉獻のための全7セッションのうち、最初の4セッションが行われた日曜日は、終日雨であったが（残りの3セッションは5月27日の月曜日に行われた）、定礎式が行われた午前8時には、短時間ではあったが雨が上がり、数々の歴史的な文書や写真、そのほか香港の教会員にとって重要な意義のあるものが礎石の中に収められた。

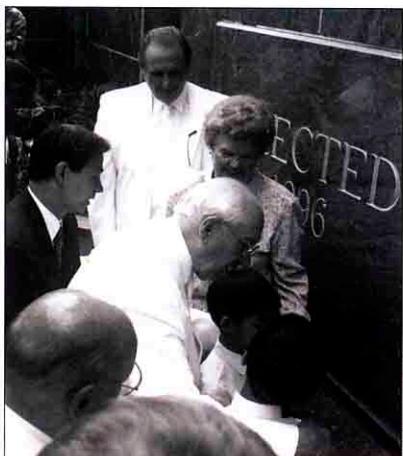
奉獻のセッションでは、香港の5つのステーキから成る地元の聖歌隊が歌った。そして、教会の現在稼働中の48の神殿の中で、5つを除くすべての神



ゴードン・B・ヒンクレー大管長は、日本駐在合衆国大使ウォルター・モンデル氏を表敬訪問し、教会を紹介した本『ザ・ミッション (The Mission)』を贈呈した。



およそ16年ぶりに日本を訪れた大管長を迎えて会場の東京ベイN.K.ホールを埋めた会員たち。



アジア北地域会長会会長デビッド・E・ソレンセン長老宅で行われた旧友のためのレセプション。

PHOTOGRAPHY BY GERRY AVANT, CHURCH NEWS.

ゴードン・B・ヒンクレー大管長に招かれ、定礎式に参加する神殿地区の子供たち。そばで見ているのは、トーマス・S・モンソン第一副管長。

PHOTOGRAPHY BY GERRY AVANT, CHURCH NEWS.



殿の奉獻式や再奉獻式に参加しているヒンクレ大管長が、最初のセッションで奉獻の祈りをささげた。2回目のセッションからは、司会と祈りをトーマス・S・モンソン第一副管長と交代で担当した。奉獻式に参加したそのほかの中央幹部は、十二使徒定員会会員のニール・A・マックスウェル長老、ジョセフ・B・ワースリン長老、七十人でアジア地域会長会の任にある戴國源長老、ジョン・H・グローバーク長老、ルロン・G・クレーブン長老である。

中央幹部の夫人であるマージョリー・P・ヒンクレ姉妹、フランシス・S・モンソン姉妹、コリーン・マックスウェル姉妹、エリサ・ワースリン姉妹、戴惠華姉妹、ジーン・グローバーク姉妹、それにドナ・クレーブン姉妹も列席した。

最初のセッションの奉獻の祈りに先立ち、ヒンクレ大管長は「この聖なる神殿の奉獻により、教会は今や成熟の域に達しました」と述べた。そして祈りの中では、150年前に香港を初めて訪れた宣教師たちに感謝の気持ちを述べるとともに、これからも香港の人人に礼拝の自由が続けて与えられるように祈った。

奉獻の7つのセッションには延べ5,000人以上が集ったが、それにはシンガポール、台湾、タイ、そのほかの国々からの大勢の訪問者も含まれる。

預言者、初めて中国本土に民族衣装をまとった500人の歓迎

5月27日、最後の奉獻のセッションの後、ヒンクレ大管長は現職の大管長として初めて中国本土に足を踏み入れ、香港と中国本土との国境をわずかに中国側に入った深圳で一夜を過ごした。この訪問は、ハワイにある教会のポリネシア文化センターの努力で実現したものである。ヒンクレ大管長ならびにモンソン副管長、マックスウェル、ワースリン、戴の各長老は、ポリネシア文化センターと姉妹センターの関係にある中国の民族文化村「スプレンドイド・チャイナ」を訪れた。そこは中国の村落の姿を再現した施設であるが、世界中の主要な文化をミニチュ

ア版で紹介する「世界の窓」という展示もある。短時間の滞在ではあったが、500人もの民族衣装をまとったダンサーや演技者たちが、列を作って一行を歓迎した。

中国本土での滞在から一夜明けた5月28日、ヒンクレ大管長はカンボジアに移動、プノンベンメコン川を臨む丘の上に立ち、カンボジアの地を伝道の業のために奉獻する祈りをささげた。この奉獻の祈りに同席したのは、ヒンクレ姉妹、ワースリン長老夫妻、それに七十人でアジア地域会長会の第二副会長であるジョン・H・グローバーク長老夫妻である。グローバーク長老夫妻はカンボジアでの短い滞在中、大管長一行と行動を共にした。また、カンボジアで伝道する12人の専任宣教師も大管長に同行、さらにプノンベンのホテルの会議場で開かれた集会には400人を超える教会員や求道者が集まった。

預言者、ベトナム全土を奉獻

そして5月29日水曜日、ヒンクレ大管長はホーチミン市に到着、カラベルホテルの屋上に立った。そこは1966年、ヒンクレ大管長が当時の南ベトナムを伝道の地として奉獻した場所である。ヒンクレ大管長は、地元の教会指導者の自宅を訪問、そこに集まった約25人の地元の教会員と交流を深めた。午後は飛行機でハノイに移り、ハノイ支部の19人の教会員や教会の人道的救援活動に携わる夫婦宣教師、それにハノイに駐在するビジネスマンの夫婦のもとを訪問した。そしてハノイでは、ヒンクレ大管長がプノンベンでの奉獻の祈りの「補足」と名付ける祈りをささげた。ベトナム全土を視野に入れた祈りである。

教会史上最大の集會、フィリピン信仰により天からの祝福を

そして同日夜遅く、ヒンクレ大管長はフィリピンのマニラに到着、マニラとセブの教会員や宣教師の出迎えを受けた。

木曜日の早朝、ヒンクレ大管長は全国紙の記者とのテレビ会見を行った。同会見は、150局ネットでフィリ

ピン全土に中継された。その後で、大管長はアメリカ従軍記念墓地を訪れた。35年前、ヒンクレ大管長自らフィリピン諸島を伝道の地として奉獻した場所である。

後に行われたフィリピンで伝道する専任宣教師との集会で、ヒンクレ大管長はその墓地が「神聖な」場所であると述べた。

「そこにはこの国の自由のために命をささげたアメリカ人とフィリピン人が埋葬されています。主の御霊がこの国に宿り、人々の心の琴線に触れることを願っています。」

マニラでは地元のスポーツアリーナを埋め尽くした約3万5,000人の教会員に対して説教を行った。忠実な教会員は夜7時からの集会のために朝から列を作り、満員のため一時は入場を断られた数百人の人々も、後になって入場を許可された。

大管長は集まった人々、特に若人に対して、清く徳高い生活をするように勧告した。「わたしたちは正直を信じています。わたしたちがこの世の道徳の基準を超えた生活をするを信じています。皆さんは不徳な生活をしてはなりません。汚い言葉を遣ってはなりません。主の御名を汚してはなりません。わたしたちは真実、純潔、慈善、徳高くあるべきことを信じています。好ましいこと、あるいは誉れあることや称賛に値することがあれば、わたしたちはこれらのことを尋ね求めるのです。」

またヒンクレ大管長は、集まった人々に次のような祝福を残した。「わたしは皆さんを祝福します。もし皆さんが信仰をもって歩み、福音に従って生きるならば、食卓には食物があり、背には衣服があり、頭上には屋根があるでしょう。そして、天からの祝福がもたらされます。」

翌日、ケソンシティ伝道部とマニラ伝道部の合同宣教師大会でヒンクレ大管長は、前日の集会について触れ、こう述べた。「昨日の集会は、恐らく一つ屋根の下での末日聖徒イエス・キリスト教会の集会としては最大のものではなかったかと思います。わたしにとって偉大な日でした。」

宣教師は「御業の同僚」

「ヒンクレー大管長は宣教師に対して誘惑を避けるように勧告し、彼らを「御業の同僚」と呼んだ。「同僚の皆さん、臆する霊ではなく愛の御霊をもって、神権の力をもって、証の力をもって、そしてこの国の人々への愛をもって前進してください。主イエス・キリストの証に恥じることなく進みましょう。」

5月31日、金曜日は蒸し暑い日となったが、ヒンクレー大管長はセブ島の9,000人の教会員と集会を開いた。集会は早朝に開かれた。船で集会にやって来た人々が、できるだけ速やかに帰れるようにとの配慮からである。

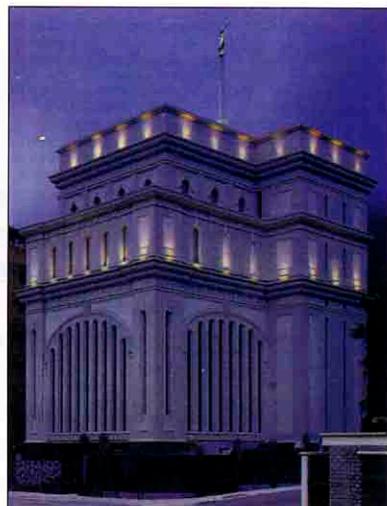
フィリピンからの帰途、飛行機が給油のためにサイパンに立ち寄ることを知った大管長は、七十人でフィリピン・マイクロネシア地域会長のベン・B・バンクス長老に依頼して、サイパンに在住する宣教師や教会員と会う用意があることを事前に連絡し、給油の間、10人の宣教師ならびに60人の教会員と会うことができた。短いながらも「すばらしい経験」だったとヒンクレー大管長は語った。□



フィリピンのマニラ。ゴードン・B・ヒンクレー大管長夫妻は3万5,000人を超える会場いっぱい
の会員や招待者の歓迎を受けた。5月30日、アモラントスポーツセンターで開かれたファイヤサイドにて。PHOTOGRAPHY BY GERRY AVANT, CHURCH NEWS.



中華人民共和国、深圳にて。中国文化センターの出演者たちと一緒に
写真に収まるヒンクレー大管長夫妻（中央）。中央の列、左からジョ
セフ・B・ワースリン長老夫妻、トーマス・S・モンソン副管長夫妻、
ヒンクレー夫妻の右隣は一人置いてニール・A・マックスウェル長老
夫妻。PHOTOGRAPHY BY GERRY AVANT, CHURCH NEWS.



香港神殿の奉献式は、5月26、27の2日間に合計7回行われ、延べ5,000人以上が集った。この建物は、最上階の5、6、7階部分と地階のパブテスマフオンが神殿となる。この聖なる建物には、ほかに集会所、伝道本部、神殿長および伝道部長の住居、ビーハイブ衣料センターが入居する。またこの神殿は、香港、マカオ、シンガポールに住む2万1,000人の教会員が利用することになる。TEMPLE PHOTO BY CRAIG DIMOND.

ヒンクレー大管長、 記者懇談会で 教会の成長をアピール

「あなたがたはその実によって 彼らを見わけるのである」(マタイ7:16)

ゴードン・B・ヒンクレー大管長の来日に合わせて、5月18日(土)、東京都内のホテルで記者懇談会が行われた。招待したメディアからは、新聞社(4社)、通信社(1社)、雑誌社(1社)の出席があった。

アジア北地域会長会会長のデビッド・E・ソレンセン長老が大管長を紹

介し、続けてヒンクレー大管長が、教会の概要を説明した。その後は、質疑応答の時間となり、記者からかなり踏み込んだ質問が出されたが、ヒンクレー大管長はユーモアを交えて明るく答えた。記者たちは、大管長が85歳という高齢であるにもかかわらず、非常に元気なことに驚いて

いた。

ある記者からの「どうして宣教師は若い人しか召されないのですか」という質問に対して、「若い人でないと、わたしのペースについてこれないからです」と答えるなど、終始和やかな懇談会となった。以下は、記者とヒンクレー大管長との間で交わされた質疑応答の要約である。

政教分離の立場

——今年は米大統領選挙が行われますが、教会は、どのようにかわるのでしょうか。また特定の候補を支持するのでしょうか。

「教会は政教分離の立場を取っていますので、いかなる党、いかなる候補者をも支持することはありません。これに加え、教会の所有する建物・施設

を政治目的に使用することも一切ありません。教会は政治に関与すべきではないと信じています。ただし、モラル（道徳）に関してはこの限りではありません。これについては、わたしたちの意見を表明しています。

日常的な政治活動に教会としてかかわることはありませんが、各教会員には個人の持つ政治的権利を正しく行使するように勧めています。わたしたちは、信仰の自由が良い政治を行うために欠かせない条件の一つであると考えます。

わたしたちが正式に宣言した信仰簡条から引用しますと、『わたしたちは、自分の良心の命じるとおりに全能の神を礼拝する特権があると主張し、またすべての人に同じ特権を認める』のです（信仰簡条1：11）。したがって全人類が、いつ、どのような所でも礼拝の自由を持つと信じています。』

——同性愛についてどのようにお考えですか。

「わたしたちはいかなる状況にあろうとも、人々を愛したいと思えます。しかし、同性愛やその結婚については反対です。結婚は神が与えてくださったものであると信じています。それは男性と女性の間でのみ許されるものです。結婚を通して、わたしたちは家族を築きます。その中で子供たちが生まれ、成長していきます。子供たちは、わたしたちにとって大きな祝福です。この祝福は決して拒むべきものではありません。むしろ大いに求められるべきものです。このことから、わたしたちの中絶に対する立場も明らかになります。』

国の法律に従うように

——戦争についてどのようにお考えですか。

「わたしたちのメッセージのテーマは平和です。戦争とは平和を実現できなかった状態、すなわち『失敗』を意味します。紛争が起こった場合、だれしも戦争を望みはしません。しかし、時には自由などの大きな問題にかかわる場合で、解決のためのあらゆる手段が閉ざされたとき、武器による問題解決、すなわち戦争が避けられない状況

になります。それでも、解決しようとする意志さえあれば、たいていは解決できるはずです。』

——アメリカ合衆国が決定する戦争、すなわちベトナム戦争や最近の湾岸戦争を含めて、教会は協力的だったと聞いていますが、もし間違いであれば訂正してください。

「わたしたちは全世界的に、教会員に自分の国の法律に従うように勧めています。わたしたちは法律を守り、尊び、支えるべきことを信じています。したがって国家が何かを行うときは、教会員もそれに従うのは当然のこととなります。ですから世界大戦のときは、同じ教会の会員が両方の陣営にいて戦っていました。』

「結んでいる実を見て判断してください」

——歴史学者がモルモン教徒の歴史を研究する場合、歴史文書などの閲覧が自由にできないと聞いています。資料を幅広く公開することはできないのでしょうか。

「教会が設立されて以来、多くの人々が教会について調査し、記してきました。人生のほとんどすべてをそのことに費やした人もいます。しかし、わたしたちの所有する資料の一部は非常に個人的なもので、プライバシーを保護するうえで公開すべきでないものがあります。例えば、個人の日記のたぐいです。

教会員についての資料は、繰り返し繰り返し何度も調査されて、数多くの様々な本が書かれてきました。それでも教会は前進し、成長し続けています。これらが教会の成長の妨げになったり、恥ずべきものになったりすることはありません。

昨年11月、わたしはCBSの番組『60ミニッツ』のマイク・ウォレス氏から取材を受けました。彼はアメリカのテレビ界において、最も鋭いインタ



記者懇談会で教会の概要を説明するゴードン・B・ヒンクレー大管長。左はアジア北地域会長兼会長デビッド・E・ソレンセン長老。大管長の右隣は、通訳のケント・ギルバート兄弟（都ホテルにて）。

ビューをする人物として有名です。彼はありとあらゆることを聞いてきました。結果的に、放映された番組は、教会に対して非常に好意的なものでした。

彼は番組の中で、教会に対して批判的な人々にもインタビューしています。しかし、わたしは彼にこう申し上げました。『一つだけお願いがあります。教会が世界中で何を行っているのか、何を成し遂げたか、わたしたちの結んでいる実を見て判断していただきたいのです』と。

教会は非常に建設的、積極的に成長しています。もちろん、わたしたちを批判する人もいます。わたしたちも間違いを犯し、たまには失敗することがあります。しかし、全体を通して見ると、成長、安定、強さ、成功を得ています。』

世界最大の女性の組織

——フェミニズムに関して、一部の学者から、モルモンは女性に対する見識があまり高くないのではないかという意見があります。大管長会や十二使徒定員会など主立った幹部の中に女性がいけないとの批判がありますが、女性の権利に関して大管長はどのようにお考えですか。

「家内にお聞きください〔笑〕。わたしたちの教会には、女性の団体としては恐らく世界でいちばん大きな組織があります。300万人を擁するその女性の組織から役員が選出され、自分たちでプログラムを作り、学習カリキュ

ラムを組んでいます。世界中のいかなる団体を見ても、この教会ほど女性に大きな機会を与えている団体はないのではないかと思います。

神の計画の中で、家内はわたしと同様に重要な存在であると信じています。モルモンとしてのあるべき姿は、女性が男性の前でも後ろでもなく、パートナーとして隣に立って歩くことです。

わたしには、3人の娘と2人の息子がいます。娘たちを息子と同様に愛しています。いや、むしろ娘たちの方をより愛しているかもしれません。わたしにとっても優しくしてくれますからね。

教会における女性への対応について、何ら恥ずべきことはありません。ブリガム・ヤング大学の理事会にも女性がいますし、先日の総大会でも女性は話をし、祈ります。教会が与えることのできるすべての特権を、女性である彼女たちは受けているのです。」

——将来的には、女性の大管長が誕生する可能性はあるのでしょうか。

「それは分かりませんが、わたしが見通すことのできる将来について言えば、それはいいでしょう。彼女たちはそのことを心配してはいません。教会での自分の責任に忙しいですし、男女間の競争はありませんから。」

福音の下で世界的な家族に

——モルモンの立場では、すでに人種差別に反対する姿勢を明らかにしていますが、現在そのためのプログラムが活動を行っていますか。

「こう申し上げたいと思います。わたしたちが宣教師を通して行っている伝道活動は、日本でも一生懸命行っておりますが、西アフリカのガーナでも同じように力を入れています。先日、わたしはガーナに行き、大きな劇場いっぱい集った観衆を前にしました。すべての人がこの教会の会員であり、黒人でした。すばらしい人々です。幸福で、偉大な業を推し進めている人々です。

わたしは全世界の神様の息子娘を愛しています。36年間、わたしは日本人、韓国人、中国人とともに働いてきまし

た。フィリピン、インド、ベトナム、マレーシアの人々ともです。彼らはわたしの兄弟姉妹です。わたしの友であり、同僚であり、同志でもあります。わたしは、人種差別に当たる気持ちを抱いたことはありません。アフリカの人々とも仕事をしてきました。人種差別どころか、多くの財力を注ぎ、イエス・キリストの福音の下で世界的な家族になろうと努力しているのです。」

——世界中を見て回って、今の世界の青少年の心の状況、特に日本やアメリカなど先進国の青少年の心の荒廃などをどう見ておられますか。

「この教会が成長を続けている理由の一つに、価値観が激しく変動する世の中にあって、教会が堅固な錨となり、個人を支えていることが挙げられます。

モラルに関して申し上げますと、教会は婚前交渉や結婚後の不貞な関係を一切認めていません。わたしたちの教会の若人を見るとき、これらの教えが彼らを強めているのが分かります。

最近、若い人々と話す機会を持ちましたが、彼らは気軽な性交渉を勧める風潮に流されず、高い標準を守っていました。同じような高い標準を守っている人々と交わることによって、幸福や平安、強さを得ることができます。それはわたしたちの携わっているこの業を強めてくれる大切な要素です。だからこそ、毎年数十万もの人々がこの教会に加わっているのです。」

「神の栄光は英知である」

——教育に大変力を注いでおられるということですが、どのような教育を行っていますか。

「まず申し上げたいことは、人間の持つ知的な好奇心こそが、この教会の組織設立をもたらしきっかけになったということです。わたしたちは教育を大変重視しています。教会はかなりの予算を若人の教育のために注いでいます。彼らが自分で考え、探求し、行うことができるように、またすべての分野において、自分の頭で考え知識を増すことができるようにです。『神の栄光は英知である』（教義と聖約93：36）というのがわたしたちの教会のモットーです。

わたしたちは、若者に教育を受ける機会を進んで求めるように励ましています。宗教について学ぶプログラムもあります。日本でも3,500人の若者が宗教教育であるセミナーやインスティテュートを通じて学んでいます。また、これらは若者たちの社交の場となっています。頼り合い励まし合って、社会の波に対抗する強さを培う場となっているのです。

今朝、わたしはここに来る前にアメリカ大使館に寄ってモンテール駐日大使に会ってきました。彼は教会のプログラムや活動に対して好意的です。現在、日本では約1,000人の宣教師が働いています。わたしたちの教会の活動の目的を要約するとこうなります。『悪人を善人に、善人をさらに善き人にする』のです。』□

「モルモン教」の名で知られる末日聖徒イエス・キリスト教会の最高指導者ゴードン・B・ヒンクレー大管長(65)が、このほど来日、記者会見で最近の教団活動や次期米大統領選に対する姿勢などについて語った。

同教団は世界で約九百四十万人の信徒をもち、日本では十万人以上いる。大管長は香港での新しい神殿

は初めての日本訪問。五日間の滞在ながら、千葉県浦安、大阪、福岡、那覇の信徒大会などに出席した。会見ではまず、教団が最も重視しているのは、次期米大統領選については、「私たちがいかなる政党、候補者も支持しない。教会は政治に関与すべきではない。道徳に関する問題についてなら、私たちが意見を表明するが、日常の政治活動には教会としては参

加しない」と教団としての中立を明言した。大統領選の争点とされる同性愛結婚や人工妊娠中絶の問題に関しては、「結婚は神が人間に与えたものであり、それは男と女の結婚だ。それにより家族が作られ、子供が生まれる。また、子供は大いなる祝福だ。従って、同性愛結婚にも中絶にも基本的に反対だ」と述べた。

「社会改善は家族から」

モルモン教大管長が来日し会見



●1996年5月18日(土)、6,800人が集った
東京ベイN.K.ホールでの特別ファイヤサイドにて

「信じない者にならないで、 信じる者になりなさい」

大管長ゴードン・B・ヒンクレー

わ わたしは、1901年に(使徒として)日本に来たヒーバー・J・グラント第7代大管長のことをずっと考えていました。彼とほかの3人の宣教師は、横浜に着きました。彼らは雑踏を離れて静かな場所へ行き、福音を宣べ伝える地として日本を奉獻しました。

それから23年後、彼は大管長として自ら日本の伝道部を閉鎖したのです。そしてほんの一握りの末日聖徒が残されました。彼らはその後ずっと耐えました。彼らは勇敢でした。そして忠実でした。信仰を守りました。そのわずかな教会員の方々を指導してきたのが奈良富士哉兄弟(1992年死去、94歳)でした。

1960年、わたしが初めて日本を訪れたときに奈良兄弟とお会いして親しくお話をさせていただきましたが、お年を召されてもお強い信仰をお持ちでした。今日は奥様の奈良姉妹から頂いたお手紙を持ってまいりました。奈良姉妹は95歳になり、毎週川越ワードに集い、神様の細い道を一生懸命歩んでいるとお書きになっています。

「この国にこれだけの力がつく とは夢想だにしませんでした」

皆さんに、このようなすばらしい模範に従っていただきたいと思います。また、信仰に忠実であっていただきたいと思います。この教会は、今の時代に生きるわたしたちにとって啓示そのものです。皆さんは神の大義のために働いています。主の示してくださった大義を、燃えるような信仰と証を持って続けていくのです。

もし今日、グラント大管長がこの場にいたとしたら、感激の涙を流したことでしょう。皆さんの顔を拝見してい

るとそのように感じます。わたしは、皆さんの中に力強さを感じています。この国にこれだけの力がつくとは夢想だにしませんでした。

「信じない者にならないで、 信じる者になりなさい」

これから少しの間、イエス・キリストがよみがえられた最初のイースターに思いをはせてみたいと思います。空になった墓を見た使徒たちがいる日、「わたしたちは主にお目にかかった」とトマスに話しました。しかし彼はそれを信じるできませんでした。

それから8日後、再び主は弟子たちに姿を現されました。そのときは、トマスも一緒でした。そしてトマスに「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい」と言われました。それから「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」と言われました(ヨハネ20:24-29参照)。皆さんに、わたしもまた同じことを申し上げたいと思います。「信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」

では、何を信じたらいいのでしょうか。皆さんの永遠の父である神を信じてください。謙遜に神に近づくなら、祈りはこたえられます。わたしたちの望む方法とは違うかもしれませんが、神の大いなる知恵をもって、いちばん良い方法でこたえてくださるのです。信仰をもって信じてください。

主イエス・キリストを信じてください。生ける神の御子です。わたしたちが永遠の命を受けられるように、十字架上で命をささげてくださいました。唯一完全な御方です。すべてのことにおいて模範を示してくださいました。

ジョセフ・スミスによって回復されたこの教会を信じてください。わたしの教会ではありません。主イエス・キリストの教会です。この教会の神権を導かれるのは主イエス・キリストです。

皆さんが自身を信じてください。皆さんがたの能力を信じて、善いことを行ってください。福音に生きるという決心をするのであれば必ずできます。

知恵の言葉、正直、純潔、什分の一といった戒めを守られない人は、この場にいないと思います。什分の一は、金銭ではなく信仰にかかわる戒めです。この戒めに忠実である方々を、心からお褒めしたいと思います。日本は、アメリカやカナダ、そのほか数か国を除いて自国の什分の一で教会を維持できる唯一の国です。確かに主は、天の窓を開いて皆さんを祝福しておられます。

「昔からの友人たちに来て 目頭を熱くしました」

そして、皆さんにわたしの抱いている愛を知ってほしいと思います。昔からの友人たちに来て目頭を熱くしました。また、今ここに集われている皆さんにも心からの愛を示したいと思います。香港神殿の奉獻に向かう前に、ぜひとも愛する日本の皆さんにお会いしたいと思いました。皆さん一人一人と握手することは不可能ですが、心は通じ合っていると思っています。

教会の若い人に申し上げます。教会で忠実に励んでください。神殿で結婚できるように姉妹たちを選んでください。そのことによりさらに幸福になることができます。

神権を持つ若い兄弟の皆さん、若い人たちを魅了するような生活を送ってください。

結婚している兄弟の皆さん、尊敬と親切な心をもって奥さんに接してください。また奥さんを、前でも後ろでもなく、横に連れ添って歩まれることをいつも覚えていてください。

母親である姉妹たちに申し上げます。家庭の中に、平和、愛といった福音の精神がみなぎるようにしていただきたいと思います。そのことによって子供たちを信仰のうちに育てることが

できます。

「生活が喜びで満たされるように 祝福いたします」

この御業は真実であること、また永遠の父なる神が生きておられることを証します。イエスがキリストであり、ジョセフ・スミスは、確かに現代に召された預言者であることを証します。啓示の御霊が、この教会にみなぎっていること、またその啓示に従うなら、わたしたちは幸せになることを証します。

いつも家庭に安らぎがあるように、生活が喜びで満たされるように、衣食住がいつも足りるように、そしてひざ

をかがめ、神様の恵みに感謝できるように祝福いたします。また、隣人とこの福音と証を分かち合えるように、福

音の喜びを味わえるように、主が皆さんとともにいらっしゃるように祝福いたします。□



「神よ、また逢うまで」の聖歌隊のコーラスに送られて東京ベイN.K.ホールを退出するヒンクレー大管長。

ヒンクレー大管長を迎えて開催された京都・大阪地区大会

— 教会堂に3,000人を収容 —

当 初月に予定し、場所まで確保していた京都・大阪地区大会は、ゴードン・B・ヒンクレー大管長の来日に合わせて、5月開催となりました。

会場探しを含め、急ぎそのための準備に取りかかりました。大阪、堺、神戸、大阪北、大阪東、京都の6ステークと福知山、奈良、御坊（和歌山）の3地方部からの実行委員会が組織され、大会運営基準の指針に従って責任を分担し、準備を進めました。数千人を収容できる会場の予約は、1年も前から組まれているため、会場の確保に困難を極め、会員は断食し、祈り求めました。結局大阪東ステークセンター（大阪府茨木市）を会場として使用することになりました。

スペースの問題はあるにせよ、大阪東ステークセンターは「献堂された主

の家」です。「主を礼拝するものであふれる」という献堂式での言葉と、大管長をお迎えするという喜びで心を一つにし、会員たちは夜遅くまで会場の準備に励みました。

通常の倍以上の人々を収容できるように、レクリエーションホールに300人を収容できる仮設の2階席を増設し、さらに老人、身障者、耳の不自由な会員のための手話席、乳幼児や救護のための部屋も確保し、まさに「信仰の家、礼拝の家」として、すべてのスペースを無駄なく活用しました。また会場中央に約300人から成る聖歌隊用の席を設けました。

土曜日の神権指導者会では、300人を超す神権者が十二使徒定員会会員ジョセフ・B・ワースリン長老とアジア北地域会長会第一副会長のサム・K・島袋長老から指導を受けました。

その後持たれた「ワースリン長老歓迎会」としての夕食会では、「親が信仰しているからといって、子供も同じ信仰を持っていると思わないで、初めから教えてあげないと親と同じ信仰にはならない」と子供を教えることの大切さを強調されました。

翌日、いよいよヒンクレー大管長をお迎えしました。3,000人近い人々で会場はあふれ、立錫の余地もないほどでした。ヒンクレー大管長の姿を拝見し、「すべての預言者は、キリストの子型である」（『旧約聖書〔創世記-サムエル記下〕』インスティテュート生徒用資料、p.89参照）との言葉をかみしめていました。

特別に励ましを与えられたセミナーの生徒や、「バプテスマを受ける決意をした」という求道者、「家族の祈りをするようになった」という会員もみられ、2時間という短い時間ではありましたが大いに信仰が鼓舞される機会となりました。

しかし何より、この大会を主の御心に添ったものとしようとする教会員の一致の精神が最も大きな宝となったように思います。（レポーター：牧瀬十二郎、大阪北ステーク会長）

●1996年5月19日(日), 3,000人が集った大阪東ステーキセンターでの京都・大阪地区大会にて

「完全な福音が 弱い者や純朴な者によって」

大管長ゴードン・B・ヒンクレー

今日わたしは、皆さんのもとにすべての中央幹部と世界中の人々の愛を持ってまいりました。これに加え、わたし自身の愛もささげたいと思います。わたしはこの国と人々に特別な思いを抱えています。

この地を初めて訪れたのは、1960年のことです。当時この大阪には阿倍野、三宮、西宮の3か所に小さい支部があるだけでした。西宮支部を訪問するのにタクシーで1時間かかりました。小さすぎて見つけられなかったのです。

前進する主の業

昨夜の東京での集会には7,000人近くが集いました。その光景を目にして、涙が出そうになりました。30年前には、北海道の室蘭に小さな建物があっただけです。それがアジアで唯一の教会堂だったのです。しかし、今日どこに行っても立派な教会堂を見ることが出来ます。

主の業は前進しています。人々の信仰によって前進しているのです。救い

主は、すべての国民、部族、国語の民、民族に福音を宣べ伝える責任をお与えになりました（教義と聖約42：58参照）。現在155か国に教会が設立されています。どこへ行っても神権を持つ偉大な指導者がいます。偉大な信仰と能力を持つ姉妹たち、聖歌隊で天使のように歌う若人がいます。

神戸の震災のとき、世界中の会員の心は神戸の人々に向きました。彼らのために祈りをささげ、義援金を送りました。皆さんのクリスチャンとしての奉仕に感謝します。一つとなって助け合う、これがイエス・キリストの福音の精神なのです。ともあれ、このような惨事が二度と起こらないように望みます。

福音が回復される4つの理由

主は福音が回復される4つの理由を教義と聖約第1章20節から23節で語っておられます。第1に「すべての人が主なる神、すなわち世の救い主の名によって語るため」です。

第2に「信仰もまた地に増すため」

です。今日皆さんがここに集われているのもその一つの表れです。

第3に「永遠の聖約が確立されるため」です。その聖約は、アブラハムがエホバより与えられました。すなわち、民が正しい生活をするなら祝福されるという聖約です。わたしたちは聖約の民です。この聖約は、わたしたちにも適応されます。この聖約の本質は、バプテスマを受けるとき、聖餐を取るときに更新されます。

第4に、「完全な福音が弱い者や純朴な者によって世界の果てまで、また王や統治者の前に宣べられるため」です。福音は伝えられます。わたしたちは弱い者、純朴な者です。しかし、信仰を使うなら奇跡が起ります。皆さんがここにおられるのは、その奇跡の一つです。

宝のような神権は、限られた人のためにあるのではなく、ふさわしく行使するすべての男性のためにあります。神権は、地上の人に与えられた神の権能です。神の目的を達成するための権能です。軽々しく扱うべきではありません。常にふさわしく生活しなければなりません。義にかなって行使するときに、名誉が与えられます。それはこの神権時代にあって、教会を統治するための権能、力です。祝福するための力です。それらの神権者がすべて、善い夫、父親であるように望みます。自分の妻を尊敬し、清くもてなすように、また子供を愛し、優しく接するように望みます。



ステーキセンター中央で歌う300人から成る聖歌隊。



大阪東ステーキセンターで開催された京都・大阪地区大会。

「わたしの力ではなく、
神の力です」

飛行機の中で本を読んでいましたら、以前にわたしが香港で経験したことが書かれていました。香港の伝道部長が両足を骨折してしまい、入院している間、わたしが伝道部の指揮を執りました。彼は足を切断しなければなりませんでした。彼が祝福を求めたとき、わたしはそのことを知りませんでした。その祝福の中で、彼がまた自分の足で歩けるようになると祝福しました。医者が切断すると言ったとき、彼はそれを拒否しました。祝福の言葉を信じていたからです。それから看護婦たちは、マッサージを毎日長い時間続けました。そして奇跡は起こりました。完全に足が治ったのです。生涯自分の足で歩くことができました。それは、わたしの力ではなく、神の力です。わたしは神の器にすぎません。

皆さんを愛しています。皆さんが祈ってくださることを知っています。皆さんの祈りなしに、わたしたちは働きをなすことはできません。また、わたしたちも皆さんのために祈っていることを、どうぞ覚えていてください。

「天の窓からあふれるほどの祝福が与えられますように」

わたしに与えられた神権により、皆さんに祝福を残します。信仰を持って忠実に歩むとき、天の窓からあふれるほどの祝福が与えられますように、衣食住が満たされますように、天と地の良きものがあるように祝福いたします。

もしこの場に教会員でない方がおられましたら、ためらうことなく申し上げたいと思います。福音を学び、罪を悔い改め、信仰を行使してバプテスマを受け、聖霊を受けるならば、過去に感じたことのないような幸福を覚えられますでしょう。

わたしは、これからほかのアジアの国々を訪れますが皆さんを忘れません。今日この場に來てくださった皆さん、そして各地におられるすべての兄弟姉妹に祝福が注がれますように……。それがわたしの祈りです。□

●1996年5月19日(日)、2,500人が集った
福岡サンパレスでの特別ファイヤサイドにて

人生に目的を与える イエス・キリストの福音という根

大管長ゴードン・B・ヒンクレー

今 皆さんを目の前にして、わたしはこの場に強い力を感じています。以前福岡を訪れたときの集会は、人数も少なく小さなものでした。しかし、この会場に集まった多くの聖徒を見ると、皆さんのことを神に感謝せずにいられません。わたしを支えてくださっている皆さんに感謝するとともに、大きな愛を感じています。

皆さんはいつもわたしたちのために祈ってくださいます。皆さんに知っていただきたいのは、わたしたちも皆さんのために祈っているということです。皆さんのわたしたちに対する愛に感謝しています。

ばらの花のたとえ

(説教壇に飾られたばらの花を1輪手に取り)この花はとても美しいです。しかし、この花の美しさは続かず、やがて消えてしまいます。なぜなら根がないからです。1日か2日後には、枯れてごみ箱に捨てられてしまいます。多くの人の人生はこれと似ています。しばしの間、彼らの生活には美しさがありますが、根がないためにやがては枯れてしまうのです。

わたしはイエス・キリストの福音という根に感謝しています。この根は、わたしたちの信仰の源であり、わたしたちの人生に目的を与えてくれます。皆さんは永遠の父なる神の息子娘であるということが、どういう意味を持つか考えたことがありますか。それは、わたしたち一人一人の中に神聖な何かがあるということなのです。皮膚の色や髪の毛の色に関係なく、わたしたちはこの地上に來るとき、神の神聖な息子娘としての権利を持ってやってくるのです。

神の息子娘であるわたしたちは、い

つか神の前で申し開きをします。1日か2日限りの美しいばらの花でとどまるか、それとも永遠の真理に根ざした者となるか、考えてみてください。わたしたちは、イエス・キリストの福音に根ざすことができます。わたしたちは福音の根によって生きています。そのような状況の下では、人生の目的があります。つまり、わたしたちは生計を立てる以上のこと、すなわち奉仕をしなければなりません。

皆さんもよく覚えていらっしゃると思いますが、主は、最も大切な戒めは何かと聞かれたとき、こうお答えになりました。「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。」2番目に「『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。』これらの二つのいましめに、律法全体と預言者が、かかっている。」(マタイ22:37, 40)

兄弟姉妹の皆さん、これがわたしたちを救いに導く偉大な原則です。神を愛し、互いに奉仕することです。そうすれば、わたしたちが今していることは、より良くなっていきます。今よりももう少し努力してください。わたしもそうします。わたしたちは努力すればできるのです。

祝福をもたらす神権

主はこの神権時代を回復されたとき、偉大な目的を示されました。その目的の1番目は「すべての人が主なる神、すなわち世の救い主の名によって語るため」です(教義と聖約1:20)。神権は教育を受けた一握りの人に限定して与えられるものではなく、すべてのふさわしい男性会員に与えられています。これは主のために語る権能であり、教会の管理運営を行う権能です。

伝道部長も監督もこの権能を通して働いているのです。執事、祭司、教師もそうです。イエス・キリストの教会のために愛と正義をもって働くのです。

また家庭にあっても神権によって、独裁者としてではなく家長として、高慢ではなく愛と正義をもって働くのです。子供や妻を虐待してはいけません。優しく愛に満ちた夫であるべきです。ここにいるすべての男性に思い起こしてほしいと思います。神の権能を持つ者は、夫や父としてどのように妻や子供たちと接したか、天父からその責任を問われるのです。

皆さんの持つ神権には、祝福を与える力があります。わたしの長女は50歳を超えていますが、最近、地域社会で、またビジネスの世界において重い責任を伴う要職に召されました。その長女からわたしに、祝福をしてほしいと電話がありました。娘は事務所にやって来ました。これはわたしにとって、とても感動的な経験でした。娘の頭に手を置いて祝福を与えられるとは、父親として何と名誉なことでしょうか。世の中の男性にはそれができませんが、皆さんにはできます。そして、素晴らしい充足感を得ることができます。

「人を癒したことがありますか」

また、この権能を通して、皆さんには病人を癒す力が与えられています。最近わたしは、あるレポーターからインタビューを受けました。このレポーターは鋭い質問をすることで有名です。彼はわたしにこう聞いてきました。「あなたは今までに人を癒したことがありますか。」「わたしが祝福するとき、神が癒されました」と答えますと、その経験をわたしに話すように言われました。「それは非常に神聖なことなので、世間の前でそれを話したくありません」とお断りしましたが、それでも彼は執拗に聞きたがりましたので、「では一つだけお話ししましょう」と次の話をしました。

わたしの家には1枚の美しい絵が飾ってあります。それは香港に住む女性によって描かれたものです。その絵の裏にはこう書いてあります。「ヒンクレー長老がわたしの目を癒し、救って

くださったことへの感謝の記念に。」しかし、わたしが彼女の視力を回復したわけではありません。主がなされたのです。わたしは彼女の状態が絶望的だったとき、祝福を頼まれました。神聖な神の権能を通して、イエス・キリストの御名により告げられたわたしの言葉を神は聞かれ、彼女のうえに祝福をお与えになりました。

父親の皆さん、正しい生活をして、必要なき愛する人たちのために神権を行使できるように努めてください。それが、この福音が回復された目的の一つなのです。

「信仰もまた地に増すため」

目的の2番目は「信仰もまた地に増すため」です（教義と聖約1:21）。わたしたちの生きるこのすばらしい時代において、神を畏れない悪行があるにもかかわらず、福音が地上に回復され、ふさわしい男性、女性が信仰の道を歩むことを可能にしています。皆さんがここにいるのは信仰があるからだと言えます。

皆さんに福音を教えた宣教師は、信仰とともにこの国にやって来ました。彼らの家族は犠牲を払って彼らを送り出したのです。皆さんはその恩恵を受けているのです。皆さんは信仰を増し加え成長することができます。信仰はこの地において増しているでしょうか。今や福音は世界中に広がり、155か国で伝道活動が行われています。わたしたちが行く所どこでも、人々の生活と心の中に信仰を見いだすことができます。

信仰をもって歩んでください。落胆することがあっても、引き続き信仰を持ってください。人生でどちらに行くべきか迷うときは、ひざまずいて信仰をもって天父に祈ってください。人生で大きな力をもたらすもの、それが信仰です。

「永遠の聖約が確立されるため」

3番目の目的は「わたしの永遠の聖



ゴードン・B・ヒンクレー大管長夫妻（福岡にて）。

約が確立されるため」です（教義と聖約20:22）。神はアブラハムに、わたしはあなたの神となり、あなたの子孫はわたしの民となると約束されました（創世記17:7参照）。この神権時代に、その聖約は回復されました。わたしたちは、天父と御子と聖霊の御名によってバプテスマを受け、一つの聖約を交わします。つまり福音に従い、信仰に基づいて歩むことを約束するのです。

また、毎週聖餐を受け、その聖約を新たにします。すべての人は聖約の下に置かれ、キリストの御名を受け、戒めに従うことに同意します。それに対して主は御霊を下さいます。神殿に行くとき、わたしたちはさらなる聖約を引き受けます。それはこの約束を成就するためです。

「弱い者や純朴な者によって」

「わたしの完全な福音が弱い者や純朴な者によって世界の果てまで、また王や統治者の前に宣べられるためである。」（教義と聖約1:23）これが偉大な教会の伝道のプログラムです。現在、全世界で約5万人が宣教師として召され、働いています。宣教師たちは、弱くて純朴な者と言われると、おもしろくないかもしれませんが、この世の知識で評価すれば、やはり弱くて純朴だと言えるでしょう。しかし、主の御霊により彼らは、福音に耳を傾ける人々を見つけ出します。ちょうど、皆さんが見つげ出されたように、そして、昨年教会員となった30万人以上の人々のようにです。

わたしやあなたは、この約束の一部となれるのです。つまり、この御業が

真実であると分かるように、福音を分かち合い、祈るように人々を招くことができるのです。

ここに教会員でない方がいらっしゃれば、その方に約束したいと思います。福音を学び、イエス・キリストに対して信仰を行使するなら、また自分の罪を悔い改め、この御業が真実かどうかを神に祈り求めるなら、主は聖霊を通して答えを下さり、それが真実であると確信できるでしょう。それからバプテスマを受けてください。そうすると

き、これまでの人生で一度も経験したことのない幸福を味わうことができます。そして、こう言うことができます。「聖霊を通して、わたしは御業が真実であることを知っている」と。また、神が生きておられ、幸福をもたらして下さる御方であることを証することができます。

「わたしの愛を皆さんのもとに」

皆さん一人一人を愛しています。日本に初めて来てから36年、その間何度

も何度もこの国を訪れました。わたしはこの国を愛し、この国の人々を愛しています。そして何にも増して、この国の末日聖徒を愛しています。

わたしの祝福を皆さんに残していきます。天の窓が開かれ、天からの祝福が皆さんに降り注がれますように。皆さんが信仰をもって歩かれますように。わたしの愛を皆さんのもとに置いて行きます。福岡にもう一度来ることができるか分かりませんが、そう望んでいます。皆さんがたを忘れません。□

沖縄の地に初めて 預言者を迎えた ファイヤサイド

5月20日に大管長が来沖してくださるとの知らせを受けたときの沖縄の会員の喜びは、ほんとうに大きなものがありました。戦後、荒廃したこの地に、軍人の末日聖徒によってまかれた福音の種は、大きく生長し、多くの祝福も得ていましたが、いまだかつて大管長の訪問を得たことがなかったからです。

わたしたちは、早速軍人地方部の指導者の方々と相談し、準備にかかりました。当日の集会場である宜野湾市民会館に、参加者全員を収容できるだろうか、駐車場の確保は大丈夫だろうか、大管長の送迎はどうするのか、などなど問題は多くありましたが、主の預言者を身近にし、声を直接聞けるといふ喜びの前に、それらの問題は労苦ではありませんでした。当日は朝から休暇を取って準備した人も多くいました。

当日、空港に着かれた大管長の一行は、ホテルへ向かう途中、ご自分がその地を見だし献堂された教会堂に、突然立ち寄られるというハプニングもありましたが、何事もなく多くの教会員が待つ市民会館に到着されました。会場入り口では、ボーイスカウトの青少年が三指の敬礼でお迎えをし、それを御覧になって、「ボーイスカウトプ

ログラムが活発に行われているのはすばらしいことです。将来教会を背負って立つ神権者をよく育ててください」と指導者に言葉をかけられました。

「ぼくの目は感動の涙で いっぱいになりました」

預言者を迎え、ともに過ごすことができた2時間余りは、短いように思われました。コーラスに参加した青少年の一人は、次のように証しています。「預言者をお迎えしてのファイヤサイドで、聖歌隊に参加する特権を得たぼくは、預言者のために全身全霊で歌い、お話を一言一句漏らさずに聞きました。預言者が帰られるときに歌った賛美歌の『神よ、また会うまで』が今でも心に響いています。歌いながら、ぼくは感動の涙でいっぱいになり、それを止めることができませんでした。そのとき預言者が言われた『皆さんを愛しています』との言

葉に心が清められ、満たされる思いでした。それはイエス様の愛と同じ愛だと感じたのです。ぼくは神様に、預言者が沖縄の地に来てくださったことを感謝せずにはられません。」

ヒンクレー大管長ご夫妻、ワースリン長老ご夫妻、ソレンセン長老ご夫妻が残して下さった深い愛に、一行が会場を後にされてからも、全員静かに余韻に浸るように起立していました。当日の参加者は2,122人を数えました。軍人地方部、沖縄ステークの会員がともに日本語、英語、さらに両母国語で合唱するさまは、この地上での煩いを離れ、主のもとにひざまずいて賛美しているかのようでした。故郷を離れ、この地に駐留する軍人地方部の方々にも、特別な愛の気持ちが伝えられました。(レポーター：吉澤利一、沖縄ステーク広報ディレクター)



沖縄県宜野湾市民会館でのファイヤサイドで説教するゴードン・B・ヒンクレー大管長。

●1996年5月20日(月), 2,122人が集った 沖縄県宜野湾市民会館での特別ファイヤサイドにて

皆さんへの4つの提案

大管長ゴードン・B・ヒンクレー

沖縄を最初に訪れたのは、36年前の1960年のことです。それは今見る光景とはまったく違うものでした。本質的には、米軍基地の島だったのです。このような成長を目にできるのは、すばらしいことです。

36年前には、沖縄のどこにも教会堂がありませんでした。かまぼこ型の兵舎があるだけで、そこに宣教師たちが住み、集会がなされていました。沖縄には支部が一つあるだけだったのです。時は変わりました。今ここにいるような大勢の会員が集うようになるとは思いませんでした。このような変化をうれしく思います。

「沖縄に来るときには、いつも敬虔でありたいと思っています」

わたしは沖縄に来るときには、いつも敬虔でありたいと思っています。恐らくこの地は、地球のほかのいかなる土地と比べても、より多くの流血を見た土地であるに違いないのです。わたしは、この島を旅行するときに頭を垂れて亡くなった人々に敬意を払おうとの思いに駆られます。

わたしは、イエス・キリストの福音に心から感謝しています。福音は平安をもたらし、お互いに対する愛と尊敬の念を抱かせてくれるからです。その福音が今この地に確立されようとしています。それによって民が祝福されるのです。

わたしは今回、^{ホンコン}香港神殿を奉獻するために参りました。わたしは自分にこう言いました。この訪問を単に神殿を奉獻するだけにとどめてはならない、アジアのほかの地域にいる友人を訪問し、わたしの証と祝福を残して来るべきだと。そのために非常に過密なスケジュールとなりましたが、無事に全行程を果たせるように望んでいます。

わたしが皆さんに知っていただき

いたのは、わたしが皆さんを愛しているということです。皆さんが、わたしたちのために祈ってくださっていることを知っています。それに対して感謝いたします。わたしたちも皆さんのために祈っています。そして主が皆さんを祝福してくださるように祈っています。この沖縄の人々が経験したような惨劇が、今後ないようにお祈りいたします。皆さんが主からの祝福を受けられるように、わたしからの祝福を残します。いつも衣食住が満たされるように、主に感謝することがたくさんあるように祝福します。

家庭の中に 平安と愛があるように

また、皆さんが行うべき4つの事柄を提案したいと思います。それらの事柄を行うなら、皆さんの心に、また家庭の中に平安と愛があることを約束いたします。そして皆さんの子供たちが正しい真理に満ちた生涯を送ることができることを約束いたします。

まず提案の第1は、家族の祈りです。この教会のすべての家族は、毎日祈る必要があります。個人として祈りをするのも大切ですが、それと同様に家族として祈るのもすばらしいことです。兄弟姉妹、祈ってください。信仰をもって天父に祈ってください。イエス・キリストの御名によって祈ってください。子供たちのためにそれ以上のことはできません。子供たちにも順番を決めて祈りをさせてください。彼らの受けた祝福に対する感謝を述べさせてください。もし若いときからそれを覚えるなら、感謝の心を持って成長していくでしょう。

第2に家庭の夕べを行ってください。イザヤはこう言いました。「あなたの子らはみな主に教をうけ[る。]」（イザヤ54：13）それは戒めであり、祝福です。

第3に^{せいさん}聖餐会に出席してください。聖餐を取るとき、聖約を新たにすることです。それによって主の御名を受けることと、戒めを守ることを約束します。それに対して主は^{みたま}御霊を与えてくださいます。

什分の一の祝福

第4に什分の一を納めてください。それに対する主の祝福は、大いなるものです。主はこの戒めを守れるように助けてくださいます。ある貧しい兄弟は「什分の一を納めることができない」と妻に言いました。すると妻は、「教会に入るときに約束しました。納めなければなりません」と答えました。兄弟は「では、払ってからどうしたらいいのだろう」と言うと、妻は「わたしも分かりません。でも主の御手にゆだねましょう」と言いました。そしてなけなしのお金を監督に渡した後、帰りを歩きながら「もう何も買うお金がない。どうしたらいいんだろう」と言うと、妻は「主はわたしたちを決して見捨てられることはありません」と言いました。

次の日、兄弟が仕事に行くと上司から呼ばれました。そして「あなたをずっと見てきました。とてもいい仕事をしています。あなたの給料を上げましょう」と言ってくれました。そしてその額を見ると、昨日支払った什分の一とまったく同じ額だったのです。

わたしは皆さんに、什分の一を納めるなら、お金持ちになるとは言いません。しかし、主はあふれるばかりの祝福を、天の窓を開いて与えてくださいます。わたしたちには、この戒めに従う能力が与えられています。これはわたしの証でもあります。

これら4つのことを行うならば、幸福になります。わたしたちがお互いへの感謝の気持ちを深く感じられるように、皆さんが再び神と会う日まで、いかなる状況にあっても正しい行いをしたいという望みをいっそう持てるようにお祈りしています。□

*

新伝道部長の紹介

札幌伝道部のポール・H・ベックストランド部長（1994年7月着任）は、夫人の健康上の理由で任期途中で帰国したため、大管長会は、新たにゴードン・R・保喜部長を招いた。保喜部長は、7月1日付けで着任した。

札幌伝道部
ゴードン・R・保喜部長夫妻



ゴードン・R・保喜（46歳）。召されたときは、テキサス・マクアレンステーク、マクアレン第1ワード所属。高等評議員を務めていた。これまで、神殿儀式執行者、ステーク副会長、ステーク幹部書記、監督、副監督（2度）などを歴任。株式会社ホキ農園副社長。ブリガム・ヤング大学で地質学を専攻。ユタ州マーリーで

ビッド・英世・保喜、エーミー・田村・保喜夫妻の間に誕生した。小山千恵子姉妹と結婚し、3人の子供がいる。召されたとき、千恵子夫人は、ワード初等協会副会長およびピアニストを務めていた。これまで、ワード扶助協会会長、同副会長、ステークおよびワードの初等協会会長、ステーク若い女性副会長、日曜学校ピアニストなどの責

任を果たしてきた。ブリガム・ヤング大学およびテキサス大学大学院卒業。テキサス大学パン・アメリカン分校日本語講助、また松下電気の翻訳者兼文化コンサルタントとして働いた。日本で小山昇のほる、百合子（旧姓：斉藤）夫妻の間に生まれた。□

再組織された仙台伝道部盛岡地方部長会

1996年4月14日、仙台伝道部のリチャード・M・オースチン部長管理の下に盛岡地方部大会が開催され、1987年より地方部長の責任を果たしてきた阿部国雄兄弟が解任され、新たに高屋敷忠助兄弟（写真左）が召された。第一副地方部長には、千田勝彦兄弟（写真右）が召され、その任に当たる。



祈りや聖典は、福音の実践へと 駆り立てる何よりも大切な宝

盛岡地方部長
高屋敷忠助

わたしが福音に接したのは、札幌に住んでいたときのことです。当時自炊をしていましたので、夕食準

備中の訪問客は、喜ばしいものではなく、ましてキリスト教には興味もなく「またにしてしてください」と宣教師の訪問を断りました。ところが宣教師は、言葉どおりに日を改めて訪ねて来たのです。寒い中の訪問でしたので、

暖をとって帰ってもらおうとの思いから話を聞いたのが、福音を学ぶ始まりでした。

宣教師の誠実さに打たれ

そんなわたしの態度を改める出来事が起こりました。仕事で約束の時間に約1時間も遅れ、宣教師はもういないだろうと思いついて帰って来たわたしを彼らが待っていたことでした。宣教師の誠実さに感ずるものがあり、レッ

ッスン開始から半年後にバプテスマを受けました。バプテスマのときに感じた心の底からわき起こる喜びや熱い思いを、今も忘れることができません。当時の札幌第三支部の会員として迎えていただいたわたしは、多くの兄弟姉妹から助けと励ましを頂きました。

ある日曜日、安息日に対する深い理解もなかったわたしが、仕事で教会を休んだとき、ある兄弟が訪ねてくださり楽しく語り合いました。その中で安息日の大切さを話され「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」(マタイ6:33)という聖句を引用され、証してくださいました。

建築宣教師として奉仕

わたしはそのような宣教師や兄弟姉妹の福音に対する姿勢や行動に接し、同じ年齢でありながら、なぜ自分の時間や金銭を犠牲にして、人のために働けるのか知りたいと思いました。それには自ら行動を起こすことだと考え、建築宣教師としての奉仕活動に参加しました。熊本支部の教会堂の建築に携わり、恵みを受けました。このとき、教会堂の基礎のように信仰の土台を小さいながらも築くことができました。

教会員となって、それぞれの地での信仰生活は、とても貴重な経験となり

ました。ともに働いた同僚の方々、献身的に働かれる兄弟姉妹の姿に学ばせていただき、信仰の糧とすることができました。今信仰をもって歩むことができるのは、愛をもって接して下さった宣教師や兄弟姉妹のおかげであり、また皆さんの神様への信仰のおかげだと思えます。

地域活動と教会行事の 兼ね合いの中で

わたしは、戸数28戸が40年間変わらない部落の農家の長男として生まれました。現在、隣接する地域の開発が進み盛岡市のベッドタウンとなっています。しかし、地域活動は以前と変わらず28戸で行われる旧住民意識のある所です。地域行事、それにかかわる役員、また地域郷土芸能保存と、自分もできる範囲で参加してきました。それらの活動には、教会行事との兼ね合いを調節しなければならぬこともあります。そんなときはこれも伝道と考え、地域の人々と親しむ方を選ぶこともあ

ります。

多くの活動は、安息日や知恵の言葉を考えて、前日に作業を行ったり、朝早く地域の人々とともに活動を行ったりします。集会や活動後は、お茶やお酒が出る人が多いからです。今では準備する方が、お茶の代わりに白湯、お酒の代わりにジュースを用意していただきます。郷土芸能は、わたしがこの地域に生まれなければ、かかわることのないものです。この地域に生を受けたのは何かしら御心があると思ひ、皆さんと楽しく行っています。皆心の温かい善い人々です。いつか福音や教会について深く興味を持ってくださると望み、信じながら行っています。

祈りや聖典は福音の友であり、福音の実践へと駆り立てる何よりも大切な宝とっております。それによって神様のもとへ帰る備えができていくと思います。大切な人生、良い実が収穫できるように望みながら歩んで行きます。(たかやしき・ちゅうすけ)



高屋敷ご家族



郷土芸能の沢目獅子踊りは、都南村に数百年前から伝わる伝統芸能。父も獅子役として踊っていた。そしてわたしも獅子役、息子二人も獅子役、一八役を毎年努め、盛岡市郷土芸能発表会、盛岡さんさフェスティバルなどに参加している。

高屋敷忠助地方部長 の紹介

1955年岩手県紫波郡都南村に生まれる(現盛岡市)。道都短期大学を卒業し、現在測量設計事務所に勤務。1977年札幌にて改宗し、1979年串山多喜子姉妹と結婚、男2人女1人の子供がいる。盛岡地方部盛岡支部に所属。これまで、支部長、長老定員会会長、若い男性会長などの責任を果たしてきた。

6月に召された専任宣教師

第201期生 13人



前列左から1-7, 後列左から8-13

〈名 前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 吉田有里	名古屋S / 岐阜W	福岡伝道部
2. 川端学子	名古屋M / 石川D / 金沢B	岡山伝道部
3. 渡辺ナオミ	神戸S / 北六甲B	仙台伝道部
4. 武長三紀子	名古屋M / 福井D / 敦賀B	仙台伝道部
5. 白保ゆかり	大阪東S / 吹田W	仙台伝道部
6. 稲垣佳美	東京東S / 鎌ヶ谷W	神戸伝道部
7. 江島かおり	BYUハワイ第2S / 第2W	岡山伝道部
8. 中村基典	名古屋M / 豊田B	岡山伝道部
9. 山田拓也	仙台S / 長町W	福岡伝道部
10. 小阪富美	大阪堺S / 和歌山W	福岡伝道部
11. 占野美由紀	東京東S / 小岩W	福岡伝道部
12. 宮城哲夫	東京東S / 八千代W	札幌伝道部
13. 小松靖也	大阪堺S / 堺W	福岡伝道部

S : ステーキ, M : 伝道部, D : 地方部, W : ワード, B : 支部

役員の変動

1996年5月14日から1996年6月13日まで
に管理本部会員統計記録課に通知のあ
った役員の変動 (敬称略)

- 札幌ステーキ滝川支部
新支部長: 松倉典之
- 名古屋ステーキ野並支部
新支部長: 塚原俊英
- 名古屋西ステーキ犬山支部
新支部長: 津田清春
- 福岡ステーキ飯塚支部
新支部長: 田中克幸
- 福岡伝道部鹿児島地方部鹿児島支部
新支部長: 四元 勇

皆さんの原稿を
募集しています

◎ご投稿の際には連絡先 (住所, 電話
番号), 教会での責任 (役職名), 所属
ユニット名を記入し, 写真を同封のう
えお送りください。原稿は一部手直し
させていただくことがあります。また,
掲載までに時間がかかる場合もありま
すので, ご了承ください。

◎お願い——海外に召される日本人宣
教師たちを紹介いたします。伝道の召
しを受け取り次第, 編集室に写真を添
えてお知らせください。(氏名 [フリ
ガナ], 伝道部名, 召された月を明記)

◎あて先: 〒106 東京都港区南麻布
5-10-30 末日聖徒イエス・キリス
ト教会 『聖徒の道』編集室

☎03(3440)2666 FAX 03(3440)3275

海外に召された日本人宣教師



浜田英之
カナダ
バンクーバー伝道部
1995年2月
大阪S / 大阪W



内田典一
ニューヨーク州
ニューヨーク北伝道部
1996年7月
我孫子S / 水戸W



郡司知枝
ソルトレーク
テンプルスクエア
訪問者センター伝道部
1996年5月
我孫子S / 水戸W